
夏の日のノスタルジア

雪宮鉄馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の日のノスタルジア

【Nコード】

N0841N

【作者名】

雪宮鉄馬

【あらすじ】

ある事件がきっかけで、失意のうちに道を見失った野崎秋人は、二十年前に離れた故郷「夏八木町」を訪れる。そこで、幼なじみとともに、一人の少女を助けようと、冒険の旅をした遠い日の思い出を辿り……。

「冒険」と「再生」をテーマに描く、シリアスな現代小説です。

1・深夜の急患（前書き）

はじめまして&こんにちわ。 雪宮鉄馬です。

前作とは打って変わっての、シリアス路線の小説となる今作は、コンセプトを拙作「Belong」とは異なるロードムービー的アプローチと、「夏」らしい冒険の物語を描きたいと思います。

導入部である第一章では、ジャンルの「冒険」らしいシーンはありませんが、ご了承ください。

是非、最後までお付き合いいただけたなら、幸いかと存じ上げます。どうぞよろしくお願いいたします。

1・深夜の急患

気だるい疲れだけが、自分のまぶたを重くする。クッションのほとんど効かない、簡易寝台代わりのソファに横たわると、地球の重力が三割り増したように、重くのしかかり、背中が痛い。仮眠室へ行けばいいものの、その気力さえ、残されてはいなかった。

眠る前に、今何時なのだろうと、天井を仰いだが、雑然としたデスクと資料の埋め尽くす部屋の中から時計を探す気にはなれない。とつくに勤務時間は過ぎていくかもしれないし、まだ、勤務時間半ばかもしれない。でも、それはどうでもいいことだった。

どうせ、今日も家には帰れない。もうどのくらい、自分のベッドでゆっくりと睡眠をとっていないだろう。もしかすると、もう家の場所さえ思い出せないかもしれない。もっとも、給金の割りに狭苦しい八畳一間の、学生寮のようなアパートに帰る気にはなれない。それに、泥のように眠るだけなら、この背中が痛くなるような仮眠室のパイプベッドも、ソファだって、高級なクッションの効いたツインのベッドも、なんなら診察台の上だって、そうたいして変わりはない。眠る場所と時間さえあればそれでいいのだ。

ぼくは、まどろみの中でそんなことを思い、瞳を閉じた。間もなくして、全身を包み込むようなドロドロとした睡魔が襲ってくる。目覚めたときには、また喧騒の中に放り込まれることに、一抹の不安さえ感じながら。

と、その時、部屋の扉が乱暴に開かれ、睡魔に飲み込まれて三分足らずで、ぼくの眠りは一気に遠のいた。

「野崎先生！ ホットラインです、起きてください！」

まるで風船でも割ったかのような声の主が誰であるか、瞳を開けて確かめるまでもない。看護師の平沢さんだ。平沢さんは、シューズの踵を鳴らしながら、ぼくのところまで駆け寄ってくると、肩を驚づかみして強く揺さぶってくる。

「ああ。起きるよ、後何分だ？」

ぼくは気だるさをまとったままの声で起き上がりながら尋ねた。もちろん「後何分」とは、急患の到着までの時刻を尋ねたつもりだった。しかし、平沢さんはきょとんとしてぼくの顔を見る。ぼくは、睡眠不足の頭痛を抑えながら、もう一度平沢さんに問いかけた。

「急患がここに来るまで、後何分だ？」

「五分弱です！」

平沢さんは、ポニーテイルに結んだ髪をびよこさせながら、時計を探す。しかし、雑然とした部屋の中に時計らしきものが見当たらない。困り顔の平沢さんを前に、ぼくは立ち上がり眩暈によるけそつになる感覚を覚えながらも、

「よし、患者を受け入れる。直ちに処置室の準備、カルテの準備。

仮眠中のやつら全員たたき起こせ。昨日運び込まれた、骨折の患者を第一整形外科病棟に移して、ベッドを空ける。それから、七尾先生はどうした？」

と、矢継ぎ早に指示を飛ばした。

「七尾先生なら、娘さんが高熱を出して、早退されました。さつき、先生が仮眠を取る前に、言っただじゃないですか」

「ああ、そうだった。それにしても、今日は、搬送者数の過去最高記録更新日だな……」

「不謹慎なこと、言わないでください。それに、日付はとつくに変わってますよ」

冗談のつもりで言ったわけではない。朝から幾人もの患者がこの救命病棟に運び込まれ、容態の軽重を問わず処置に追われて、多忙の中に浸されていたのだ。ついでに言えば、やっと訪れた仮眠の時間さえ、あつという間に終わってしまったことへの、ささやかな愚痴だった。

「しっかりとってください、今センター長が非番返上でこっちにむかっています。それまで、夜勤勤務してる救命のドクターは、野崎先生一人なんですから！　ぼーっとしてたら蹴っ飛ばしますよ！」

平沢さんは、そう言うところの背中を思い切り叩いた。おかげで、頭の片隅に残っていた眠気が、虚空へと押し出されていく。蹴っ飛ばされないだけマシだと思えと言わんばかりに鼻で笑うと、平沢さんは直ちに踵を返し、ドアを閉めもしないで、処置室の方へと走っていた。

平沢さんは、ぼくより五つ年下の二十五歳の看護師。歳の割りに少し幼く見える外見を気にしつつ、こんな職場じゃ、婚期を逃してばかりだと、それが口癖のような彼女は、物怖じしない性格で、医師であるべくに対しても、遠慮と言う言葉を知らない。それは、いい意味で言えば、気兼ねなく接することが出来る仲間だといえる。実際のところ、仕事のできる彼女のことは大いに信頼している。後は……軽い暴力さえなければいいのだが。

パタパタと、平沢さんの足音が遠のいていくのを聞きながら、ぼくはひりひりする背中をさすった。さて、仕事は待ってくれない。多少名残惜しい寢床のソファに、後ろ髪引かれながら、ぼくも部屋を出る。廊下に面した窓からは、すっかり夜も更けていると言うのに、湿り気を帯びた季節特有の熱気が伝わってくる。

そうか、今年も知らないうちに夏が来たんだな。そう思いながら、ぼくは窓の外に広がる夜景を見つめた。

周囲からは「城のようだ」と言われる、広大な敷地を持った湾南^{わんなん}大学附属病院。典型的な大学病院で、さまざまな病気や怪我に対応できる科がひしめき合っており、その中の一つがこの「救急救命センター」だ。市内では唯一の、三次救急を備えており、次々と運び込まれてくる患者が後を絶たない。

しかし、昨今、他の医院も抱えているように、医師不足問題が深刻化している。理由はさまざまで、仕事内容とリスク、報酬が均等でないことや、患者のモラルの低下、更には医師の中には救命救急を「コンビニ医療」と蔑むヤツらまでいる。それは、当センターも例外ではなく、事実として、常勤の医師はセンター長を含め、七尾先生、そしてぼくの三人しかない。完全にキャパシティ・オーバ

ーと言わざるを得ないが、それでも患者は救いを求めて、今日もやってくる。

気合と疲労が完全に見合っていない異常な状態のまま、忙しさに追い立てられる気分は、それほど良いものとは言えない。しかし、病院から伸びる長いコンコースに、救急車の回転灯が見えれば、愚痴を言うことも、疲れに身を任せることも許されないことを、ぼくは知っている。

「先生、早くっ！！」

平沢さんが、搬入口へと走りながらぼくを呼ぶ。遅ればせながら、他の看護師たちも走ってくる。サイレンの音を耳にしながら、ソファに寝転がったせいで術着がみつともなく皺になった、と場違いなことを思いながら、ぼくは平沢さんたちの後を追いかけた。

病院の裏口に設けられた、救急患者の搬入口。まるで、何か恐ろしいものでも迎え撃つような、神妙な面持ちで、ぼくたちは搬入口で救急車を待ち構えた。ややもすれば、耳に痛い救急車のサイレンと、目にちらつくような赤い光が、深夜の闇を切り裂くようにやってくる。救急車は、急ブレーキさながらに搬入口の前に横付けすると、リアのドアを勢い良く開き、白いヘルメットを被った救急隊員が飛び降りた。そして、担架が降ろされる。

「患者は、^{のりもと}則本マサキさん。^{みぎかたいがいそく}年齢二十一歳、男性。バイクで国道を運転中事故に逢い、^{みぎかたいがいそく}右下腿外側を開放骨折。全身打撲および、患部複雑骨折の疑いアリ。意識レベルは、JCS100」

救急隊員の義務的な報告に、ぼくは眉をしかめた。担架の上でぐったりと横たわる、季節に似合わないライダージャケットの青年。特にひどい、右足の傷からは白い骨が^{こっ}筋を^{きん}食い破って露出し、だくだくと血の色にぬめりを帯びていた。

だが、それよりもぼくが気になったのは、意識レベルが非常に低いことだった。その疑問が伝わったのか、救急隊員はこちらに視線を送ると、声を潜めて、

「すでに、こちらに受け入れてもらう前に、三つの病院で受け入れ

を拒否されました。通報からここまで、二十分以上も掛かっています」

と、報告に付け加える。

「担架移します！」

平沢さんが声を張り上げた。すかさず、「いち、につ、さん！」と掛け声よろしく、ぼくと平沢さん、それにほか二名の看護師で患者を、救急車の担架から、センターの担架へと移し変える。

「則本さん、則本マサキさん。聞こえますか？」

処置室へ向かう長い廊下で、看護師たちとともに担架を押しながら、ぼくは必死に患者の名を呼びかけた。しかし、意識レベルから、応答はないことは分かっている。ペンライトを患者の目に当てる。瞳孔の散大はまだ認められない。手首に当てた指先から、脈拍も微弱だが感じられる。

「平沢さん、すぐに手術の準備！」

ぼくは、用意すべき薬品の名前と用量を列挙しつつ、処置室の自動扉をくぐる。術中に血が飛び散っても、その視覚的なショックを和らげるための、薄緑色の壁に囲まれた、部屋の隅。薬品の棚の間に、掛け時計を見つける。

時刻は午前二時。

無駄足になるかもしれないのに、こんな時間にたたき起こされたセンター長を哀れに思いながらも、骨折の治療だけであれば、それほど難しい手術でないことに、場違いな安堵感を覚えていた……。

『次は、夏八木^{なつやぎ}。夏八木。お降りの方は、お氣をつけて、お忘れ物のないようお願いします』

何故、電車の車掌という人は、こうも聞き取りにくいような喋り方をするのだろう。一説には、車内のおしゃべりと混同されないように、鼻に掛かった喋り方を身につけるのらしい。だが少なくとも、ぼくはその声のおかげで、夢から目覚めた。

イヤな夢を見て、動悸が激しく、首筋の辺りにひんやりとした汗

を感じる。あれは、ひと月前の……。

ぼくはズボンのポケットからハンカチを取り出すと、それで首筋の汗を拭った。車窓に映る景色は、夏の昼間らしい、ギラつく太陽で眩しく見える。遠くの山々から生えるような夏雲、青さを際立たせた空、それらを映しこむ、ウォーター・フロントとでも言いたくなるような、どこまでも続く水耕田。稲の穂は、まだその鎌首をもたげてはいないが、青々として風にそよいでいる。

まだ午前中だからだろうか、車内におしゃべりがこだまするほどの乗客はいない。きこえてくるのは、夏休みの朝練帰りの高校生の声を殺したような笑い声くらいだろうか。その隣に、親子。さらに揺れるつり革の向こうに、主婦、会社員といった、つながりのない客たちがまばらに咳に座っている。誰も、車掌のアナウンスに耳を傾けてなどいないだろう。ぼくと同じように、ぼんやりと窓の外を見つめている。

しかし、窓の外を眺める想いは違う。ぼくにとって、窓の外を流れる風景は、二十年ぶりに見る、ふるさとの景色だった。

やがて、列車はブレーキをかけ始める。キィキィと、レールと車輪がきしむ音が聞こえ、列車は小さなホームへと停車した。そして自動扉が開くと、むせ返るような夏の熱気が車内を席卷していく。辺りを見回しても、こんな田舎の駅で降りる乗客はいない。みな一様に、早くドアが閉まれば良いのにと、開け放たれた乗降口を睨めつける。

『夏八木』。駅舎に掲げられた駅名の看板にそう書かれている。この田園広がる片田舎の町の名前だ。逆に言えば、この町には駅はここ一つしかない。あとは、一本の線路が、ただひたすら真っ直ぐに隣町まで伸びているだけだ。どのくらい真っ直ぐ伸びているのか、ぼくは……ぼくたちは知っている。

あの日の思い出を辿るため、そのためにぼくはここへ来たんだと、大きなポストンバッグを握り締め、ぼくは独りホームを踏みしめた。

1・深夜の急患（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

2・ヨンちゃん

「今時無人駅もめずらしい」とか「よく廃線にならなかったな」などと、不遜で勝手なことを思うのは、普段自分が、忙しない喧騒の中に暮らしているからで、むしろ、駅の向こうに広がる田舎町の、のどかな風景の方が、輝いて見えるような気がした。

駅を出ると、小さなロータリーがあり、更に道は商店街の方へと延びている。商店街といっても、アーケードもなければ、高いビルなど一つもない。道の両端に、瓦に夏の太陽を輝かせた、生活雑貨店や食料品店がの軒が並ぶだけで、これといって賑わいを見せてはいない。「ド」がつくくらい田舎らしい過疎に、寂れていると言った方がいいのかもしれない。ただ、ぼくはそれとは全く違う感慨を持っていた。

夏を彩るセミの鳴き声を背に、炎天下を歩けば、右手に見える、脂っこいコロッケが売りの精肉店も、い草の匂いが心地よい畳店、金盥や鍋が所狭しと並べ立てられた金物屋、「モダン・ブチック」と言っている時点で流行から逸脱した衣料品店も、まるでセピア色になったぼくの二十年前の記憶と変わっていないことに気付く。

そう、この街だけが二十年前で時を止め、ぼくの帰りを待っていたかのような。懐かしさに、ぼくは胸がいつぱいになった。どうして、二十年前にこの街を離れたぼくを、この街は温かく迎え入れてくれるのだろうか……。それは、ここが生まれ故郷だから、と言う答えが出る前に、通称「バス通り」と呼ばれた、街で一番大きな県道沿いに出たところで、ぼくの心に突然冷たい風が吹いた。

もちろん、季節は夏真っ盛り。汗が額から流れ落ちはするものの、寒気を感じることもなんてありえないはずなのに、ぼくはゾツとする郷愁に浸っていたぼくの目の前に現れたのは、コンビニエンスストア。二十年前までは、こんなものはなかった。青色の看板も、昼間から煌々と灯りをたく四角い店舗も、商店街の外れとはいえ、田舎

の風景には不釣合いだと、思う。

そりゃ、そうだ。十年間も変わらないものなんて、この世にはない。ぼくが大人になったように、この街も時間を刻んだ結果、ここにコンビニが出来たとしても、それは不思議なことではない。ただ、懐かしさに綻ぶ心が、一気に現実に引き戻されるのは、あまりいい気がしなかった。

そういえば、ここにあったのは……。ふと、記憶を手繰り寄せる。

「あれ？ シュウちゃん？ おまえ、野崎秋人のやまあきひとだろ！？」

思案に気を取られていたぼくは、コンビニの中から駆けて来た男の気配に気付いていなかった。不意打ちのように、突然声をかけられ、コンビニの前に棒立ちするぼくは、「わっ」と思わず驚きの声を上げてしまう。

「なんだよう、そんなに驚くことはないじゃないか」

と、親しげな口調でぼくの顔をニコニコと覗き込むのは、コンビニ店員の制服を着た、ぼくと同じ年くらいの男だ。メタボリックになるには、まだ早い年齢にもかかわらず、すでに下腹がでっぷりとして窮屈そうだ。さらに、顎の周りにも余分な脂肪がつき、二十年前とはかけ離れてしまった輪郭に、かつての面影を探すのは大変だった。その男のことを忘れるはずもなかった。なぜなら、彼は約三十年来の幼なじみなのだ。物心つく前から、ともに野山を駆け回り、一緒に笑い、一緒に叱られて、一緒に泣いた、竹馬の友。今でも、年賀や折々の季節の手紙などで、直接顔をあわせることこそないが、連絡を取り合ってはいる。

「ヨンちゃん！？ おおっ、ヨンちゃんだ！ 突然、現れるからびっくりしたじゃないか」

ぼくの顔に笑顔が宿る。すると、すっかり容姿の変貌してしまつたヨンちゃんこと、杉浦四郎すぎのうしろの顔も綻んだ。

「そりゃこつちの科白だ。亡霊みたいな顔して、ウチのコンビニの前に突っ立ってりゃ、イヤでも目に付くさ。それが、十年来連絡もよこさない、親友なら尚更だ」

そう言つと、ヨンちゃんはぼくの背中を、無遠慮に何度もはいた。もちろん、友情の証と、嬉しさを表現してのことなのだろうが、ぼくの脳裏には看護師の平沢さんにそうされるような感覚を覚えてしまう。

「とにかく、積もる話もある。入れっ！　ここじゃ、暑くてかなわん」

と、ヨンちゃんは有無を言わせないといった具合に、ぼくの手を強引に引っ張って、コンビ二の中へ連れ込む。来客を知らせるベルの音とともに、アルバイトの子なのだろうか、高校生くらいの女の子がレジの向こうから、少しだけ戸惑った顔をしながら、「いらっしやいませ」と定型の言葉をくれる。

「コイツは客じゃない。俺の親友だ。ちょっと仕事サボるから、後頼むな」

「えっ？　杉浦店長っ！？」

戸惑うバイトの子に「今日だけ時給五十円アップしてやるから」と言い残すと、ヨンちゃんはずいずいとぼくを店の奥に引っ張り込んで。

賞品棚の間を抜け、一番奥にあるスタッフ・オンリーの扉を開くと、そこは小さな事務室だった。店内と同じく、空調が良く効いていて、流れ出た汗が一気に冷やされる。

「その椅子にでも座って、ちよっと待ってろ」

ヨンちゃんはそう言つと、事務室を出て行く。ぼくは、所在なさにポストンバッグを床に置くと、小さな丸椅子に腰掛けた。すぐにヨンちゃんは戻ってきたが、その両手には売り物らしきペットボトルのお茶が握られていた。

「このあたりは、何にも変わらないだろう。発展とは縁遠い田舎だからな。それにしても、二十年もの間、顔一つ見せなかったのに、突然やってくるなんて、何かあったのか」

「まあ、そんなところだ」

ぼくは濁すように返事をする、ヨンちゃんからペットボトルを

受け取った。先ほどまで冷蔵庫で冷やされていたらしいお茶は、僅かな渋みとともにばくの渴ききった喉を潤していく。思えば、電車に乗ってからこの街に着くまでの、三時間以上、水はおるか何も口にしていないことに気付いた。

「一度も顔を見せなかったんじゃないよ。親父の都合で、あつちに転校してからは、この街が遠すぎたし、それによそ者のような気がしてた」

「よそ者って……ここはお前の生まれ故郷だろ。それに、十歳まではここで俺たちと一緒に過ごしたんだ。それに変わりはないだろう」

「まあ、そうなんだけどな、子ども心に割り切れなかったんだよ。」

それよりも、ヨンちゃんが店長ってどういうことだよ。ここ、二十年前まではコンビニじゃなくて、ヨンちゃんの祖母ちゃんの駄菓子屋だったろ？」

「ああ、それは三年前までの話だ。今時、駄菓子屋で食っていけるご時世じゃないし、それに、祖母ちゃんは三年前にポックリいったよ。だから店畳んで、今は、こうしてコンビニやってるよ。自宅は郊外に新築。嫁と一歳の息子、それに親父とおかんの五人で暮らしているよ」

ヨンちゃんが事も無げに言う。

「二十年か……」

ペットボトルを事務机に置いて、一息つく。

「あの頃、ヨンちゃんたちとつるんで、バカみたいに街の端から端まで駆け回っていたのが、昨日のことのようなのに、それでも、二十年は短いようで長い時間だったってことか。それにしても、ヨンちゃん」

ぼくは、向かいに座るヨンちゃんのお腹を指差した。

「しばらく見ないうちに、まあご立派なお腹になったな。あの頃、ガリガリで骨と皮だけみたいだったのに、まるで別人のようじゃないか」

「言うな。日ごろの運動不足が祟ったんだよ」

「違っだろ、幸せ太りじゃないのか？」

「それも……ある」

と言つて、ヨンちゃんはぷうつとふき出した。よほど、嫁のことを愛しているのか、生まれて一年の長男が可愛いのか、取りとめもなく、幸せそうなヨンちゃんの家族自慢が始まった。羨ましく思う気持ちはあるけれど、それにも増して、親友が幸せであることはこの上なく嬉しいことでもある。ぼくは、そんなヨンちゃんの話に、しばらくの間耳を傾けることにした。

「そういう、シユウちゃんだって、不健康そうじゃないか。ちゃんとメシ食つてんのか？　いくら、医者が忙しいからって、『医者の不養生』なんて洒落にもなんねえぜ。そんなに、大学病院の先生つてのはご多忙なのか？」

たっぷり三十分、嫁との馴れ初めから、現在に至る杉浦家の始まったばかりの歴史を語り明かしたヨンちゃんが、不意に家族自慢からぼくの方へと、話を方向転換してくる。

「まあね。それよか、リコは？　元気にしてるのか？」

ぼくがわざと話題を逸らしたのは、ヨンちゃんにも伝わったのだろう。怪訝な顔をしながらも、ぼくがそれ以上聞くな、と言つていくように見えたのかもしれない、ヨンちゃんはフッと小さく笑うと、「俺たちの母校『夏八木小学校』で教師をやってるよ。今じゃ二児の母だよ。こっちへ里帰りするたびに、誰かさんとは違って顔を出してくれる」

と、皮肉めいた口調で言った。もちろん、その「誰かさん」とはぼくのことだ。

リコというのは、ヨンちゃんと同じくぼくたちの幼なじみの女の子で、名前を高瀬梨花たかせりかと言う。曲がったことが大キライで、四角四面な女の子だったが、腕っ節はぼくたち三人の中でも一番強く、どちらかと言えばリーダー格と言つても過言ではなかった。

「幸せにやつてるなら、それでいいさ。ふうん、あのリコが教師か。何の意外性もないなあ」

と、感慨深くぼくが言うと、突然ヨンちゃんは眉をしかめた。

「聞いてないのか？ さては、お前リコちゃんとも連絡とってなかったな」

ヨンちゃんと同じように、彼女からも年賀などの手紙は今でも欠かすことなく届いている。四角四面だった彼女らしく、きれいに整った手書きの葉書は印象深い、彼女にもなにひとつ返事を返したことがない。

無言を肯定と受け取ったヨンちゃんは、口をへの字に曲げると、「友達甲斐のないやつだな」と言った。あまりに意味深な態度に、却ってぼくが怪訝な顔になる。

「何か、リコの身にあつたのか？」

「そいつは、本人から聞けよ。ホレ、リコちゃんの電話番号。ダチなら、ちゃんと連絡しろよ」

そう言つて、ヨンちゃんは事務机の隅にあつたメモ用紙に、電話番号を書いてぼくに手渡すと、叱責するような視線を向けてくる。ヨンちゃんは家でも、こんな風に息子に対して父親をやっているのだろうか。だとすれば、本当に二十年と言う月日はあまりにも長かつたのかもしれない。ぼくは、そんな視線と時間の流れから逃げるように、室内に目を泳がせた。壁にかけられた、質素な掛け時計の針が、細いV字を描いている。時刻は午前十一時を廻ったところ。「ごめん、ヨンちゃん。これから、寄るところがあるんだ。悪いけど、これでお暇させてもらうよ」

ぼくは、椅子を跳ね除けるようにして立ち上がり、ポストンバックに手をやる。すると、ヨンちゃん心底残念そうに、眉を垂れた。

「なんだ、もう言っちゃうのか？」

「また顔見せるよ。心配しなくても、しばらくはこっちにいることになる予定」

「しばらくつて、お前……」

ヨンちゃんが、事務室を出て行くぼくを訝るような視線で追いかける。言いたいことは分かっている。だけど、あえて言葉に出してく

れるなど、ぼくは背中ではヨンちゃんに釘を刺した。代わりに、ヨンちゃんはぼくの背中に向かって言う。

「なあ、シウちゃん。本当は何かあったんじゃないのか？」

ぼくはそれに答えることなく、無言で事務室のドアをくぐった。ヨンちゃんが追いかけてくる気配はない。ぼくは、アルバイトの女の子に「邪魔したね」と言って、ヨンちゃんがくれたお茶の代金を支払って、コンビニを後にした。

外に出ると、再び夏の熱気に汗が噴出す。南天でキラキラと燃え上がる太陽を見上げながら、ぼくは、ボストンバッグ片手に、田舎の街道をひた歩いた。

2 . ヨンちゃん（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

3・木陰の地蔵

七月二十五日、午前二時。バイク事故で、右脚の脛骨けいこつを開放骨折し、済南大学附属病院救命救急センターに運び込まれた患者、則本マサキさんに対する手術は一時間もしないうちに、完了の運びとなった。

レントゲン撮影の結果、脛骨が単独骨折しているに留まり、また外側がいそくに位置する腓骨や筋組織きんしきを傷つけていないことなどから、所謂金属板などのインプラントを用いた内固定ないこていではなく、汚染組織の洗浄・除去「デブリドマン」を行った後骨折箇所の観血的整復術及びギプスによる外固定がいこていを行うだけの、単純な手術でこと足りた。

心電図に映し出される心拍数は安定しており、あとは傷跡の縫合と簡易固定を終えれば、処置は完了する。その時だった。処置室の壁にすえつけられた、電話のランプが赤く光り、外線を知らせる。すかさず、平沢さんが電話口に駆け寄り、受話器を取った。

「こちら、済南大学附属病院救命救急センターです！」

舌を嚙んでしまいそうな長い名前を、平沢さんがスラスラと言つてのける。それを聞きながらも、ぼくは針を操って、患者の傷口を縫合していく。

『こちら、済東消防局。急患ですつ。患者は三名。二人は夫婦、もう一人は十歳前後の男の子。自宅の火事によって、奥さんは軽度の熱傷ねっしょう。旦那さんと男の子はひどい全身熱傷を負っています』

外部スピーカーから、救急隊員の声がこだまする。看護師たちはみな、色めきたった。すると、どよめきを収めるかのように、平沢さんが受話器に向かって、

「現在、当センターには医師が一人しかいません。申し訳ありませんが……」

『お願いしますつ。すでに五件の病院に断られ、患者の容態は悪化の一途を辿っています』

「ですが……」

平沢さんは困ったようにぼくに視線を投げかけた。非番の夜に無理矢理叩き起こされたセンター長のいない今、その判断をするのは、医師であるぼくに一任されているということだ。

「受け入れる。見捨てるわけには行かないだろう。則本さんの処置はもうすぐ終わる」

ちょうど、その時、縫合が終了する。糸を切るパチンっと言う音にあわせて、平沢さんはぼくに頷き返すと、

「患者三名、受け入れます。直ちに搬送してください」

と受話器の向こうにいる救急隊員に向かって言った。

「完全にキャパシティ・オーバーですよ。大丈夫なんですか？ 三人も受け入れて」

助手を務める、ベテランの看護師長が、帽子とマスクの間から眉をひそめて、ぼくの顔を見る。

「トリアーじしろって言うんですか？ 災害じゃないんですよ。それに、センター長も駆けつけて来てくれます。二人で手分けすれば、なんとかありますよ」

ぼくより、経験も年齢もはるかに上に行く看護師の視線に威圧を感じたが、考えを変えるつもりはなかった。

「平沢さん。センター長に連絡。警察にキップ切られてもいいから、急いで来てくれて伝えてくれ」

師長の上を通り過ぎるように、ぼくは平沢さんに命じた。「はいっ！」と良く通る声で返事した平沢さんは、シューズのかかとを踏み鳴らして、処置室を出て行く。

「わたしが心配しているのは、野崎先生のことです。もう何日も、ロクに寝てないんでしょう？ 倒れられては、困るんです」

溜息とともに、師長の口から返って来たのは意外な言葉だった。

「大丈夫だ。人間そう簡単にはぶっ倒れたりしませんよ」

マスクの下で笑って見せたが、それが安請け合いの空元気だということは、自分が一番良く知っていた。そのことは、ベテランであ

る彼女にも分かっていたのか、ぼくの顔を見て、もう一度だけ溜息をついた。

人口密度より、水耕田の枚数の方が圧倒的に多いこの街は、県道沿いにもかかわらず、家屋はまばらだ。確かに、二十年前には存在していなかった建物や、住居も見られるが、おおそ数えられるほどしかなく、ヨンちゃんが「発展とは縁遠い」と言ったのは、誇張した表現ではないことを思い知らされる。それは、却って、ぼくの胸のうちにある少年時代の記憶を呼び覚ませ、懐かしさに浸るにはうってつけだと言える。

だからと言って、この街が、あの大学病院のある都会に比べて、涼しいというわけじゃない。夏の日差しは、容赦なくぼくを焦がし、ヨンちゃんのコンビニから五分も歩けば、五百ミリリットルのお茶の水分なんて、あっという間に汗に変わってしまう。

はあ、とぼくは溜息をついて、恨めしく空を見上げた。帽子をかぶってくればよかったかな、とおもっても後の祭りだ。ボストンバッグには最低限の着替えと生活用品しか詰めてこなかった。後の荷物は……。

「うわっ！」

突然、ポケットの中の携帯電話が着信を知らせ、ブルブルと震えた。思わず、声を上げながら、手近な道の脇に生えた老木の木陰に入ると、ぼくは慌ててポケットから携帯電話を手繰り寄せた。ディスプレイに映し出される着信相手の名を確認して、受話器を耳に当てる。

『先生！ 約束の時間はとくに過ぎてますよ！ もしかして道に迷われたんですか？ 方向音痴だなんて、聞いてませんよっ！』
鼓膜に突き刺さるような、甲高い女の声が飛び出してきて、反射的にスピーカーを耳から遠ざけてしまう。

「いや、すみません。道に迷ったわけじゃないんです。駅を降りたら、妙に懐かしくなってしまうって、ちょっとブラブラしてたんです」

言い訳だが、事實は事實として話す。本当は、約束の時刻に間に合わせるつもりなんて、これっぽっちもなかった。ぼくがこの街へ来た、本当の理由はとりあえず「保留」としておきたかったのが、正直なところ。

要するに、あれから一ヶ月も過ぎていると言うのに、現実を受け止めることが出来ず、ぼくはまだ地に足をつけられずにいる。逃げ出したいとさえ思うこともある。瞳を閉じれば、まだそこに熱を持つて存在しているかのような恐怖と絶望に、地面さえ不確かになつて、両足がフラつく。そんな崩れかけの心を整理したい。おそらく、それが出来るタイミングも時間的な余裕も、今を置いて他にはないだろう。この街へやって来たのは、そういう意図もあつてのことだった。

ただ、熱心な電話口の相手には、口が裂けてもそのことは言わない。単にぼくのわがままだから。だけど、電話口の相手はぼくの意図に気付く様子もなく、少しだけ声のトーンを落とした。

『そつえば、夏八木町は、先生の故郷でしたね』

「ええ。とはいっても、十歳まで暮らした街ですから、厳密に故郷と呼べるかどうか……」

『いえ、故郷ですよ。寒村ですが、あなたのような方に来てもらえたことは、きつとこの街があなたを導いたんですよ、野崎先生』

電話口の相手が、柔らかく笑つたような気がした。直接顔をあわせたことがあるのは、一回きりだ。ぼくより少しだけ年上で、少し齒の出た独特の顔付きに良く似合う、ネズミのような矮躯。やせぎすで、お世辞にも美人とはいいがたいが、ちょこまかと忙しく動き、良く廻る口と手足のおかげで、ぼくは「神経質な女性」というあまり芳しくない第一印象しかもてなかった。

もちろん、それはぼくの勝手な印象の持ち方で、外見だけで判断するのは、医師として失格だと言い換えてもいい。実際の彼女は、仕事のできる女性で、周りからも信頼の厚い人物なのだ。

「そつ言ってもらえるのは、ありがたいことです。それで、荷物の

方は、どうなりましたか？」

『荷物は、業者さんが夕方までに運んできてくれるようになってます。だから、後は先生の到着を待つだけなんですよ』

「何から何まで、ご迷惑ばかりかけてすみません」

『遠慮はしないで下さい、野崎先生。無理を言ってるのは、こっちの方なんですから』

無理ではない。ぼくの方こそ、ありがたいと感謝こそすれ、ふんぞり返るようなことは出来ない身分であるにもかかわらず、相手のやさしい口調に、ぼくは「じゃあ……」言いかけた。

『なんですか？ なんなりと申し付けてください』

「ご無理ついでに、ひとつだけぼくのがままを聞いていただいてもいいですか？」

と、切り出すと、相手は少し驚いたようだ。

『わがままってなんですか？ 大概のことには応じられますけど、限度が……本年度予算の計上もすでに決まっていることですから』

「いやいや、お金の相談じゃないですよ。それについては、合意したじゃないですか。それでも、ぼくには多いくらいです。感謝します」

『じゃあ、なんですか？』

訝るような、探るような声音に、ぼくは思わず苦笑した。

「もうしばらく、この街を一人で歩いてみたいです。望郷っていうんですかね、二十年ぶりの故郷で懐かしさに浸りたいなんて……」

そう答えると、電話口がしんと静まり返る。あまりにも突拍子もないことを言ったつもりはないが、すでに午前十時半の約束を、三十分も遅刻しているわけで、相手にも予定や都合というものがあるだろう。それに、ぼくはわがまを言える立場でない。

前言撤回しようと、口を開きかけると、電話口の向こうでクスクスとかみ殺した笑いが聞こえてきた。

『意外とロマンチストなんですね』

言っている意味が良く分からなかったが、彼女にはウケたのだろ

うか。

『いいですよ。どうせ、挨拶は明日になるでしょうし、荷物が届く夕方までにこっちへ来てもらえば。それまで、じっくり街を練り歩いてみてください。面白いところも、観光名所もあります。何なら、街に詳しい者に案内させましょうか？』

「いえ、大丈夫です。昔の記憶を辿ってみます」

意外にすんなりとわがママが通ったことに驚きつつも、ぼくは彼女の提案を丁重にお断りした。

『それじゃ、夕方に、町役場までお越しください』

と、電話が切れる。まだ、電話口の声がキンキンと鼓膜を叩いているような錯覚を覚える。そのくらい、彼女の声は金属音のような甲高さを誇っていたのだ。

ぼくは受話器を切ると、小さく溜息をついて、木陰からもう一度空を見上げた。枝葉が、夏の風に揺らめき、木漏れ日が降り注ぐ。ふと目をやると、老木の傍に小さな地蔵が立っている。お供え物はないが、色あせていない赤布の前掛けは、きつと近所の誰かが熱心に付け替えているのだろう。思えば、この地蔵も、二十年前からこの場所にあった。あの頃は、そこにあるのが当たり前、風景の一部でしかなく、気にも留めたことがない。

ぼくはそんな地蔵に、手を合わせると、小さな声で、
「ただいま」

と、告げた。それは、地蔵に向ってだけ言った言葉じゃなく、この街に向かって言った「ただいま」だったのかもしれない。

3 . 木陰の地藏（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

4・リコ先生

地蔵に拝み終わったばかりは、もう一度夏空を見上げながら、いつまでも木陰で涼んででいるわけには行かないと、ポケットに携帯電話をしまいこむ。不意に、指先に何かが触れ、カサッと乾いた音を立てた。手繰り寄せ、ポケットから引っぱり出してみると、それは一枚の紙切れ。そこには、七桁の数字が走り書きされていた。

ああ、そうだ。これは、さっきヨンちゃんがくれたリコの連絡先だ。リコとは、二十年以上連絡を取り合っていない。同性の親友であるヨンちゃんと違い、異性の幼なじみとは、どうしても離れ離れになればそれだけの距離が開いてしまった。

電話をかけるのは簡単だ。七桁の数字をプッシュして、リコが電話口に出るのを待ってればいい。だけど、相手の顔が見えないのは、やはり不安と緊張が過ぎってしまう。もしも、リコがぼくのことを覚えていなかったら？ そんなことはないと思う反面、「もしも」は小心者なぼく胸をざわめかせる。それが、二十年間の間に開いてしまった、異性の幼なじみとの距離と言ふことなのだろうか。

そういえばヨンちゃんは、リコが「夏八木小学校」で教師をやっていると言っていたな。どのみち、小学四年生までの母校だった夏八木小学校には立ち寄るつもりだった。どうせなら、下手な緊張感に電話口でドキドキするよりも、直接二十年経った現在のリコの顔をみたい。そう思ったばかりは、木陰から炎天下へと歩みだした。小学校への道筋は、おぼろげな記憶を辿る他ない。その不思議な感覚と言ったらない。あんなに庭のように走り回った街なのに、まるで頭の中にある古ぼけた地図を頼りに、歩く観光客の気分は、違和感ばかりが募った。きつと、二十年の間に一番変わったのは、ヨンちゃんのコンビ二ではなく、ぼく自身なのかもしれない。

そんな問答を脳裏で繰り返しながら、県道を跨いで、水耕田の真ん中を走る一本道へと入る。両端の水田は陽炎揺らめくほど広がり、

さわさわと風に揺れる青々とした稲が海原を思わせる。例えて言うなら、この一本道は「モーゼの海道」だろうか。だけど、その行く手にあるのは「ミルクの川流れる理想郷」ではなく、夏八木町の住宅地域だ。そして、夏八木小学校は、その住宅地の中心にある小高い丘の上に、建っている。

ぼくが通っていた頃には、まだ戦前からの木造校舎を使用していた、壁には、遠い昔の夏の日に襲来したアメリカ軍の戦闘機が機銃掃射したという、古傷が残っており、廊下も、昇降口の下駄箱、体育館、教室の黒板もあらゆるものが使い古され、机や椅子の角は丸く削られ、年代を感じさせた。しかし、現在は同じ敷地に、新しい校舎が建っている。門扉の前にある碑を見れば、八年前に立て換えたようだ。もっとも、見た目は以前と変わらぬ木造の校舎だが、モダンに白いペンキで塗られ、部屋数も子どもの数に合わせて少なくなっているようだ。むしろ、鉄筋コンクリートのビルディング調になっていないことは、却って好印象を与えた。

「ねえ、おじさん。何してるの？」

生まれ変わった母校を見上げるぼくの足元から、突然の声。驚きとともに視線を落とすと、ゴムボールを抱えた小さな女の子が、疑いの眼差しでぼくを見上げている。

「おじさんか……。キミのお父さんくらいの歳だもんな」

面と向っておじさんと言われたのは初めてだ。若いつもりはないけれど、それでもまだ三十歳。おじさんといわれるのは、いささか傷つく。でも、六、七歳の女の子からしてみれば、三十の男はみな等しく「おじさん」だ。そう思っ、苦笑していると女の子はますます眉をひそめる。

「おじさん、変な人？」

急に女の子がスカートのポケットから、何やらスイッチのようなものを取り出した。それが防犯ブザーだと気付いたぼくは、あわてて女の子をなだめる。

「変な人じゃないよっ！ この学校の先生にご用があるんだ。リコ

先生って知ってる？」

リコの旧姓「高瀬」と言ったところで、女の子には通じないかもしれない。今更になって結婚したリコの現姓が何なのか知らないことを思い出した。もっとも、「リコ」というのもぼくやヨンちゃんが付けた愛称だ。でもそれは、ぼくの危惧は取り越し苦労だったらしい。女の子は、そつと防犯ブザーをポケットにしまうと、少しだけ警戒心を緩めてくれた。

「リコ先生？　先生だったら、職員室にいるよ。呼んで来てあげようか？」

「よろしく頼めるかな、お嬢さん。野崎秋人って人が呼んでるって言ってもらえれば、きっと先生分かると思うから」

ぼくが膝を折って、女の子の目線にあわせてそう言うと、女の子はぼくにゴムボールを手渡して、「待っててね！」と元気良く駆け出した。やがて、女の子の姿が校舎の中に消えると、炎天下で棒立ちするのもイヤなので、門扉の傍にあるポプラの木の下に腰を下ろした。

右手にはポストンバッグ、左手には女の子のゴムボールを持って、木陰からぼくの知らない新しい校舎を見上げる。広さだけが自慢の校庭では、あちこちに楽しそうな声を上げて遊ぶ子どもたちの姿あった。ぼくも、ここに通っていた頃は、夏休みになるとヨンちゃんやリコたちと、ボール遊びや鬼ごっこ、かけっこをして遊んだものだ。あの頃は、炎天下なんて何のそのだったのにな。やっぱり、ぼくは「おじさん」のようだ。

しばらく待っていると、再び昇降口から女の子が駆け出してくる。しかし、今度は女性の手を引いて。それがリコであることは、すぐに分かった。背も伸びているし、体つきも女らしくなっているとは言え、ヨンちゃんほど外見が変わってしまっているわけではなかった。

「このおじさんだよ！」

ぼくのところまで走ってきた女の子は、ぼくを指差して言う。リ

コは、ぼくの顔を見るなりはっ、と息を飲んで、両手で口元を覆った。

「ありがとう、お嬢さん。でも、炎天下で遊ぶときには、暑くてもちゃんと帽子を被るんだよ。それから、汗をかいたらお水もたくさん取ること。いいね」

ぼくは立ち上がり、預かっていたゴムボールを手渡した。すると、女の子は不思議そうな顔をして、

「おじさん、なんだかお医者さまみたい」

という。ぼくは、さすがに「お医者さんだよ」とは返さなかった。ぼくの複雑な顔色を、子供心に感じ取ったのか女の子は不思議そうな顔をしたまま、「うん、分かったよ」と素直に返事をする、踵を返して友達のところへ駆けていった。後には、ぼくとリコだけが取り残される。

「ホントに、シュウくん？」

リコは、まだ驚きの顔で、瞳を僅かに潤ませていた。

「久しぶりって言うには、二十年ぶりだからね。上手い言葉が思いつかないけど、リコずいぶん綺麗になったね。見違えるほど美人だ」「何それ。いきなり、口説き文句？ そんな冗談言う男の子じゃなかったでしょ？」

「冗談や、お世辞のつもりはなく、正直に言っただけだったけど、確かに、既婚者に言うような科白ではなかったなと、思い直す。」

「まあ、そのなんだ、雰囲気は、あの頃と変わってないってことだよ」

と、付け加えると、リコは白い歯を見せて「もうっ！」とはにかんだ。ぼくもつられて笑い出す。すると、皇帝で遊ぶ子どもたちの視線が、ぼくたちに釘付けとなった。

どうやら、と言うか予想通りというか、リコは生徒に慕われているらしい。ぼくに向けられる子どもたちの視線は、どちらかと言えば、怪訝に「あいつ誰だろ」「何しに来たんだろ」「ぼくたちのリコ先生に何の用だろ」と、口に出さなくても聞こえてくるような気

がする。しかし、リコはそんな子どもたちの視線を笑顔でかわすと、木陰に入ってきて、ぼくの隣に腰を下ろした。

「学校、あの頃と全然違うでしょ？」

「そうか？ 確かに校舎は新しくなってるけど、俺たちの頃と変わらず、夏休みの校庭は、子どもの遊び場。あの頃とは変わってないと思うよ」

そう言いながら、ぼくはリコの隣に腰を下ろし、ポプラの幹に背を預ける。子どもたちは、すでに遊びに戻っていた。必死にボールを追いかける、さっきの女の子。その隣では長縄跳び、更にその向こうでは男の子たちが、ツートンカラーのサッカーボールを追いかけている。

「何でまた突然、連絡もなしに現れたのよ」

「迷惑だったか？ そうだよな、仕事中だったんだろう？」

「雑務の処理に辟易してたところ。それに、迷惑なワケないじゃない。二十年間、音沙汰なし、音信不通状態だった友達がやっと、顔を見せてくれたんだもの」

少し怒ったような、苦笑したような、その真意の読み取りにくい女の子特有の顔つきをリコがみせる。そう言うところは、本当に何一つあの頃と変わっていない。

「ごめん。あの時色々とはたばたしてて、そうしたら、連絡先を伝えづらくなった」

「伝えづらくなったって、わたしとヨンちゃんはシュウくんの親友で幼なじみでしょ？ 何の遠慮がいるのよ。時々、シュウくんってわけの分からないことを言うのね。そうだ、ヨンちゃんには会ったの？」

「さっき。それで、キミがここで働いてることを知って、顔を見たくなったんだ」

ぼくは何だか気恥ずかしくなって、わざと視線を逸らした。すると、リコは「まあ、嬉しい」と臆面もなく喜んだ。あまりにそれが自然体過ぎたのか、それとも、リコがぼくのことを覚えてくれたこ

とに安堵したのか、少しだけ気持ちが軽くなった。

「子どもたちに人気の先生か。まさか、あのリコが生徒から慕われる学校の先生になるなんて思ってもみなかったよ」

「あら、それを言うならあなただって。わたしは、あのシュウくんがお医者さまになるとは思ってなかったわよ」

「そう言えば、結婚してるんだね。今更だけど、おめでとう」

医者というワードをあからさまに避けるように、ぼくは話題を逸らした。そればかりだ、今日のぼくは。と、自嘲気味に思っていると、傍らのリコ顔に、翳りがさす。睫毛^{まつげ}を伏せがちに下を向くリコの横顔に、ぼくは言い知れぬ不安感に包まれた。そのイヤな予感は往々にして当たるもの。

「リコ？」

「結婚してた……ってのが正解かしら。もう二年前になるわ、いろいろとあつてね、離婚したのよ。今は、実家にお父さんとお母さん、それに息子と娘の五人で暮らしてるの」

「あ、いやっ、ごめん！ 知らなかった」

慌てて、訂正の言葉を搜したけれど、そう簡単には思いつかない。ずっと、あの薬と血のにおいしくない建物の中で、毎日運び込まれる患者を見ていれば、人付き合いに大切な何かをどこかに忘れてしまったような錯覚に陥る。それが、悪い方向で体现してしまった瞬間のように思えた。

だけど、リコはニツコリと笑って、

「気にしないで。大人になれば色々あるのよ、そういうものでしょ？ それに、内緒にしておくようなことでもないし。学校の子どもたちもみんな知ってることよ。それでも、息子と娘はわたしの傍にいてくれるし、生徒たちはいいい子ばかり。いまが、とても幸せ」

と、却って気を使わせてしまう。

「それより、シュウくんはどうなの？ お仕事は順調かしら、野崎先生。恋人は？ 結婚は？」

「全部ノーだよ。恋人なんて作る余裕がなくて、毎日忙しくしてた。

楽しみと言えば、寝ることくらいかな。あと、看護師がたまに気まぐれで入れてくれる、苦いコーヒーを飲むこと。目が覚めるんだよ、カフェインたっぷりだね」

冗談めかして言ったが、本当に楽しみなんてない。毎日をただ忙しくしているのが当たり前のように思っていた。ただひたすらに、眠い目をこじ開けてでも、一人でも多くの患者を救うことが、使命だと思っていたのかもしれない。こうして、のどかな時間を木陰で、幼なじみとともに過ごすなんて、思いもしなかった。その使命が空回りし始める、今の今まで……。

4・リコ先生（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

5・使命の果てに

「患者氏名は、津田浩人さん三十九歳。その奥さんで、津田美幸さん三十七歳。津田さん夫婦の長男で、幸浩くん十歳。就寝中自宅階下で火災に会い、浩人さん、幸浩くんは逃げ遅れ、全身重度熱傷。父親の意識レベルは、JCS300です。幸浩くんは、JCS100。美幸さんの意識ははつきりとしています」

到着した三台の救急車から、担架が降ろされる。救急隊員の報告どおり、母親の女性き青白い顔をしてはいたが、意識ははつきりとしている。おそらく、火事のショックから立ち直れずにいるのか、目はうつろであつたが、火傷も腕の一部と顔のごく一部。視診だけで語れば、淡く発赤した水泡から、浅達性と思しき軽度の熱傷だ。

しかし、問題は、次の担架だつた。銀色の耐熱ビニルに包まれた息子は腕と脚の一部をひどく爛れさせてはいるものの、意識ははつきりとして、痛みに顔をしかめさせながら、両親の名を呼んでいる。だが、それに応えるべき父親の方は目を覆いたくなるほどの状態だつた。全身の皮膚が、爛れめくれ上がり、すでにケロイドの様相を呈しているにもかかわらず、疼痛にうめき声ひとつ上げようとはせず、ぐったりとしている。

「平沢さん、すぐにスキンバンクに連絡っ！！ 奥さんの方は、診療室で熱傷創クリーニング！ 後の二人は、すぐに処置室に運び込めっ！」

「はいっ！！」

思わず声を荒げて、看護師たちに指示を飛ばした。しかし、返事は間髪いれずに戻ってくる。それを確かめたばかりは、自ら父親の乗せられた担架を押して、処置室へと飛び込んだ。先ほどの患者、則本さんが入れ替わり、処置室から出て行くと、処置室には父子の患者がならべられる。

「まずは、重篤度の高い父親の方からオペを開始する。息子の方も

常に、バイタルをチェックしろ」

「いち、につ、さん！」

号令よろしく、父親を担架から手術台へと移し変える。すかさず看護師が銀色の耐熱ビニルを開いた。皮膚の焼け焦げた匂いが、マスク越しにつんとする。

「津田さん、服切りますね」

ベテランの看護師が消毒されたはさみを片手に、父親の焼け残った寝巻きを切り開いていく。更に別の看護師が、乳酸リンゲル輸液のための点滴をつないでいく。その手際のよさに、舌を巻いている暇はない。

麻酔の後、壊死組織の除去をはじめとする手術は開始された。すべての処置を一人でこなす、オーバーワークがぼくの肩にのしかかってくる。しかし、熱傷の治療は急性期が肝要である。感染のリスクが高く、後日の後遺症や合併症を引き起こさないためにも、最速で、かつ的確な治療を行わなければならない。

「センター長はまだかつ！？」

メスを片手に、ぼくは怒鳴った。その声に弾かれるように、平沢さんがぼくの背中に言う。

「国道で渋滞に巻き込まれたそうで、到着までまだ三十分以上も掛かるそうですっ！！」

「くそっ！ 念のため、七尾先生にも応援要請。それからっ！！」

ぼくは看護師に、薬剤の指示を飛ばしつつ、オペを続けた。思い起こせば、昨日から休む間もなく、こうしてメスを片手にしている。慣れた光景、慣れた日常。それでも油断していたつもりはない。ただ、疲労の蓄積は目に見えて明らかだった。そういえばここ二日余りで、睡眠時間は何分だったか。合計しても、平均的な睡眠時間の半分にも満たないような気がした。いや、それも、あと一日のこと。休日になれば、二十四時間死んだように眠ることが出来る。それまでは、一人でも多くの患者を救わなくては……。

不意に、ライトアップされた視界が揺らぐ。足もとから、ふわふ

わしたとらえどころのない感覚が押し寄せてくる。それが眩暈だと気付いたときには、ぼくの体は左右に揺れていた。

「先生？ 大丈夫ですか？」

患者を挟んで向いに立つ、師長がぼくの異変に気付いて、呼びかけた。

「あ、ああ。大丈夫です。ちょっと目の前が眩んだだけです」

「先生、全然寝てらっしゃらないんじゃないですか？ 目の下、クマが出来てますよ」

「患者を目の前にして、今更そんなこと言えないでしょう」

笑っては見たが、疲労に体が限界を訴えているような気はしていた。それでも、手を休めることは出来ない。額には脂汗が浮かび、気を抜けば再び眩暈が襲い掛かってくるかもしれない恐怖に、ぼくは必死で耐えた。

「引き受けなきゃ良かったのよ」

一瞬部屋がしんと静まり返る。その緊張感を帯びた空気の間をぬって、誰かの声がした。ひっそりと、ぼくの耳には届かないように呟いたつもりだろうが、あいにくはつきりとぼくには聞こえていた。「じゃあ、何か。見捨てれば良かったとも言っただけか？」

ぼくは振り向かないで、その声の主に問いかけた。声の主は、少しだけ驚いたように息を呑むと、鋭い視線をこちらに向けてくる。

「でも、野崎先生。完全にウチのセンターじゃ、キャパオーバーですよ。わたしたち、もう一日近く寝てないんです。それなのに、先生が勝手に何人も患者を引き受けて。このままじゃ、わたしたちの方が先に倒れてしまいますっ！」

「だったら、今すぐ出て行けっ！ やる気のない看護師なら間に合ってる。ぼくたちが弱音を吐いても、患者は待ってくれない。そんなことも分らないなら、医療なんて辞めた方がいいぞ」

食って掛かるような看護師の言葉に、ぼくは苛立ち、ありったけの棘を含んだ言葉で叱咤した。だが、それは却って火に油を注ぐ結果となり……。

「だけど、七尾先生もセンター長も仰ってました。野崎先生がキヤパも考えずどんな患者を引き受けるから、オーバーワークになってるって。他の病院では、受け入れ拒否だってやってるんですよ！」

「野崎先生の方針に口出しするの！？ 救急救命センターが急患を引き受けるのは、当然のことよっ」

半ば喚くような同僚の科白に、息子の方のバイタルチェックをしていた平沢さんが声を上げた。すると、一気に処置室は、勢力が二分される。平沢さんを中心としたばくに味方する者と、ばやいた看護師を中心とする怒りを露にばくを糾弾する者だ。処置室は、あつという間に騒がしくなり、言い分と言い分が交互にぶつかり合う。

ぼくは、そんな喧騒を背中に受けながら、手を休めることなく、必死に父親の処置を続けた。そんな、ぼくの姿に視線を送りながら、師長がそのざわめきを一喝する。

「平沢さんっ、みんな、やめなさい！ ここは、論議の場所じゃない。目の前で苦しんでいる患者さんを助ける場所よ。野崎先生のいう通り、やる気のない人、手がお留守になっている人は、邪魔になるだけよ。今すぐ処置室から出て行きなさいっ！」

看護師たちから信頼置かれる彼女の一声は、ぼくの叱責よりも何倍もの重みをもって、平沢さんたちをしゅんとさせ、再び、処置室に静けさを取り戻す。すると、まるでそれを待っていたかのように、一人の看護師が自動扉をくぐって、血相を抱え飛び込んできた。

「大変です、野崎先生っ！！ 昨日運び込まれた患者さんの容態が急変しました！ 心筋梗塞で運び込まれたお爺ちゃんです」

「お爺ちゃん」と言うのは、ぼくがソファで仮眠をとる前に処置した老人のことだろう。身寄りのない一人暮らしの老人らしく、道端で胸を押さえ、倒れているのを通りがかりの人に発見されここに運び込まれた。その時すでに、倒れてから時間が経っており、何らかの予期せぬ事態になることは、大方予想していた。

しかし、両手は熱傷の処理に塞がれている。身動きの取れない状態のまま、とりあえず、師長に向うよう指示を下しながら、猫の手

も借りたいと言うのは、こういうことだと心のどこかで思った。

師長が処置室を後にして、その足音が遠ざかったのを確認し、ぼくは先ほどの看護師に向って、

「怒鳴ったりして悪かった」

と、フォローを入れた。尊敬する師長に叱られた所為か、バツの悪そうにしていた彼女も、「すみません」とだけ返し、仕事に戻る。それで、すべてが上手くいくように思えた。

父親の熱傷の処置が一段落したところで、師長がぼくを呼びに来る。やはり、老人の容態が芳しくないらしい。どうしたものかと思案していると、平沢さんがぼくの方に駆け寄ってきて、

「行ってください。あと五分くらいで、センター長も到着するそうです。何かあったらすぐに知らせますから」

という。そのしつかりとした眼差しにぼくは頷いて、師長とともに処置室を後にした。

このセンターへの搬送が遅すぎた所為だろうか。師長に連れられて駆けつけたときにはすでに、病床に横たわる老人は虫の息だった。心電図の波形だけが奇妙なギザギザの波を打ち、まだ新人の看護師が恐怖にひきつった顔で、ぼくに助けを求める。

心筋梗塞の治療には、P C Iと呼ばれる、カテーテルを用いた再灌流療法かんりゅうりょうほうを行う。しかし、ことは人間のエンジンとも言うべき心臓

心筋梗塞の致死率は二割近く、非常に死と隣り合わせな病である。

特に、不整脈などの合併症を引き起こす確率が高い。そして、目の前で起きているのはもつとも最悪のケースだった。

「心室細動が起きてるっ！！　ぐずぐずするな、すぐにエピネフリン投与っ！　師長、除細動器を持って来て下さい！」

他の患者に見えないように、ベッドを囲むカーテンを閉めながら新人看護師の背中を叩く。弾かれるように彼女は、師長とともに駆け出した。その間に、ぼくは老人の寝巻きをはぐり、心臓マッサージを試みる。そして、二人が戻ってくると、エピネフリンの投与量の指示を新人看護師に与えつつ、除細動器の電源を入れた。

「離れてっ！！」

パッドを握り締め、通電用のゲルを塗りこめると、それを老人の胸にあてがう。チャージが終わるとともに、パンっ！と激しく老人の体が跳ねた。しかし、心電波形は不規則で小刻みな波を打ち続け、改善が見られない。

「くそっ！ もう一度。離れてっ！！」

もう一度、もう一度、と何度かの通電を試みる。諦めれば、それで終わりと、心が呼びかける。やがて、ギザギザの不整脈を示していた心電図が、ほぼ正常な心拍の波を描きはじめた。それは、危機を脱した合図。

「まだ予断は許さないな、心室期外収縮の改善は見られない以上、再度心室細動を引き起こしかねない。でも、これでひとまずは落ち着くはずだ。とにかく、キミは、この患者さんの監視を続けて。何か、異常があれば教えてくれ」

「はい、わかりました」と答える新人の看護師にとって、患者が死の淵に直面するのを見るのは初めてだったのだろう。声は震え、目頭に薄く涙を浮かべ、それほど想いいれのある患者でもないだろうに、苦しそうな老人の顔を見つめ続けている。事務的に、義務的に病の対処を行う自分とは違い、まだ新人の彼女には患者を看る暖かな心があるのだろう。そんな彼女に対しても、無情に指示を下すしかぼくにはできなかった。

「野崎先生っ！！」

またしても突然、ひと時の安堵の空気を引き裂くように、ぼくを呼ぶ声が舞い込んでくる。あのシューズの足音は、平沢さんのものだとか分るなり、彼女は無造作にカーテンを開いた。

「すぐに戻ってください！ 津田幸浩くんの容態が……！」

平沢さんは語尾を濁した。今度は、先ほど運び込まれた熱傷の患者、その息子の容態が悪化したと言うのだ。ぼくは、間の悪さに舌打ちしたくなる気分を抑えながら、師長と新人看護師に「後を頼みます」と言い残し、再び処置室へと折り返した。

「先生！ 幸浩くんの呼吸が停止しましたっ」

先ほど、ぼくに食らい付いた看護師が、一転した青い顔を見せる。「ぼさつとするなっ！ すぐに、送管用意っ！！ 心肺蘇生っ！」

ぼくは一体何が起きているのか状況の把握が出来ないまま、指示を飛ばす。しかし、看護師たちは皆そろって手を止め、呆然としたまま動こうとはしなかった。

「もう、間に合いません」

誰かが、ぼくに言う。心臓マッサージのため手を添えた少年の胸から、五本のコードで繋がれた心電図は、ひどく無機質な直線を描いていた。

ぼくは恐る恐る処置台に横たわる、少年の小さな体に目をやる。間に合わなかった？ そんなことはないはずだ。意識は父親よりはずきりしていたし、なにより熱傷の範囲も父親より狭い。手遅れになるはずなんかなかったはずだ。なのに、何故！？

「気道熱傷……！」

頭を過ぎる言葉。少年の口元と鼻腔には、微細な黒い煤が張り付いている。それが何を意味するのか分かった瞬間、ぼくは絶望感に足元がぐら付いた。すかさず、平沢さんが支えてくれたものの、過ちを犯してしまったというぼくの後悔は、頭の前からつま先までがじんじがらめにしていく。

火災による熱傷の場合、煤や熱風を吸い込んで、上気道や気管に損傷を負う場合がある。それを、気道熱傷と呼び、熱傷部位は徐々に浮腫を引き起こして、やがて気道をふさいでしまう。その結果、気道狭窄に陥った患者は、やがて呼吸が出来なくなるのだ。特に、火災による熱傷の場合、外見からは判断しにくいため、最大に注意しなければならない。

だが、気道熱傷の有無を確かめる方法は簡単だ。患者の口や鼻腔に煤や灰が付着していないかを確かめればいい。そんな初歩的なことに何故頭が廻らなかったのか……。ひっきりなしに運び込まれる患者にたった一人で、多忙を極めたから？ いや、そんなことは患

者にとって何の関係もない。万に一つ、見落としがあってもいい。重篤なのは、外見上熱傷のひどい父親の方だと決めて掛かったぼくの判断ミスだ。その初歩的ともいえるミスが、一人の少年を死なせてしまったことに何の代わりもない……。

直後ぼくはその場に膝を突いて、気を失った。情けなくも、平沢さんの悲壮な呼び声にも答えることは出来ず、ただ絶望の中にわが身を横たえるほかなかった。

5 . 使命の果てに（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

6・あの夏の日へ

二十年目の再会に話したいことは沢山あった。リコは木陰で絶えず口を動かしていたし、ぼくも絶えず相槌を返した。話すことは、あの頃のこと、そして今のこと。変化に乏しい田舎の町でも、それなりに二十年と言う歳月がそこには確実に存在していた。

例えば、良く三人で遊んだ遊具のない児童公園は、今ではマンスリーマンションになっていているしい。こんな田舎で、マンスリーマンションを借りる人なんていないだろうに、とリコは苦笑する。反対に、かつて我が家があった場所は今も健在で、二十年の間に何人かの手に渡った後、現在は空き家となっている。秘密基地を作ろうとした野原は、今でも子どもたちの格好の遊び場だし、草すべりをして誰が一番速いか競い合った土手は、護岸工事が行われ、草すべりは出来ないものの、見違えるようにきれいになったらしい。

そんな話を聞きながら、ぼくとリコとヨンちゃんの三人で駆け回り、毎日が楽しくて仕方なかったあの頃がとても懐かしいと、郷愁に胸詰まらせるのは、もう充分に歳をとったということなのだろうか。高齢社会である現代において、三十歳なんて、まだまだ青二才だと思っけれど、その反面、あの夏の日にまだ十歳だったぼくらからすれば、二十年後なんて、遠い遠い未来だった。

「でも、どうして突然、ここに帰ってきたの？ まさか、幼なじみの顔を見るためだけってワケでもなさそうだし……」

昔から、カンの鋭いリコは不意に、ぼくの顔を覗き込んだ。まるで推理小説探偵がするように、疑いの眼をぼくに向けてくる。いつか、リコからもその質問が来ることは予期していた。

「いや、不意に時間が出来るとき、暇をもてあましてしまうもので、つい望郷の念に駆られたんだよ。それで、ちよつと想い出に浸りたかった、それだけだよ」

「望郷の念ねえ……、それにしては、ボストンバッグは荷物なんじ

やない？」

言い訳がましく聞こえるぼくの科白は、ごまかしの聞かないリコには通用せず、その瞳はぼくのボストンバッグに注がれる。確かにその指摘は的を射ている。「ちょっと」と言う割には、旅行鞆は大きすぎる荷物だ。

さらに、リコの眼が光る。

「それに、ずっと浮かない顔してるわ。何もなかったってワケじゃなさそうね。さっきは忙しいって言ってたのに、今度は暇をもてあますなんて、矛盾しているわ」

「リコは、相変わらずだな」

「何よそれ。答えになってない」

「ヒトの嘘を見抜くのが得意だってことだよ……」

そういいながら、ぼくは重たい溜息を吐き出した。夏の景色に似合わないどんよりとした色の溜息は、すぐに風に吹き飛ばされ、セミの鳴き声にもみくちやにされ、照りつける日差しに洗われる。

「いろいろあるんだよ、大人には。分かるだろう？ リコだってガキじゃないんだ」

「いろいろ、ねえ。それは、二十年ぶりに再会した幼なじみを心配する、わたしにも言えないようなことなの？」

リコはあの日と変わらない真っ直ぐな瞳でぼくのかを見つめる。

ぼくは、先生に嘘を見抜かれた子どものように眼を泳がせつつ、視線を逸らした。

どう説明すればいい？ 笑い話にも出来ないようなことを、せつかくの再会の場で語るべきじゃないことくらい分かっている。それに、相手が幼なじみだからこそ、余計に弱音を吐きたくないという変なプライドが鎌首をもたげてもいる。

「幼なじみの顔を見たくなかったっていうのは、嘘じゃないよ、半分はね」

「半分は？ じゃあ、残りの半分は何なの？」

「残りの半分は……世界樹」

ぼくは立ち上がり、問題のボストンバッグを手に取り、食い下がるリコに、その言葉を告げた。すると、リコは驚きと怪訝が混じったような複雑な顔をしながら、「世界樹……」と繰り返す。

「もう一度、あの場所へ行きたい。自分が、見つめていた未来がなかったのか、それを確かめたいんだ。そうじゃなきゃ、道を見失った自分が何のために在るのか、それが分からない」

ぼくの視線は真っ直ぐに、空の彼方をみつめた。白い雲を浮かべた、突き抜けるような空の青さに、少しだけ眼が眩む。

「ねえ、シュウくん。ひとつだけ訊いてもいい？」

リコも立ち上がる。あの頃は、ぼくより少しだけ高かった背も、いつの間にか、頭ひとつ分以上、ぼくの背丈の方が高くなっている。リコは、ぼくの返答を聞く前に続けた。

「シュウくんが、お医者さまになったのは、ヒメのことがあったから？」

医療ミス。常に、医療従事者が危惧し続ける問題だ。医学と言うのは、とても難しい学問であり、手段である。人の生命は、その身体・精神を問わず、非常に難解な存在であり、そこに宿る病や怪我も同様といえる。「医は仁術」と言い、人倫の限りを尽くして患者に相對しても、救うことが出来ない場合もある。つまり、人の命を救うと言うのは、文字で書いたり、言葉にするよりも、もっともつと難しいものなのだ。だから、患者を救うことが出来なかったとしても、それをすべて医療従事者の責任としてしまうことは出来ないし、そのことは誰だって分かっている。

だけど、それがもしも人為的なミス、「ヒューマン・エラー」だったとしたら、医者 of 失敗で愛する人を失った患者の遺族は、納得できるはずがないだろう。

それでも、ぼくは医者だ。「ゴッドハンド」「スーパードクター」と呼ばれるような凄腕の医者ではないにしても、人の命を救う方法を知っている。そして、その方法を知るものとして、救える命を助

けると言うことは、使命と同じだった。その一心で、看護師さえも苦言を呈するほど、無我夢中で、一人でも多くの患者を受け入れて、命を救おうとした。現実には、医師不足などの現代医療問題に立ち向かうと言うことではなくて、それがぼくに与えられた使命だと思っていた。

その結果、ぼくは自分のキャパシティさえもわからなくなり、忙殺されて、判断ミスを犯し、一人の少年の尊い命を失ってしまった。「医者が自らのエゴイズムで、患者を死なせるようなことがあれば、それは殺人となんら変わりはない」

医大生だったころ、ゼミの教授がぼくたちに教えてくれた言葉だ。医者のエゴイズム……ぼくの使命は、エゴイズムだったのだろうか？

津田幸浩くんのお母さん、美幸さんは愛息子の死を知って、絶望に泣き叫び、半狂乱になりかけた。平沢さんがなだめてくれたおかげで、センター長が送ればせながら救急救命センターに到着した頃には、落ち着きを取り戻していたものの、彼女の心には、判断ミスを犯し、息子を死に至らしめたぼくに対する、憎しみと悲しみが渦巻いていたに違いない。

それから、美幸さんがぼくを「医療ミス」で訴えると、大学病院に知らせた。大学病院の教授や院長たち幹部は騒然となった。幹部は諮問委員会が開き、ぼくに弁明を求めて来たけれど、ぼくに弁明の余地などなかった。

「センター長の指示も仰がずに、キミが一度に三名の患者を引き受けられるかどうかも図らなかったことは、無理な引き受けだったとは思わないのかね？」

幹部の一人がぼくを糾弾しても、ぼくはただ黙ったまま、罪の意識にうつろになりかけていた。そう、あれはすべてぼくの罪なのだ。それが分かっているから、何の反論もあるはずがなかった。諮問委員会は、ぼくの処分と裁判に対する対応を一週間後に下すとして閉会したものの、それからの日々は、院内の誰からも後ろ指を指され、針のむしろに正座させられているような気分だった。

「良くある話さ。次々に運び込まれている患者を助けるうちに、自分は何でもできる、すごい人間なんだって、勘違いするのさ。やがて、それが快感に思い始めた頃、現実にはぶつかると。良くある、医者が陥るレトリック。ちょうど、野崎はそれに陥ったんだよ」

「まあ、これで、野崎先生が何処か行ってくれたら、この救命センターももう少し平和になるでしょうね。そうしたら、七尾先生が次のセンター長ですか？」

「いやいや、よしてくれよ。俺は、充分身の丈をわきまえているよ。それに、今は、医療ミスしたのが俺じゃなくて良かったって、ホッとしてるところ」

笑い声とともに、陰口にもならないような、同僚の七尾先生と看護師の会話を耳にする。いたたまれない気持ちになっても、逃げ出すわけには行かない。

そういう気持ちは、平沢さんも同じだったんだと思う。

「あの時、わたしが『行ってください』って言わなかったら、幸浩くんは助かったかもしれないのに……」

まるで、自分を責めるように平沢さんはぼくに言った。いつもの明るく元気な彼女の姿はどこにもなく、今にも泣き出しそうな顔を見るのは、もつといたたまれなかった。

「いや、平沢さんのおかげで、あの心筋梗塞のお爺ちゃんはお助けだったんだ。もしも、あの時処置室に残っていれば、どちらかの命は失われた。だから、すべては気道熱傷を見抜けなかったぼくのミスだ。平沢さんは気に病むことなく、いつも通り笑っていてくれ。その方が、患者さんたちも早く元気になる」

「先生。わたし、先生と一緒にこの仕事がしたいんです。先生は、ここをやめたりしませんよね？」

その問いかけに、ぼくは答えを濁した。一週間後、大学病院はぼくの解雇を決定し、かつ、事態を穏便に済ませるため、多大な示談金で津田美幸さんから、告訴を諦めてもらうことにした。そうなることは分かっていた。だから、平沢さんの問いかけに、はつきりと

答えることが出来なかったのだ。

ミスを犯し人の命を救えなかった、愚かな医者を見送ってくれる仲間などいない。ただひっそりと、静かにぼくは大学病院を立ち去った。すぐに、学生寮のようなアパートを片付けて、その足でぼくは、二十年前の故郷へと旅立った。

贖罪の旅？ いや違う。罪に苛まれ、絶望した失意のぼくは、道を見定めたかった。このまま歩き続けることは出来るのか？ それとも、もうこの先に道はないのか。その答えをくれるのは、きつとあの日の思い出だと、心の中で反芻し、故郷に来たのだ。二十年前のあの暑い夏の日の出来事を辿るため、「世界樹」と呼ばれたあの場所へ……。

リコの問いかけに、ぼくは答えなかった。正確には答えられなかった。リコは、困ったような顔をしてぼくのことを、不安な色をした瞳で見つめていたけれど、その視線に耐えることは出来そうにもない。泳ぐ視線は、校舎の壁面にかけられた大きな時計にたどり着く。すでに小学校を訪れて、一時間近くが過ぎている。そう言えばリコは仕事だった。これ以上邪魔しちゃリコに悪い、と勝手な理由をつけて、立ち去ろうと木陰から足を踏み出した。

「おおーい、高瀬先生、そんなところで、何してるの！！ 電話、電話よっ！」

ちょうどその時、教員と思われる女性が校舎の窓から身乗り出して、手を振りながらリコを呼んだ。彼女の手には、コードレスの白い電話があった。

「今行きますっ！！ 待って、シュウちゃんっ！」

リコは、同僚に返事しながらも、ぼくを引きとめようと手を伸ばす。だけど、その指先は、ぼくの袖口を掠めていく。

「しばらく、この町にいいことになると思う。そのうち、また会おう」

振り向かないで、リコに言うと、ぼくはそのまま校門をくぐった。

子どもたちの声と、見つめるリコの視線が、背中に降りかかる。それでも、今立ち止まれば、幼なじみに迷惑をかけるだけだ。ぼくは、後ろ髪ひかれる思いから逃げるように、かつて何度も通った小学校の坂道を下っていった。

やがて、背中に感じるものが、軽くなる頃には、小学校のふもとにある住宅地へとたどり着く。

複雑に入り組んだ路地と、軒を連ねる家並みは、多少風景に変化はあるものの、あの頃の雰囲気を残しており、記憶を辿れば、かつて目の前の曲がり角に、毎日金槌の音を鳴り響かせる工務店があったことや、道の向かいに校長先生の豪邸があったことが思い出される。

更に道を行けば現在もリコの家があり、その脇に赤いポストが目印の小さな郵便局があつて、郵便局から真つ直ぐ道なりに進めば「蛭池」と名づけた小さなため池がある。ここでヨンちゃんと一緒に蛭を乱獲したのは、遠い昔の思い出。その「蛭池」のわきを抜ける路地には、住宅街に似合わない場末のスナックがある。

そして、スナックを右手に通り過ぎると、突き当たりに交番のある曲がり角で、道は二つに分かれる。右に進めばかつての我が家がある。昭和の風情をたつぷり残した、木造平屋の赤い屋根の家。ひと目、我が家を見ておきたいと思ったものの、夕方の約束のことを思い出し、頭を振る。

「今は、それよりも」

と、内心に繰り返し、曲がり角を左側に曲がった。

二十年の歳月で変わったもの、変わらないもの、それらが混在した街並みは、温かくも懐かしくぼくを包み込むようだった。やがて、そんな路地を抜けると、眼前に森と一軒の洋風の民家が、ひっそりと建っていた。

他の民家とは明らかに一線を画する西洋風の白壁にはツタがまわりつき、屋根瓦は色あせてツヤを失い、「ガーデン」と呼ぶのが相応しい庭は荒れ放題。窓と言う窓には色あせたカーテンがかけら

れ、中の様子を確認することは出来ないが、どうやらこの家は空き家となつて久しいらしい。それが証拠に、豪華な飾りのついた格子の門扉には、いまもぼくの知る、以前の住人の表札が掲げられている。

「浅井」

その苗字を見るだけで、胸がキュツと痛くなる。浅井夏音……忘れることの出来ないその名前が、ぼくの胸を締め付ける。

そう、ここが、ぼくの人生の始まりの場所。

そして、ここからぼくたちの旅は始まった。

今日みたく青い空が広がり、熱気を帯びた風がそよぐ、それはとても暑い夏の日。空を仰ぎ、瞳を閉じれば、その日のことが、今でも鮮明に蘇る。

ぼくの意識は、二十年前の、あの夏の日へ……。

6 . あの夏の日へ（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

7・洋館のヒメ

ヒメというのは、彼女の本名じゃない。だけど、いつも穏やかで、春の風のような温かい笑顔を携え、触れただけで壊れそうなくらい可憐な彼女には、ぴったりの愛称だとぼくは思う。誰が、彼女を最初にヒメと呼んだのかはわからない。そもそも、ぼくは彼女が転校してきて、しばらくの間ろくに口をきいたこともなければ、「ヒメ」と呼んだこともなかった。

ヒメが転校してきたのは、ぼくたちが小学四年生に上がったばかりの春のことだった。ヒメは、春風のような笑顔とともに、ぼくたちの教室にやって来た。先生が黒板に彼女の名前を書き記す。そのままで彼女は、恭しくお辞儀した。

「浅井夏音です。F市から転校してきました。よろしく願いします」

その鈴が鳴るような声は、雷のようにぼくを打ち据えた。十歳のぼくは、恋なんてしたことがない。当たり前のことだけど、特にクラスでも大人しい性格だったためか、女の子の友達といえば、幼なじみのリコくらいだった。そんなぼくにとって、彼女と目が合った、び、カーッとほっぺたが熱くなって、胸がドキドキするというのは、初めての経験だったことも含め、このモヤモヤ感の正体は何なのか、分からなかった。

山と田んぼばかりの夏八木町に転校生なんて、奇跡に近く、彼女はあつという間にクラスに溶け込んだ。もともと、彼女の祖父がこの町の有力者だったというのも幸いしたのかもしれない。彼女の祖父、浅井源一郎は地元の農業を発展させた人で、学校の裏手にある大きな洋館に住んでいる。ヒメは、とある理由でその祖父の家へと引っ越してきたのだ。だから、街の人や子どもたちにとっても、他所の人という印象は薄かったのかもしれない。

だけどぼくは、ヒメと目が合うたびにずっとそっぽを向いて、廊

下ですれ違う度に逃げるように走り去り、ヒメが話しかけてくれても、気付いていないフリをして無視をする。それじゃまるで、ヒメのことを避けているようで、こんなぼくのことをヒメが気にかけてくれるなんて在り得ないと思っていた。

大人ぶって言えば、それはジレンマだ。好きな女の子に、上手に気持ちを伝えられないからと言って、わざと「興味なんかないよ」と言う風を装って、嫌っているフリをする。でも、ホントはヒメのことが、どうしようもなく好きで、視線はいつだってヒメのことを追いかけていた。

そんなぼくの気持ちに、一番最初に気付いたのは、やっぱり、リコだった。その頃からリコは、正義感に篤く、世話焼きで、かつ大人びたところがある、ややっこしい女の子で、

「どうしたの、暗い顔して、溜息ばかり吐いちゃって。あ、さては、恋の悩みだな？ うむむ……相手はヒメちゃんでしょっ！」

と、唐突に言うものだから、ぼくは心臓が飛び出しそうになっと思わずうろたえてしまった。かえって、それがリコに確信を与える。昔から、勘が鋭いリコには、頭が上がらない。

「ふふん、シュウちゃんも恋をする年頃になったみたいね。確かに、ヒメちゃん可愛いもんね、分かるよ、その気持ち。恋に悩む溜息！」

リコは勝手に盛り上がりながら、ぎゅっとぼくの両手を握る。場所はお昼休みの教室。ヒメは窓際の席で、他の女友達と楽しそうにおしゃべりしている。廊下や運動場から聞こえる遊び声に阻まれて、ぼくたちの声が届くはずもないのに、彼女にぼくたちの会話が聞かれやしないかと、ひやひやしてしまう。でも、リコはお構いなしだった。

「恋とか、ダサイよシュウちゃんっ！」

突然、ぼくとリコの間を割って入るように、げっそりとした不健康そうな顔が現れる。当時のヨンちゃんは、栄養が足りているのか心配になるくらいやせっぱちで、針金か牛蒡のようだった。もっとも、本人はそのことを気にしているみたいなので、口には出さない。

「ダサイって何よ。恋のひとつもしたことないような、ヨンちゃんに言われたくないわよね、シュウちゃん」

と、リコに同意を求められても、ぼくは困るだけ。こと、恋の話においては、十歳の男子なんて、素人同然と言っても過言じゃない。ぼくたちごく普通の男子にとって、バイブルとも言える少年漫画には、恋の話なんて描かれていない。大抵、筋肉質なヒーローが必殺技の名前を連呼して、悪の怪人をやっけるような、お話ばかり。一方、女の子のバイブルはいつだって、恋の話で埋め尽くされている。男女の違いなんて、意識したことはなかったけれど、その時のリコは、なんだか恋愛の大先輩のように見えた。

「よし、オクテナシュウちゃんのために、わたしが一肌脱いで上げましょうっ！ 要は、ヒメちゃんと仲良くなるきっかけが出来ればいいわけだよね。任せて」

リコはそう言うのと、すつくと立ち上がり、そのまま無遠慮にヒメの方へと歩いていく。そういうのをお節介って言うんだよ、と止めようとしても、一度決めたら梃子でも動かないリコに、何を言ってもムダだと知っているぼくは、慌ててヨンちゃんを引き連れて逃げ出してしまった。

後になって、幼なじみが気を利かせてくれた、絶好のチャンスになったのかもしれないと、ひどく後悔したのを良く覚えている。こんなんじゃない、小学校を卒業するまで、ろくに口も聞けないかもしれないと思えば、また溜息がこぼれる。そんな毎日の繰り返しで、あつという間に季節は移り変わった。

まるで、ぼくの溜息が集まって空を灰色の雲で塗りつぶしたような、雨の季節。木造校舎の手前にある、花壇のアジサイが、雨天にわずかな彩を添える。

「ヒメって、病気の療養のために、夏八木のお爺ちゃんの家につ越してきたらしい」

と言う噂を耳にした矢先、ヒメは学校を休みがちになった。春先の笑顔は消え、ただ、ぼつかりと彼女の机だけが空席になって、寂

しそうにしている。ぼくの溜息はますます増える一方で、どんどん空を覆い隠す灰色の雲が厚くなっていき、やがて大粒の雨が校舎や運動場を叩きつける。

そんなある日、家に帰ろうとしたぼくを、担任の先生が呼び止めた。

「野崎。悪いが、浅井に休んでいる間のプリントを届けてやって欲しい。それと、浅井の様子も見て来てやってくれないか？」

と、ぼくの有無を聞く前に、どつさりとプリントの束を手渡された。どうやら、ぼくに白羽の矢が立ったのは、クラスメイトの中で、家が一番近いと言う理由だけだったらしい。それが、新たなチャンスかどうかは知らないけれど、ぼくは黄色い雨傘を差して、一人でヒメの家に向うことになった。本当は、ヨンちゃんカリコ、もしくは二人に付いて来てもらいたかったけれど、リコが、「邪魔しちゃわるいから」なんてワケわかんないこと言って、ヨンちゃんを連れて姿を消したためだ。

道すがら、ぼくは緊張感に苛まれた。先生に頼まれたから、と言う義務感だけで、ヒメと口をきく勇気がない、情けないヤツ。雨の中、交番の前で家に向う道とは反対側の道に入った時には、爆発しそうなくらい心臓が鼓動を打ちまくって、そして、浅井家の洋館の前に立つたときには、気を失いかけた。

「ここでいいんだよね？」

誰に問うでもなく、表札を確認して、格子の門扉をくぐり、飛び石を踏みながら玄関へと向う。その先にある庭には、赤や黄色のバラが咲いており、庭を抜けると、ぼくの目の前にライオン型のノブが付いた、大きな玄関扉が現れる。我が家の玄関のウン倍はあるのかと言う、大きな扉をノックする。

すると、家の中から足音が近づいてきて、「どなた？」ととても美人な女の人がひよつこりと顔を出した。ヒメのお母さんだろうか？……なんて思っていると、女の人は怪訝そうな顔でぼくを見る。それで、一気に緊張感がピークを迎えた。

「あ、あの、ぼく。ひ、ヒメ、じゃなくって、浅井さんのクラスメイトの、野崎秋人ですっ！ ぶ、プリントっ、持ってきましたっ、そっ、それと、お見舞いですっ」

どもるわ、裏返るわ、カタコトになるわで、ヒメのお母さんが吹き出すのも無理はない。恥ずかしくなって逃げたしたい気持ちになってくる。すると、ヒメのお母さんは、ヒメと同じように優しく微笑んで、

「あらあら、夏音のお友達ね。わざわざありがとう。雨に濡れるわよ、さあ、上がって。ちょうどさっき、夏音、目をさましたところなの」

とぼくを洋館の中に招き入れた。素直な感想を述べるとするなら、そこは西洋のお城のような場所だった。広い玄関ホール、赤いじゅうたん、二階へと伸びる階段、高価な調度品。すべてが、ごく普通の家庭に生まれたぼくにとって、異世界のように感じられた。

ぼくは、ロボットみたいになりながら、二階にあるヒメの部屋へと通された。女の子の部屋に入るのは初めてだった。もちろん、リコの部屋には入ったことがあるけど、幼なじみだからノーカンだ。それに、ふかふかのじゅうたん、レースのカーテンや、白いタンス、可愛いぬいぐるみなど、それだけで、畳敷きのリコの部屋とは大違い。

「夏音、お友達がお見舞いに来てくれたわよ。野崎くん」

お母さんの言葉にヒメは、ベッドに横たわるヒメが驚きを顔一面に表して、そして自分がパジャマ姿であることに気付いて、恥ずかしそうに、布団の中にもぐりこむ。

「の、野崎くん、どうして？」

「えっと、あの、その、授業のプリントっ！」

ぼくは相変わらず上擦った声で、先生から預かったプリントを差し出した。ヒメはまた驚く。

「届けに来てくれたの？」

「う、うん。それと、浅井さんの様子を看に來たんだ。病氣、大丈

夫？」

妙にドギマギしちゃって、ぼくは部屋の真ん中で立ち尽くしてしまふ。本当は、先生に命じられたからなんだけど、それは隠すことにした。

ヒメは、そんなぼくの内心のたくらみは知らないで、布団の中から顔だけ出して、何故だか嬉しそうに笑う。

「ありがとう、野崎くん、嬉しい」

あの時と同じ、鈴のなるような声。とても透き通っていて、ぼくの心に染み渡っていき、そのまま、溶けてしまいそうになる。きつと、ぼくは耳の端っこまで真っ赤になっただろう。

そんなぼくとヒメの姿を、微笑ましく見つめながら、ヒメのお母さんはわざわざぼくのために、とても美味しい紅茶とお菓子を出してくれた。紅茶に含まれるポリフェノールには、気分を落ち着かせる効果があるらしい。もともと、その頃のぼくはそんなことは知らなかったけれど、紅茶の香りに、ほどなくして落ち着きを手に入れることが出来た。

ヒメの様子は思ったよりも元気そうだ。夏風邪でもこじらせたのだろうか、なんてぼくが思っていると、

「夏が近づくと、いつも調子が悪くなるの。お医者さまは、奇跡でも起きなきゃ治らないような、とても難しい病気なんだって、教えてくれた。だから、お祖父さまのいる、空気のいいこの街に引っ越して来たの。少しでも、病気の薬になればってね」

と、ベッドの上で上体を起こしたヒメは、ぼくに話してくれた。

「重いのか？」

「わかんない……でも、時々ものすごく息苦しくなって、発作で体が動かなくなつて、もしかしたらこのまま死んじゃうんじゃないかって思うときもあるの」

可愛らしいピンクのパジャマの胸の辺り、小さなリボンを押さえながら、ヒメの横顔に翳りがさす。そんなヒメの顔を見るのは初めてだったし、いつも朗らかな彼女らしくないと思ったぼくは、

「じゃあ、ぼくが浅井さんの病気を治してあげる」

と、根拠のないことを口走ってしまった。ヒメの悲しそうな顔を見たくないと言う一心で、ほとんど衝動的に。だけど、ヒメは再び嬉しそうに微笑んでくれた。

「ありがとう……！ ホントはね、わたし、野崎くんに嫌われてるんじゃないかって、思ってたの」

「え？ そんなことないよっ」

「ホントに？ だって野崎くん、いつもわたしのことを避けてるみたいだったから……」

「それはっ」

言いかけた口がこもる。それは、ぼくがヒメのことを好きだから、なんて言える筈もなく、舌を噛みそうになりながら吐き出した言葉は、

「嫌いなわけじゃないよ、だってぼくたち友達じゃないか」

という、あまりにあいまいな言葉だった。すると、ヒメは白い手の小指を差し出して、

「じゃあ、約束。いつか、野崎くんがわたしの病気を治してくれるって」

屈託のない笑顔をくれる。この部屋にはぼくとヒメしかない。つまり、その笑顔はぼくだけにくれたもので、その「ぼくだけ」というところが一番重要だった。

ぼくは、ヒメの細い指に自分の小指を絡めた。

「指きりげんまん、嘘ついたら、針千本のーますっ！ 指切った！
！」

7・洋館のヒメ（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

8・胸騒ぎ

「隣町との境に、こおろぎ山と言う場所がある。こおろぎ山というのは、見た目から誰かが勝手に付けた名前で、本当の呼び名は知らない。ただ、そこへたどり着く道のりは想像以上に険しい。まず、地獄の門をくぐりぬけ、死神の道を辿り、荒れ狂う大蛇の川を越える。そして、果て無き平原を歩き、谷を越えた先に目指す、こおろぎ山があるんだ。こおろぎ山には、年中枯れることのない、常緑の木が一本。その木の葉は、あらゆる傷や病を癒し、人々に幸福を与えると言う。その木の名は、『世界樹』」

講師よりしく、抑揚をつけた喋り方でヨンちゃんが言う。その顔つきは、さも「ご清聴ありがとうございます」と拍手を求めているように見えた。

「何それ、ヨンちゃんの好きなゲームの話？」

と、隣のリコが茶化す。ぼくも悪乗りして、「じゃあ、オーブを集めなきゃね」なんて言ってみる。もちろん、ヨンちゃんはぶうつとふくれっ面をして、「もーっ！ 真面目に話してるのにっ」と、怒りを露にする。そんなぼくたちのことを、いつも楽しそうにヒメは見つめていた。けして輪の外にいるわけじゃない。ぼくたちは、ヒメを中心にしていた。

ぼくのお見舞いがきっかけで、ぼくとヒメの距離は急速に近づいた。もともと、臆病者のぼくが勝手に距離を作っていただけだから、一度わだかまりが解ほどけてしまえば、仲良くなれるのは当然のこと。そのあたり、十歳の子どものどうしの男女関係や人間関係、恋愛観の未熟さが、却って功を奏したと言い換えてもいいのかもしれない。

おかげで、好きな女の子と話すのではなくて、友達と話をするんだと思えば、それまでドキマギしっぱなしだったのが、嘘のようにぼくとヒメは打ち解けた。時には、リコ、ヨンちゃんを混ぜた四人で遊んだりもした。体の弱いヒメは、ぼくたちのように野山を駆

け回ることは出来なかったけれど、ヒメの部屋で「世界樹」などという他愛もなくおしゃべりたりするだけでも、ぼくたちにとっては楽しい時間だったし、ヒメにとってもそうだったに違いない。

それは、ぼくたちが友情と言う絆で結ばれたことの、何よりの証だったと思う。

だけど、夏が近づくつれて、ヒメの体は目に見えて弱っていった。学校にはほとんど出席することがなくなり、部屋のベッドで一日を過ごすことが多くなった。もちろん、ぼくたちは毎日欠かさずにお見舞いに行った。学校であつた出来事や、ぼくたち三人がこれまでやらかしてきた悪戯や冒険の話をするたびに、ヒメは羨ましそうにする。そんな時、不意に差し込む翳りが少しずつ濃くなっていることに、ぼくは不安を感じていた。

やがて、季節は、雨から真つ青な青空へと変わる。どんよりとした湿り気を帯びた風は、いつの間にか、さんさんと降り注ぐ夏の太陽に乾かされ、山々の木々はまるで季節を謳歌するかのように緑を湛え、セミやカエルの鳴き声が、あちらこちらからこだまする。そう、夏がやって来たのだ。

「今年の夏は、ヒメと一緒に、汐浜町の海へ遊びに行こう」

最初に言い出したのは、リコだった。リコはどちらかと言えば、ぼくたちのリーダー的な存在で、実際のところ、遊びを提案するのは、いつもリコの役目だった。

汐浜町と言うのは、電車で二駅のところにある、夏八木に負けず劣らずの小さな漁村で、これまた小さな海水浴場がある。そんな漁村の海へ行こうと、リコが言い出したのには、理由がある。

あるとき、ヒメが「海をみたことがない」と言った。彼女は、夏八木に来るまで、都会の真ん中に住んでいて、かつ、病気の所為で一度も海へ行ったことがないのだそうだ。だったら、ヒメに海を見せてあげたい、とリコは息巻いた。息巻いては見たものの、小学生が親に内緒でいける海水浴場といえば、交通費などの金銭的な面から言っても、汐浜町の海岸くらいかなかった。だけど、それはちょ

つとした冒険旅行だ。冒険とは、危険を冒すこと。体が弱く、走り回ったりすることの少なかったヒメが、それを喜ばないはずもなく、わくわくと期待に胸を膨らませているのが、ぼくにも分かった。

そうして、ついに小学四年生の夏休みが始まった。その日も、真面目が売りのぼくは、ちゃんと早起きして、ラジオ体操を終え、朝ごはんもそこそこに、宿題に取り掛かった。苦手な漢字の書き取りを済ませる頃には、時計の針は十時をまわっていた。更に、算数のドリルに取り掛かる。一気に集中してやれば、夏休みの中ごろには、すべての宿題を終え、絵日記を残すのみとなる算段だった。

宿題を終えると、時刻はお昼を少しだけまわる。

夏休みが始まる前に決めた「予定表」というタイムテーブルでは、その日の宿題が終わり次第、自由時間になっている。つまり、お昼から夕方まで、ぼくは勉強から解放されるわけだ。真面目と言っても、勉強が好きな秀才じゃない、中途半端なぼくとしては、その自由時間は至福の時間だった。なぜなら、今年の自由時間は、すっかり日課になった、ヒメのお見舞いに充てられていた。いつのまにか、好きな女の子に会えると言うことが、嬉しくて仕方なくなっていたのだ。

ぼくは勉強机の上を片付けてから、出かける前の腹ごしらえ、お昼ごはんを求めてキッチンへ向った。平屋の狭い我が家では、部屋を出れば、いつもキッチンから母の料理の音が聞こえてくるはずなのに、今日は物音もしなければ、美味しそうな匂いも漂っては来ない。

「お母さん？」と呼びかけてはみたものの、母の姿はどこにもなかった。怪訝に思いながら、仕方なく、炊飯ジャーを開けて、冷え切ったご飯を茶碗によそって、その真ん中に生卵と醤油を落として、もぐもぐやっていると

玄関の扉が乱暴に開いて、母が汗を流しながら、どこから戻ってきた。

「あら、秋人。どうしたの？」

母は卵かけご飯をほお張るぼくの顔を見るなり、そう言った。だけど、その科白はぼくのものだ。

「お母さんこそ、どうしたの？ どこへ行ってたの？」

「ちよつと町役場に行ってたの。あら、お昼廻ってたのね、気付かなかった……」

「町役場？ どうしてそんなトコに行ってたの？」

キツチンの隅にかけられた時計を見上げる母に、ぼくはご飯を飲み込んで問いかけた。すると、母はちよつとだけ困ったような顔をして、

「いろいろと用事があるのよ。そんなことよりも、今日も浅井さんのお家にお邪魔するの？ 粗相のないようにしないさいよ」

とぼくに、説教じみた口調で言う。十歳のぼくは「そそう」の意味をまだ知らなかったけれど、言いたいことが何なのかは口調だけで分かる。ぼくは、適当に「はい」と答えながらも、母の手に握られた、一枚の書類を見逃さなかった。そこには、小さく「転居願申請書」と書かれていた。

その時には、その書類が持つ意味を気にすることはなかった。きつと大人の世界で交わされる、難しい「手続き」とか言うやつなんだろう。そんな風に軽く考えていたぼくは、お昼ご飯を済ませると、野球帽を被って、おざなりな「言ってきます」を母に告げ、家を出た。

夏の日差しは、あまりにもとげとげしい。野球帽を被っていても、すぐに日差しに汗が滴り落ち、あつという間に喉が渴く。家を出て、ぼくはまず、ヒメの家とは反対方向に向って歩き始めた。その道をまっすぐ行けば、街を走る唯一の二車線道路に出る。そしてそのまま駅のほうに向えば、駅前商店街の入り口に、古びた木造二階建ての家が見えてくる。

その家の一階部分には、大仰な筆文字で描かれた、お店の看板がある。「杉浦商店」、即ちそこはヨンちゃんの家だ。もともとは、三十年以上昔、つまりぼくたちの父や母がぼくたち位の頃には、万

屋だったそうだが、今ではどんな経緯があつたのか、駄菓子屋に変貌している。いつも、お店の軒下で、ヨンちゃんのお祖母ちゃんが座って店番をしている。言ってみれば「幼なじみの家」であると同時に「行きつけのお店」だった。

「こんにちわ、ヨンちゃんいますか？」

とぼくが言つと、お祖母ちゃんが答えるよりも前に、二階の窓からヨンちゃんが顔を出す。すると、お祖母ちゃんは一瞬で、優しいようなシワだかけの顔を般若のようにゆがめて、二階のヨンちゃんを叱る。

「四郎、宿題が終わるまで遊びに行つちゃダメだからね！ まったく、目を離すとすぐ遊ぶんだから、我が孫ながら、情けない。シユウちゃんは、ちゃんと夏休みの宿題やつてるかい？」

「うん。さっきまでやってたよ。今日は、国語と算数したの」

「よしよし、いい子だね。じゃあ、四郎のバカを待ってくれてる間、祖母ちゃんが特別に力キ氷をご馳走してやろうかね」

時々、ヨンちゃんのお祖母ちゃんは、ぼくやリコに力キ氷をご馳走してくれる。氷蜜の種類が、イチゴしかないのは玉に瑕だけど、ヨンちゃんを待っている間にご馳走に預かる力キ氷は、とても美味しかった。冷たくて、甘くて、キーンとする。

しばらくすると、バタバタと忙しく足音が聞こえてきて、ヨンちゃんが店先に姿を見せた。どうやら、宿題を急ピッチで済ませたらしい。

「あーっ、いいな、俺もちようだいっ！」

夏空の下で力キ氷を食べるぼくの姿を見咎めたヨンちゃんは、羨ましそうにする。ぼくは最後のひとくちをすくって、

「ヨンちゃんは、もっと栄養のあるものを食べた方がいいよ」

と、それをぱくつと食べた。お祖母ちゃんが、それを見てけたけたと笑う。きつと、骨と皮みたいに瘦せっぱちなヨンちゃんには、的を射たことだったのかもしれない。

ぼくは、お祖母ちゃんにお礼を言つて、ヨンちゃんとともに、来

た道を引き返す。道中の話題は、昨日読んだ漫画の話。どちらかと言えば、ヨンちゃんがやや興奮気味に語って、ぼくが相槌を打つというのが定番だった。やがて、我が家の前を通りすぎて、交番の前までやってくると、交番の入り口に、まるでお巡りさんのように仁王立ちする、リコの姿が見えた。

「遅いつ！ 二人ともっ」

リコの視線がぼくたちを睨みつける。どうでもいいことだけど、リコと喧嘩すると、男のぼくたちは口でも腕っ節でもかなわない。だから、素直に謝る。

「ごめん。待ち合わせにヨンちゃんがいなかったから、迎えに行ってた」

「で、このリコさまを炎天下に三十分も待たせたの？」

仁王さまの額に四つ角が出来ている。そんな顔しちや、女の子らしくないよ、なんて言うのは火に油を注ぐようなものだ。そもそも、リコと一緒にヨンちゃんを迎えに行けばよかった、と今更思ってももう遅い。

「それは、今日の宿題を終わらせてなかった、ヨンちゃんに言うてよ」

「何だよ、祖母ちゃんから力キ氷奢ってもらってたくせに」

と、ぼくたちはお互いに罪のなすり合いをする。交番の前で。

最初に呆れたのは、リコの方だった。はあっ、とぼくたちに聞こえるように溜息を吐き出すと「まあいいわ」と前置いて、

「ヒメが待つてるから、早く行きましょ。あ、明日はわたしもヨンちゃん家行くから。そんでもって、今日の罰として、力キ氷奢ってもらう、二人に」

と言い、くるりとヒメの家の方角に、踵を返した。どうやら、リーダーには逆らえないらしいと悟った、ぼくたちはリコのやや後ろを追いかけた。

ヒメの家までは、交番からそれほど遠くはない。すぐに、木陰に覆われた、涼しげな白い洋館が見えてくる。と、唐突に、ぼくたち

の背後から黒い外国の車が、クラクションを鳴らして追い越していく。ぼくたちは慌てて、道の端に避けて、車が通り過ぎるのを目で追った。車はそのまま走り去るかに思われたけれど、ヒメの家の前で急ブレーキをかけると停まった。

そして、勢い良く後部座席の扉が開くと、茶色の鞆を持った、白衣の男が現れる。その出で立ちから、ぼくたちはすぐに、その男が医者であることに気付いた。

「先生！ 突然、申し訳ありません」

医者の男を出迎えたのは、ヒメのお母さんだった。ヒメのお母さんは、いつになく真つ青で、余裕のない表情で、何度か医者に頭を下げながら、医者を家へと招き入れる。

ヒメの身に、何かがあったのかもしれない。ぼくは、脳裏を冷たく吹き抜けていくような、イヤな胸騒ぎを覚え、一目散に走り出した。

8 . 胸騒ぎ（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

9・世界樹の葉を求めて

十歳の子どもが、病気の知識なんてないのは当たり前だ。医学の知識が乏しい、というだけではなくて、身近に病が存在していないのだ。例えば、癌だとか、脳卒中だとか名前だけなら、映画やテレビで耳にすることはあっても、その病が意味することまでは知らないのが普通だ。それが、複雑怪奇な名前の病であれば、尚更のこと。風邪くらいしかひかない、いたって健康な子どもには、理解できないものだ。

だから、ヒメの病名を聞いても、ぼくはピンとこなかった。それが当たり前のことだった。だけど、そんな自分を許せなかったのかもしれない。

ヒメの家に駆け込んだぼく目の前で、胸元を押さえて苦しむ彼女の姿を見ると、まるで自分の心臓が掴まれたように苦しくなる。何とかしてあげたいとさえ思うのだけど、子どものぼくに、何が出て来ると言うのだろうか。

「ごめんなさいね」

と、ヒメのお母さんはぼくたちに言っただけで、何に對して謝っているのかは良く分からなかった。きつと動転していたのかもしれない。お昼ごろまでは、ぼくたちがやって来るのを楽しみにしていたそうなのだが、突然、何の前触れもなく、ヒメは真つ青な顔をして額に脂汗を滲ませ、苦しみ始めた。

「今日から明日にかけてがヤマでしような……」

匙を投げるという言葉がある。医者が、治療を断念して、薬の量を測るための匙を投げ捨ててしまうことに由来している。まさに、その光景が目の前で繰り広げられることに、ぼくは怯えた。

白髪が目立つ、初老の医師は瞳を伏せたまま、「もう手の施しようがない」と言いたげに、溜息をつく。ヒメのお母さんは、小さく震えながら、立っているのがやっとといった感じで、娘の顔を見つ

める。ぼくは、ぼくたちは、どうしていいのかも分からず、傍らに立ち尽くす。

「うつつ」

と、ヒメが呻けば、尋常な気持ちではいられない。「どうか、ヒメを助けてください」と神さまに祈ってみるものの、都合よくぼくの願いを聞き入れてくれるような神さまはこの世に居るはずもなく、ただただ、ヒメが苦しむ姿を傍観するほかなかった。

不意に、ヒメの口元が動く。

「シュウくん……助けて」

確かに、ヒメはぼくの名を呼んだ。リコも、ヨンちゃんもそれを聞いていたのか、揃ってぼくの顔を見る。ぼくは、そっとヒメに近づこうとした、その瞬間誰かが強くぼくの肩を驚つかみにする。その大きな手は、ヨンちゃんのものでも、ましてリコのものでもないもつと、シワシワのお爺ちゃんの手だ。

「帰りなさい、君たち」

低く、くぐもった声。振り向くと、そこには見るからに貫禄のある背の高い老人が立っていた。その人が、ヒメのお祖父ちゃんであることに気付く間の数秒間に、

「いますぐ、帰りなさい」

と、ヒメのお祖父ちゃんは繰り返した。それは、鉛のように重たく、冬のように冷たい。ぼくは、慌てて「看病させてください」と言おうとしたのだけど、ヒメのお祖父ちゃんはそれを遮るように被せて、ぼくを睨みつけた。

「君に出来ることなど何もない。それに、夏音が苦しんでいるのは、君たちの所為じゃないのかね？ 頼みもしないのに、君たちがお見舞いと称して、毎日夏音のところへ来るから、夏音は無理をしたんじゃないのかね？」

「そんなこと、ありませんっ！ だって、わたしたち、ヒメの友達だから！」

と、いち早くヒメのお祖父ちゃんにたてついたのは、リコだった。

だけど、ぼくは言い返す言葉が見つからなかった。お祖父ちゃんの言うとおり、「見舞いに来て欲しい」とヒメに言われたことは一度もなかった。ぼくたちが……いや、ぼくが勝手にヒメのところへ足を運んでいたに過ぎない。好きな女の子とお近づきになれた、という嬉しさに舞い上がっていただけだとしたら、今、ヒメが苦しんでいるのがぼくの所為だと言われても、仕方のないことのような気がした。

「だったら、夏音をそつとしておいてやってくれ。これ以上、可愛い孫娘を苦しめないでくれ。あの子は、君たちのように、野山を走り回れる体じゃないんだ」

「はい」

ぼくは俯き加減に返事した。「いいの？ シュウちゃん」と尋ねるヨンちゃんに、無言で頷きを返すと、そのまま部屋の出口に向う。ふと、もう一度だけ、ヒメの顔を見たい。ぼくは、ドアのところで立ち止まって、ベッドを振り向いた。ヒメの苦しそうな顔。一秒だつて見たくない。何とかできる力がぼくにあるなら、今すぐにだつて、ヒメを助けたいと思う。

だけど、医者も匙を投げるような病気に、ぼくに何ができる？ 傍にいて元氣付けることも、ヒメの祖父に断られた。好きな子のために、何も出来ない自分の無力さが、途方もなく情けない。

ぼくは、項垂れて洋館を後にすした。外は、夏の空が広がっていて、いつもなら心がウキウキするような天気も季節も、すべてが恨めしく思えた。リコもヨンちゃんも同じ思いだったのかもしれない、ぼくたちは並んで、まるで雨空の下を歩くように沈みきっており、一言も口を利かないまま、交番の前に差し掛かる。

本当は、こんな夏休みがやってくることを望んではいなかった。新しい友達と過ごす夏休み。ぼくにとつてはそれだけじゃない。初めて好きになった女の子と、一緒に過ごす夏休みに、どれだけ期待を寄せていたことか。それが、あつという間に暗転してしまった。「おや、どうした。通夜に言ってきたみたいな顔して、何かあった

のかい、仲良し三人組」

交番の前で、お巡りさんがぼくたちを呼び止める。腰に帯びた警棒は、真新しく、この街の平和さを物語っているようで、ちよつと頼りない。それでも、目配りの利く、お巡りさんはぼくたちの、沈みきった姿を見逃さなかった。そりゃそうだ。三十分ほど前、交番の前で、ちよつとしたコントを繰り返していたぼくたちが、今度は、暗い顔していれば、気になって当たり前だ。

だけど、そんな大人の気遣いも、今のぼくたちには伝わらない。

すぐに、リコが鋭くお巡りさんをにらみつけた。

「そんな、縁起でもないこと言わないでよっ！」

「す、すまん」

あまりの剣幕に、お巡りさんはたじろいだ。そのあたりが彼の、頼りないと評される所以なのだろう。

「あーっ！ ムカムカするっ。何あのお祖父ちゃん！ ヒメの具合が悪くなったのが、わたしたちの所為みたいに言っつっ！！」

リコは、がーっと、吠えるように空に向って叫び声を上げる。

「そうだよっ。なんで引き下がったのさ、シュウちゃん！」

続けて、ヨンちゃんがその矛先をぼくに向けた。ぼくは、やっぱり俯いたままで、

「だって、仕方ないよ。もしかしたら、ぼくの所為かもしれないし。それに、ヒメが苦しむ顔を見ていられなかったんだ」

と、矛先から逃げようとする。そんなぼくに、リコが少しふくれっ面をしながら、「臆病者」と呟いた。

「そんなわけないでしょ？ シュウちゃんが来てくれるのが嬉しいって、ヒメ言っつてたじゃない」

「そうだけど……」

だんだんぼくの声が弱々しくなる。リコは、額に四つ角を作って、ぼくの背中を思い切り叩いた。衝撃が痛烈に背筋を駆け上っていく。本当は、リコだって分かってる。もしかしたら、自分たちの所為かもしれないと。だけど、それを認めたくないという気持ちが、ぼく

の背中を打ったのだ。

「こらこら、女の子が暴力とは感心しないぞ」

と、見当違いなことを言ったお巡りさん、更にリコの矢のような視線に晒される。その傍らで、ヨンちゃんが、重たく溜息を吐き出した。

「今夜がヤマだなんて、そんなのないよ。四人で、海へ行こうって約束したのに」

約束……。突然ぼくの脳裏に、ヒメがぼくにだけくれた笑顔と言葉が蘇る。小指と小指を重ねて、指きりした約束。あの指の細さも、温かさもはつきりとこの手に伝わる。

『じゃあ、約束。いつか、野崎くんがわたしの病気を治してくれるって』

ヒメはぼくに助けを求めている。ぼくと、ヒメの交わした約束を果たすのは、今だ。でも、奇跡でも起きなきゃ治らないような、難しい病気をぼくに治せるわけがない。それこそ、奇跡でも起きなきゃ、例えばヨンちゃんの好きなテレビゲームのような……。

はっと、ぼくは息を吞んで、きよんとしたヨンちゃんの顔を見た。

「ねえ、ヨンちゃん。あの話、ホントのこと？」

不意にぼくが言い出したものだから、その意味を図りかねたヨンちゃんは、眉間にしわを寄せて、「何のこと？」と聞き返してくる。

「あれだよ、あれっ！ ヒメに話してた、『世界樹』の葉っぱのこと」

「えっ？ うーん、どうだろう。あの話、俺のお祖母ちゃんから聞いた話だから、ホントかもしれないし、作り話かもしれないし……」

「でも、『世界樹』の葉っぱがあれば、どんな病気だって治せるんでしょ？ だったら、ヒメの病気だって、治せるかもしれない！」

「それだっ……！」

横から、リコが両手を打った。だけど、ヨンちゃんは困った顔をして、

「でも、隣町との境にある、こおろぎ山だよ。とっても遠いよ……
子どもの足だけじゃ」

と、苦言を呈するように言い返す。

「でも、遠いつて言っただて、汐浜の海岸に行くよりは近いはずだよ。
行こう、シユウちゃん！ 世界樹の葉っぱを採ってきて、ヒメを助
けるの！ ほら、ヨンちゃんも、ぐずぐずしてたら、すぐに夜にな
っちゃうよ」

リコは、苦言などお構いなしで、ヨンちゃんの手を引っ張った。

リコの言うとおり、電車で二つ先の駅まで行かなくてはならない、
汐浜の海水浴場に比べれば、おなじ町内にある山に行く方がずっと
近い、と思うのは、子どもの甘い算段だった。もっとも、ぼくはヒ
メを救う手立ては、他にないと思っていた。奇跡じゃなきゃ治せな
い病気なら、奇跡を起こしてやればいい、なんて、本当は言葉にす
るほど簡単なことじゃないことも、十歳の子どもには分からなかつ
たのかもしれない。

それでも「仕方ないな」とヨンちゃんが言えば、旅は始まったも
同然だ。

かくして、二十年前、ぼくは幼なじみと一緒に、ヒメの命を助け
るために、世界樹の葉を求めて、旅に出ることとなった。だけど、
それは、とても険しい道のりとなることを、ぼくたちは知る由もな
かった……。

9 ・ 世界樹の葉を求めて（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

10・奇跡の一撃

二十年の月日を経て、無人となった白の洋館、浅井邸を後に、ぼくはあの日の道を辿る。

浅井邸の前を走る道は、東西に分かれている。東に進めば、交番のある丁字路に戻り、西へ進めば、弓なりに湾曲した道は、やがて線路と交差する。そこは、踏切ではなく、道が線路の下をくぐるトンネル状になっており、幼い日のぼくたちは、そこを「地獄の門」と名づけていた。

たしかに、大人になった今でも、せいぜい長さ六メートル足らずの、小さく狭いトンネルは薄気味が悪い。だけど、その場所が地獄の門と呼ばれるには、全く別の意味があった。そこには、地獄の門番ケルベロスと、閻魔大王、そしてその僕たる鬼が棲み付いていて、素通りすることが出来なかったのだ。

何故そんなところを通るのか……ヨンちゃんがヒメに聞かせた話を思い出して欲しい。世界樹に至るための旅路のことを。

『まず、地獄の門をくぐりぬけ、死神の道を辿り、荒れ狂う大蛇の川を越える。そして、果て無き平原を歩き、谷を越えた先に目指す、こおろぎ山があるんだ』

ヨンちゃんの言葉は、何も架空の場所を指しているわけではない。正確には、彼の言った地名は、ぼくたちが勝手に名づけた名前というだけで、実在の場所を指し示している。そのひとつが、地獄の門であり、ここを突破しなければ、その先にある死神の道へと進めないのだ。言ってみれば、ここが最初の難関である。

ぼくは、意を決して、トンネルへと足を踏み入れる。日陰にひんやりとした風が心地よい。あの頃よりもっと小さく狭く感じるのは、ぼくの身長が伸びたからだろう。そんなトンネルの壁には、あの頃にはなかったスプレー塗料の落書きが描かれている。意味のある言葉とは思えない単語が羅列されただけで、落書きが美観を損ねると

いう見解に同意したくなりつつ、ぼくはコンクリートの壁にそつと指を這わせた。そこには、小さな窪みがあった。窪みというよりも、何か固いもので削られたような跡だ。

「まだ、残っていたか……」

当たり前のことを、ぼくは口走りながら、抉れた壁の傷跡を人差し指でなぞった。その傷をつけたのは、二十年前のぼくだ。そして、それを当時のぼくは「奇跡の一撃」と名づけていた。

地獄の門を前に他の場所に迂回した方がいいんじゃないか、と提言したのは、ヨンちゃんだった。ヒメを助けたいという気持ちは、ヨンちゃんだって同じだったけれど、彼が地獄の門をくぐることを拒否したのには理由がある。ぼくも、内心に不安を抱えていたのだが、リコはにべもなく、

「死神の道へ上がるためには、あそこをくぐるしかないの、ヨンちゃんも知ってるでしょ？ あいつらのことなら、わたしに任せて」と、自信たつぷりに言つてのける。「あいつら」とは、地獄の門番たちのことだ。総勢は三名＋一匹。もちろん、彼らは魔物ではなく、れっきとした人間だ。いや、れっきとした人間だから、却って面倒なのだ。

閻魔大王の名前を、じんのたけし神野武という。ぼくらより二つ年上の上級生。そして、ケルベロスの名を、クロという。ドイツ生まれのドーベルマンという犬らしい。彼らは二人の子分を従えて、まるで自らのテリトリーを守るかのように、トンネルを塞ぎ、ぼくたちの前に立ちはだかっていた。

彼らが何故、トンネルを封鎖しているのかは良く分からない。彼らなりの理由があつたのだろうけど、世間的に見れば、不法占拠以外の何者でもなかった。しかも、神野は町内一の乱暴者として通っており、いつも金棒のような金属バットを携えていた。また、クロは獠猛な牙をむき出しにして、道行く人に対して、のべつ幕なしに威嚇する。それが、トンネルのことを「地獄の門」と名づけた所以

だった。

そして、神野の子分は門を通ろうとする相手に、必ずこの言葉を言う。

「ここを通りたければ、通行税をよこせ！」

彼らの言う通行税とは、お金に限った話じゃない。彼らが満足するものなら何でもいい。たとえば、お菓子や飲み物だって構わない。しかし、そんな持ち合わせがあるはずもなく、また、不法占拠者に何かを貢ぐつもりもなかった。

「なんで、あんたたちにそんなものあげなきゃいけないのよっ！」

当然リコは噛み付くように言い放つ。すると、クロが反射的に吠え立てる。ドスの聞いた鳴き声は、それだけで臆病者のぼくを縮み上がらせた。

「いい度胸してるじゃないか、女のクセにつ！」

子分の一人が見下すような視線を投げかけ、こちらに近づいてくる。ぼくとヨンちゃんは思わず後ずさる。子分の二人も、喧嘩が強い。反対に、ぼくとヨンちゃんは喧嘩なんかしたことがない。「やつぱり、別の場所から行こうよ」と、ぼくたちが囁いても、リコだけはぐつと胸をそらして、犬や上級生の威嚇に張り合う。

「女のクセにとか言ったら、女の子に嫌われるわよ。あ、そうか、だから、こんな日陰に集まってるのか。やーね、じめじめしちゃって」

もはや、その言葉は挑発に近かった。案の定、子分たちは、鬼の顔よろしく真っ赤になって、リコに掴みかかるうとする。慌ててぼくは、リコの腕を引っ張った。どう考えても、彼女の細腕じゃ、上級生に敵いつこないからだ。

だけど、リコはぼくの手を無理やり振りほどくと、更に続けた。

「だいたい、こんなところに居座って、みんな迷惑してるんだよっ

！！ あんたたち、何さまのつもり！？」

「神野さまだよ」

突然、子分たちの後ろから、声がする。子どもながらにドスの効

いたその声は、ぼくらにとってはまさに閻魔大王さまの声のように思えた。

「ここは、俺たちの縄張りだ。通りたきや、通行税を払うんだな。さもねえと……」

神野は、トンネルの真ん中に据えた木箱に座ったまま、金属バットで、地面を強く叩いた。舗装されていない地面が、乾いた音を立てて決れる。ぼくとヨンちゃんはヒヤヒヤしながら、リコの出方を待った。出来ればここは穏便にと、ぼくたちは願う。だけど、リコは不敵に笑い、

「さもないと、わたしたちをボコボコにするの？ やれるもんなら、やってみなさいよっ！！」

と、神野たちに最後通牒を叩きつけてしまった。ぼくの脳裏に「あちゃー」と言う文字が通り過ぎていく。傍らのヨンちゃんも、同じように顔をしかめた。

「おう、後で泣いても知らねえからな！」

そう怒鳴ると、神野は立ち上がり、木箱を蹴飛ばした。木箱は、派手な音を立てて、トンネルの壁に激突すると、見事に砕けてしまう。大抵の子が、ここで泣いて逃げ出すが、リコは一步も退くことなく半そでをまくるような仕草をし、腕をぶんぶんとふりまわす。本当なら、男であるほうがヨンちゃんが、喧嘩は止めた方がいいよと、リコを諫めるべきなのだが、頑固者で曲がったことが大嫌いな彼女に、何を言っても無駄だと言うことと、戦闘態勢を整えたりリコが、男子よりよっぽど強いことをぼくは知っていた。

そう、それが証拠に。用意ドンの合図があつたわけではないけれど、リコが駆け出した直後、子分の一人が瞬くうちに、軽々と投げ飛ばされた。リコの必殺技の一つ「背負い投げ」だ。投げられた子分の一人は、何が起きたのかも分からずに、口をパクパクさせながら、地面に打ちつけた背中痛みに呻き声を上げる。

「女だからって、甘く見てると、ぶっ飛ばしてやるっ！」

リコは、威勢良く宣言すると、その足でもう一人の子分の襟元を

ぐいつと掴んだ。そして、スカートがめくれるのも気に留めないで、華麗な足裁きで大外狩りを決めると、またしても一瞬で勝負を決める。肝心の男の子であるぼくたちは、その光景をひやひや、あわあわしながら見届けるしか出来なかった。

残る門番は二人。あつという間に、のされてしまった神野の子分に一瞥をくれると、リコは両手をはたきながら、彼らに歩み寄る。神野は少しばかり、リコの強さに驚きながら、バットを両手で握り締め、斜^{はす}に構えた。

ファイティングポーズを決めるリコと、神野の睨みあい。まるで格闘技の試合でも見ているかのように、相手ので糧を伺いあう、膠着状態が始まった。

午後の日差しが、蝉しぐれとともに、容赦なく二人に降り注ぐ。ぼたり……、リコの額を汗が伝い落ち、狙い済ましたかのように、リコの瞳に流れ込んだ。リコは一瞬、目を瞑った。

神野はその好機を見逃さなかった。「食らえ！」とばかりに振り上げた金属バットが、風を切る。このままじゃ、リコがメッタ打ちにされちゃうつ！

「チエストっ！！」

ぼくが瞳を伏せようとした瞬間、リコは不思議な掛け声とともに、カモシカのような健脚を蹴り上げた。その爪先が狙う場所は、男なら誰もが目を逸らしたくなるような、絶体絶命の急所だった。

「ぎゃあっ！！」

と悲鳴を上げた神野の顔色がおかしくなる。バットを手放して、両手で股間を押さえて、ウサギのようにぴょんぴょん跳ね回る姿は、街一番のワルガキに似合わない、滑稽な姿だった。だけど、笑っている場合じゃない、ぼくは咄嗟に立ち上がると、中腰の姿勢で駆け、神野の落とした金属バットを拾い上げた。

「ひっ、卑怯者っ！！」

神野が罵ったのは、ぼくではなくて、リコの方だった。リコは、フンと鼻を鳴らし、額の汗を腕で拭い取りながら余裕の笑みを湛え

た。

その時である。リコの真横から、黒い影が走ってくる。いつの間に、回りこんだのか、神野の忠実なる僕であるケルベロス……もとい、ドーベルマンのクロだ。クロは牙を剥き出しにして、その長い首を目いっぱい伸ばして、リコの腕に噛み付こうと飛び掛った。

「危ない、リコっ!!」

叫んだのが先だったか、それとも走り出したのが先だったかわからない。ぼくは考えるよりも先に、両腕を延ばしてリコを突き飛ばした。代わりに、クロのタツクルがぼくの横腹を鈍く叩いた。

ずん、と重みのある痛みに、ぼくは思わずバランスを崩してしまふ。

「シュウちゃんっ!!」

リコとヨンちゃんの叫び声が重なった拍子に、眼前にクロの牙が迫ってくる。獰猛なそれに噛み付かれたらひとたまりもない。これだから、犬ってキライなんだ! 内心に叫びながら、ぼくは左手にしたバットを振り上げた。バットの柄が乱暴にクロの長い首筋を叩くと、それまで獣のようだったクロが一変して、「きゃんきゃん」と吠えながら一目散に逃げていく。

ところが、バットはそのままぼくの手をするりと抜けて、そのまま、クルクルと回転しながら、真っ直ぐに神野の方へと飛んでいった。神野は、まだリコが与えた痛烈な打撃から立ち直ることが出来ず、無防備を晒している。そこへ、バットが飛来する。

なんだか、いやに柔らかいような、堅いような音がしたかと思うと、神野の側頭部を殴打したバットは更に跳ね返って、トンネルの壁面にぶつかった。今度は、激しい金属音。コンクリートの壁が小さく抉れ傷ついた。その隙を逃さず、リコが神野の巨体を投げ飛ばした。

あとには、泡を吹いて昏倒する神野と、その子分だけ。

「す、すごい……」

呆然とするヨンちゃんが、その光景を見回しながら言った。奇跡

の一撃と言ってもいいかもしれない。たった一発の攻撃が連鎖して、一気に勝負をつけてしまうなんて、こんなことがあれば、お正月とクリスマスの時にしか信じていない「神さま」ってやつを信じたくなくなってしまふ。

「神野くん、大丈夫かな？」

ぼくはお尻に付いた土を払い落としながら立ち上がり、口の周りに泡をつけた神野の顔を覗き込んだ。

「大丈夫よ、これくらいでどうにかなるようなヤツじゃないですよ。それより、こいつらが目を覚ますまえに、早く線路上に上がろう！」

そう言つと、リコはぼくとヨンちゃんを手招きする。ぼくは、少しばかり神野のことを気にしながらも、ヒメを救うという目的を見失つてはいけない、と頭を振つて、二人の後を追いかけた。

トンネルの脇を登ると、そこは砂利の敷かれた線路。前後に果てしなく伸びるそれは、こおろぎ山へと至るための近道。きちんとしたルートで歩めば、こおろぎ山へは大人の足でも一日かかる。だけど、この線路を辿っていけば、その半分。それでも、子どものぼくたちにとっては果てしなく遠い距離だった。だから、ヨンちゃんは「死神の道」と名づけたのだ。

10・奇跡の一撃（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

11・鉄橋の上

神野たちが目を覚ましたのは、それから三十分後のことだったらしい。通りすがりの大人が、伸びた神野たちを発見し、助けてやったそう。神野は、ぼくたちに暴力を振るわれたと、涙ながらに訴えたのだが、これまでの彼らの悪行からすれば、大人たちが彼らの言葉を信じるわけもなく、結果「お前たちが悪さばかりしているから、バチが当たったんだ」と言うこととなった。

その後、神野たちが、なりを潜めてしまったのは言うまでもない。これまで、神野に泣かされてきた子どもたちは、諸手を挙げて喜んだ。ぼくらは、ちょっとした英雄になったのだ。

だけど、ぼくの一撃はただの偶然の産物で、本当に強かったのはリコだ。さすがに女の子の彼女と本気で取っ組み合いをしたことはないけれど、彼女が強いのにには理由がある。

彼女の父親は、高校の体育教師で、更に無類の格闘好きだった。そんなリコの父親は、あるうことか娘に、剣道、柔道、空手と言った武術まがいのスポーツを教えこんだ。例えば、リコが神野の急所を蹴り上げた時に発した「チェスト」という掛け声は、英語ではなく、ある剣術の掛け声で、リコが得意とする「背負い投げ」などは柔道の技だ。なぜ、リコの父親が武術を教えたのかは、分らない護身術というにはあまりにも物騒だし、当時の女の子の習い事の定番がピアノのお稽古ということを鑑みても、スポーツというには女の子には不向きだ。だけど、そのおかげで、リコは女子からも頼られる存在で、実際ぼくとヨンちゃんだけでは、神野に立ち向かえなかっただろう。

そう思えば、「リコ先生」と呼ばれ、子どもたちに慕われている、現在のリコとはイメージが随分違うことに、苦笑してしまう。おしとやかになったというか、大人になったのだ。いつまでも、子どものままでいる人間なんて、どこにもいない。過去はどこかに置いて、

未来へ進んでいくのが人間のあるべき姿。だとしたら、ぼくはどうなんだろう？　ぼくは何のために、医者になるという未来を選んだのだろう。ぼくにとって、二十年前の過去は、一体何の意味があったのか……。

変わらないのは、ぼくだけ。

二十年前に地獄の門番がいなくなった日陰のトンネルを抜け、再び夏の日差しにぼくは目を細めた。あの日、ぼくたちはこの場所から、線路へとのぼり、延々と果てしなく続く線路の上を歩いた。枕木の数を数えながら。

さすがに、大人になったぼくが、線路に不法侵入することは出来ない。そう言ったところだけ賢いのは、大人になった証拠というべきなのか。

ぼくは歩きながら、ボストンバッグを漁り、地図を取り出した。ハンディタイプの簡素な地図帳だが、そこには、マーカーで記したこおろぎ山への道が描かれている。夏八木に来る前に、予め確認しておいたものだ。二十年前とは違い、きちんとアスファルトで舗装された上に、当時より距離も短くなった田舎道を歩き、あの日と同じように、こおろぎ山を目指す。

同時に、二十年前のぼくたちも、線路を歩きこおろぎ山を目指した。

「結局、ヨンちゃんは、びくびくしてただけだったね」

からからと笑いながら、先頭を歩くリコが言った。すると、ぼくの隣で、枕木の上を選んで歩くヨンちゃんがぷうつと頬を膨らませる。

「俺は、リコちゃんみたいにジャイアンじゃないんだよ。『へいわしゅぎしゃ』ってやつ？」

平和主義者が何なのか分かっていない口ぶりだが、確かにヨンちゃんも活動的で好戦的な男子ではない。かく言うぼくも、喧嘩ごとは苦手だ。そういうのは、お話の中だけでいいと思っている。それ

こそ、漫画『ドラえもん』の世界だけで充分だ。ただ、いくらなんでも女の子に向って「ジャイアン」は可哀想だと思っていると、突然リコは足を止めて頂垂れた。

「ジャイアンって……、ちょっと傷ついた」

何だか妙に小さな肩が震えていて、ぼくの脳裏に「まさか」と言う文字が過ぎる。しくしく……すすり上げるような声まで聞こえてきて、ぼくは慌てて、ヨンちゃんの小脇を肘で突つついた。

「ヨンちゃん！ リコを泣かせてどうするんだようっ」

「ええ？ 俺の所為？」

「ヨンちゃんが、リコのことをジャイアンなんていうからだろう。リコに謝りなよ」

「う、うん」

ぼくたちはリコの背後で、目配せをして会話を交わした。ヨンちゃんは、仕方がないといった風に口を尖らせて、リコの傍による。

「ごめん、リコちゃん」

と、ヨンちゃんが言っても、両手で顔を覆いながら、女の子っぽい仕草ですすり泣くリコは何も返さない。旅の行く先はまだまだ遠いと言うのに、第一関門を突破した途端に、出鼻をくじかれた思いに、ぼくは不安になってきた。

「ごめんね」

ヨンちゃんがもう一度謝りながら、腰を折ってリコの顔を覗き込んだ。その瞬間、両手の隙間から見えるリコの口角がにやりと曲がるのをぼくは目撃してしまった。だけど、すべてはもう遅かった。すばやく顔を覆い隠す両手を解いたリコは、目にも留まらぬ速さでヨンちゃんの腕を取り、足を払い、のけぞらせる。

関節技だ！ ぼくが内心に叫ぶよりも早く、ヨンちゃんが苦痛に顔をゆがめて「ギブ、ギブっ！！」と叫ぶ。

「誰が、ジャイアンよ。わたしがジャイアンなら、ヨンちゃんのはび太くんだね。のび太のクセにつ……」

ぎゅーっと、力を込めながら、リコが言う。リコがしくしくと泣

いたのは、嘘泣きだった。男子が、女の子の涙に弱いと言うのを知っているのか知らないのか、見事にヨンちゃんは騙されたのだ。しかし、ジャイアンと呼ばれたリコの怒りも分からないでもない。

もつとも、その時、ぼくは二十年後のヨンちゃんが、ドラえもんみたいな体格になるとは思っても見なかった。

「ごめん、ごめんってば！ 許してよう、リコちゃんっ！」

ヨンちゃんが線路中に響き渡るような悲鳴を上げた。さすがに、ヨンちゃんが可哀想になってくる。

「リコ、反省してるみたいだし、許してあげなよ」

ぼくが仲裁すると、リコは溜息混じりに、関節技を決める両腕を解いた。ヨンちゃんは「きゃあ」と女の子みたいな声を出しながら、その場に崩れ落ちた。

「シュウちゃんに免じて、許してあげるわ。でも、今度わたしのことをジャイアンだなんて言ったら、もう一回コブラツイストしてあげるから」

フンっ、とリコは鼻息荒く、ヨンちゃんに言った。どうやら、ぼくたちはリコに逆らえないみたいだ。ホントに怖いのは、神野ではなくてリコなんじゃないか……心の中でぼくは呟いた。もちろん、声には出さない。関節技を決められたくないから。

「リコがいれば鬼に金棒。ぼくらはびくびくしていいってことだよ」

ぼくは、ヨンちゃんの耳元で囁きながら、彼を助け起こした。ヨンちゃんは、肩や首をひねりながら、まだ痛みにうんうんと唸っている。

「ほら、ぐずぐずしてたら、明日になってもこおろぎ山にたどり着けないよ。ヒメを助けられなくなっちゃう！」

「分かってるよ」

ぼくとヨンちゃんは声をそろえてリコに返事すると、すでに少し先を歩くリーダーの後を追いかけた。

線路は続くよ、どこまでも。という歌の歌詞を思い出すほどに、

鉄道は果てしなく続いている。当時の夏八木にとっては、唯一の公共交通機関でだった電車には、何度も乗ったことがある。だから、電車に乗れば、たった三十分ほどで隣の駅にたどり着くことは知っている。しかし、線路は途方もなく長く伸び、その行く先は陽炎にかすんで見えない。隣の町まで行くわけではないにしても、その道のりの果てしなさを物語っているかのようにだった。

「喉かわいた……」

と最初に根をあげたのは、ヨンちゃんだった。頭から水を被ったように汗だくで、英語の文字がプリントされたＴシャツが肌に張り付いている。それは、ぼくもリコ同じだ。リコは、振り向きざまにヨンちゃんを睨みつける。

「もう、ヨンちゃん！ わたしだって喉かわいてるんだから。口に出して言わないでよっ」

「だって……」

と言いかけて、ヨンちゃんは口をつむぐ。先ほどの、関節技の痛みが蘇ってきたのだろう。リーダーには口答えしない、と学習したのかもしれない。

「どこかに、水のみ場でもあるといいんだけど」

線路の上を歩きながら、ぼくはあたりを見渡した。線路は少し高台に差し掛かっている。ぐると頭をめぐらば、あたりが一望できるものの、近くに民家はなく、水を分けてもらえそうな場所は見当たらない。

「このまま、川にでも飛び込みたい気分」

ヨンちゃんが溜息を漏らす。すかさずリコが、

「いつもプールの授業、大嫌いつて言ってるのに？」

とちゃちゃを入れる。ヨンちゃんは、泳ぐのが苦手で、プールの授業がある日は、まるでこの世の終わりのような顔をしている。そんなとき決まってヨンちゃんが言うのは、「学校のプールでも、海水浴場と同じように、不際が使えたらいいのに。浮き輪を発明した人は、きつと大天才だね」である。

しかし、午後の夏の日差しは、そんなカナヅチの気があるヨンちゃんをして、川に飛び込みたいといわせるほどの暑さだった。ここまで来たことが、早計だったと思わないまでも、何の準備もせずにおおろぎ山を目指すことの無防備さを、ようやく実感する。

「このままじゃ、干からびてミイラになっちゃうかも」

痩せすぎで骨と皮だけで、すでにミイラみたいなヨンちゃんは、愚痴をこぼしながら歩く。その足が不意にぴたりと止まった。ついに、「帰る」と言い出すんじゃないかと、ぼくは不安になる。すると、ヨンちゃんは目を閉じて、両手を耳元に当てた。

「どうしたの、ヨンちゃん？」

リコが振り向く。

「しっ！ 静かに……水の音が聞こえるよ」

「そりゃ、この先には川に掛かる鉄橋があるからね」

そう言つて、ぼくは町の北側を眺めた。線路の上からでは、全く見えないが、この町には一本の川が流れている。それは、町の北側から大きく湾曲しながら、線路と交差しているのだ。

「そっか。でも、あそこからじゃ、川には飛び込めないよね」

ヨンちゃんは、がっかりとしたような口調で言つと、再び歩き始めた。しばらく歩くと水音は少しずつ大きくなっていき、眼前に鉄橋が見えてくる。

何故、鉄橋からでは、川に飛び込めないのか……。それには二つの理由がある。まずひとつめは、鉄橋の高さから川まで、五階建てほどの高さがある。下が水だといつても、飛び込み台の上から、ダイブするようなものだ。そして、もう一つ、その場所は川幅がとても狭くなっているため、流れ込む水の勢いが増しているのだ。水泳が苦手なヨンちゃんじゃなくても、あつという間に流れに飲み込まれてしまう危険があった。

「川が目のあるつてのに」

ヨンちゃんが眼下の川を見つめながらばやく。その気持ちは分かんなくもないが、白波をたてて流れる急流に飛び込みたいとは、こ

れっぽっちも思わなかった。

「ほら、でも川から風が上がってくるよ」

涼しい風とともに、ごうごうとうねりのような、流れの音が聞こえてくる中、ぼくたちは、行進するみたく一列になって、鉄橋に足を踏み入れる。もともと、人間が歩いて渡るようには作られていない鉄橋は、枕木と枕木の間に隙間があつて、そこから真下が覗ける。高所恐怖症ではないけれど、すこし背筋が冷たくなる。

「こんな映画あつたよね……スタンドなんかつてやつ」

突然、先頭をいくリコが、何かを思い出したかのように言った。その映画なら、ぼくも見たことがあると、返そうとして、いやな予感が過ぎった。リコは、わかっているのかいないのか、少しだけ笑う。

「あれって、たしか、こんなシチュエーションで、後ろから汽車が走ってきたよね」

「リコちゃん、縁起でもないこと言わないでようっ」

ぼくの背後のヨンちゃんが、怒鳴る。彼の頭の中は、落ちたらどうしようという不安でいっぱいだったのだろう。リコの言葉は、そんな不安に追い討ちをかけるようなものだった。

その時だった。

泣きつ面に蜂、という言葉が現実変わる瞬間、ぼくたちの背後で、警笛の音が聞こえてくる。ぼくたちは真っ青になって後ろを振り返った。一秒前まで、笑ってたリコでさえ、青い顔になる。振り返ったぼくたちの視界に映ったのは、なじみのある二両編成の電車が、真っ直ぐこちらに向って走ってくる姿だった。川の流れる音で、電車の走行音がかき消されていたのかもしれない、と思ってみても、何の解決にもならない。

「むこう岸まで、走るんだっ!!」

ぼくは咄嗟に、リコの背中を押した。だけど、隙間のある鉄橋で、足でもとられれば一巻の終わり。電車の運転手さんたちもぼくたちのことに気付いているハズ。だけど、電車は、車と同じで急には止

まれないし、車と違ってハンドルを切ることは出来ない。その上に、車より巨大な鉄の塊に轢かれれば、どうなってしまうかくらい、子ども**の**ぼくたちにも容易に想像できた。

11・鉄橋の上（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

12・みかん畑

背後に迫る電車が急ブレーキを踏む。レールと車輪が軋み、耳を劈くような金きり音は、地獄から舞い降りた悪魔の悲鳴のように思えた。不思議なことは、こんな息迫る状況に、本当ならパニックを起こしていてもおかしくないというのに、ぼくは至って冷静だったことだ。乗客の人たちに怪我がなければいいのに、なんて他人を心配するのは、余裕があつたからじゃない。ただ、そんなあまりにフイクションじみた状況に、ぼくの頭が追いつかなかつただけなのだ。それでも、悲鳴を上げながら走る幼なじみの姿を見れば、これが夢の中の出来事ではないことだと分かる。映画の中なら、都合よくことが運ぶものだけど、現実はそのなに甘くなかつた。どんなに走っても、鉄橋を渡りきる前に、電車がぼくたちを轢き殺すほうが速いだろう。

冷静でいることが出来なくなる前に、どこかに逃げ道はないかとぼくは周囲に視線をめぐらせた。と、不意にヨンちゃんの言葉が、鮮烈に脳裏を過ぎつた。

『川に飛び込みたい』

ぼくの頭の中で、電球が灯つた。それも、危険な賭けであるにもかかわらず、一か八かの賭けに応じるほか、ぼくたちが助かる術はない。

ぼくはリコの手を強引に掴んだ、そしてもう一方の手で、ヨンちゃんの襟首を掴む。二人は、驚きと不安の入り混じった視線と悲鳴をぼくに向けた。二人がどう思ったかは知らない。もしかすると、迫り来る死の恐怖に、ぼくの頭がおかしくなつたと思つていたのかもしれない。

それでも、こんなところで、人生を擲つつもりなど、これっぽちもない。だって、ヒメが待っているんだから！

精一杯力を込めて、二人を引っ張って、鉄橋の上から飛び降りた。

眼下に広がる川面へは、十メートル以上ある。リコの女の子らしい悲鳴と、自由落下する体の感覚に、ぼくはヨンちゃんと同じく、泳ぎが苦手だったことを思い出す。今更思い出したところで、もう遅い。

電車が止まる音が遠くなり、代わりに急流のごうごうという音が近づいてくるやいなや、ぼくたちはもつれるように、水面に叩きつけられた。幸いだったのは、水深が深く、着底することがなかったことだ。だけど、息が出来ないのは、水の所為だけじゃない。全身くまなく、痛みが襲い掛かってきたからだ。

「シュウちゃん!!」

ぼくを呼ぶリコの声。ぼくも、リコを呼ぼうとする。その拍子に、あいた口に水がなだれ込んできて、ぼくは思わず手を離してしまった。あつという間に、濁流がぼくの体を飲み込んでいく。

折りしも、今年の梅雨は、例年よりも降水量が多かった。そのためか、水かさが増していて、流れも速い。

「ヨンちゃん! リコっ!!」

必死に、親友の名を呼ぶけれど、彼らの姿はもうどこにもなかった。ここに至って、ぼくの心に焦りが生じる。焦りはやがて、パニックにかわり、ぼくは必死に濁流の中でもがいた。だけど、バタ足をして、両手で水を掻いても、どんどん流されていく。そして、ぼくは、いきなり川底へと強く引き込まれた。まるで、川底に棲む魔物のに足を引っ張られたように。

ずいぶん前、祖母から聞いた話だ。お盆のころに、川や海で水遊びをしていると、お化けに連れ去られる。余り信心深くない子どもだったぼくは、そんな祖母の忠告を聞き流していた。

今まさに、その忠告の意味を理解して、同時に後悔した。そして、遠くなっていく意識の奥で、三年前に他界した祖母の、しわしわだけど柔らかく暖かな微笑みを思い出していた。

橋の欄干にもたれかかり、目を凝らすと、遠目に件の鉄橋が見え

る。二十年の間に、ずいぶんくたびれたようで、鉄橋を支える鉄の橋梁は、赤茶けていた。

あの時、電車には乗客はほとんどいなかった。そんな彼らも、体を打ったくらいで、大事に至らなかったことは、不幸中の幸いだったのかもしれない。しかし、その後、一時間以上列車は停線する羽目になった上に、警察が出動する騒ぎになっただけで、後日知ったことだ。もちろん、両親にはこっぴどく叱られた。

「リコちゃんや、四郎くんが、死んだりなんかしたら、あんたどうするつもりだったの!？」

普段は、あまり感情的に怒鳴らない母が、ものすごい剣幕だったことを、今でも鮮明に思い出す。

あのときの判断が、正しかったかどうかは、今でも分からない。こおろぎ山を目指す道のりは、他にもあったはずだ。線路の上を辿らなくても、例えば遠回りだったとしても田舎道を歩いていくことも出来たはずだ。もしも、そう提案していたなら、神野はぼくの一撃で昏倒することもなかったし、電車の運転手や乗客をはじめとするいろいろな人に迷惑をかけずに済んだはずだ。そもそも、好きな子を助けたいと言っただけなのに、友達を巻き込んで、危険な目に合わせることもなかった。

十歳だから、そこまで頭が廻らなかった、と言い訳することも出来るけれど、それが、ぼくの判断ミスだということは、拭い去れない事実だ。

ぼくは、二十年たっても何も成長していない。唾棄すべきなのは、結局自分の人生だったと言っただけだろうか。

そう、肝心なところで、判断を誤らなければ、あの時、津田幸浩くんは死なずに済んだに違いない。怒り悲しむ、彼の母親の顔をまともに見れなかったのは、ぼくが氣道熱傷を見逃したためだ。何のため、誰のため、ぼくは医者になったのか。

ただ平面的に、教科書を読み、医学の知識を詰め込んだつもりはない。患者と向き合う。患者のために、死力を尽くす。その純然た

る想いは、いつのまにか変わっていたのかもしれない。同僚だった七尾先生の言葉を借りるなら、「自分はすごい人間だと、勘違いしている」だけなのかもしれない。一人の医者が出来ることなんて、あまりに脆弱で、あまりに少ないというのに……。

かつて、大学のゼミを担当していた教授はこう言った。

「あなたたちが、何のために、誰のために、医者となるのか。その意思だけは、しっかりと持っていてください」

ある同窓生は、そんな教授の言葉を「何のためかなんて、金のために決まってるじゃないか」と鼻で笑った。またある同窓生は「親の開いてる医院を継ぐ為だ」と言った。

なんにせよ、みんなそれぞれの想いがある。ぼくは……？ 教授の言葉に、優等生な回答しか思いつかない。「すべては、患者のために」それは、格好つけて言っただけではなく、本心からの言葉だった。それを、他人がどんな風に受け止めるかは別としても、きつとぼくは優等生な自分に、うぬぼれていただけなのだ。

やはり、唾棄すべきは、ぼくの二十年……。今一度問いかけるなら、「何のため、誰のために、ぼくは医者になったのか？」

失われるべき予定にない、命を奪ったぼくは、一生その問いかけを繰り返し、罪という名の咎に苦しみ続けなければならないのか。誰が、それを望む？ あの子か？ ヒメか？ それとも、ぼくか？

答えの出ない自問自答を繰り返すぼくの頭を、まるでトンカチかなにかで、ぶつような、甲高い警笛の音が響いてくる。みれば、鉄橋の上をあ頃と変わらないデザインの列車が駆け抜けていく。ぼくは、その音によって、現実にくいつと引き戻されたような気がした。

橋の欄干から身を乗り出して、眼下を見れば、これもあ頃と変わらない、急峻な流れの川が覗ける。ふと、橋の入り口に「欄干の上にあがったりしないで！ 川に落ちたら、あぶないよっ！」という、地元町内会が掲えた看板があったことを思い出す。

おそらく、眼下の川に飛び込んだ子どもは、きつとぼくたち三人

ただだろう。そのくらい、川の流れば速く、子どもでも危険だと分かる。二十年前、ぼくはその流れに飲み込まれた上に、幼なじみとはぐれて、下流へと流されていった。

「さてと」

ぼくはひとりごちると、欄干から手を離し、橋を後にした。道はすぐに狭くなり、対向車がすれ違えないほどの狭い林道に変わる。地図によれば、ここから、山の方へと続いていくようで、少しだけ勾配があつた。それでも、暑さを感じないのは、ここが林道だからだ。道の両端に生える木々はまるで、木のトンネルを作り、夏を謳歌するセミの鳴き声が、輪唱となって聞こえてくる。湾南大学の救命センターに勤めるようになって、久しくこれほどのセミの大合唱を聞いていなかった。あれは、ミンミンゼミの鳴き声。あれは、アブラゼミ。どこからか、ヒグラシの声も聞こえる。

セミの鳴き声を探りながら、林道を歩いていると、林道が二つに分かれる。そこには、古ぼけた木の看板が建てられており、右に進めば、夏八木を取り囲む山岳地帯へと繋がっていることを教えていた。ちなみに、こおろぎ山は、田舎町、夏八木にある山々の、一つに過ぎない。

だけどぼくは、山岳地帯へと続く路ではなく、あえて、左の道へと進路をとった。なぜなら、それがあの日の旅路だからだった。

左の道は、しばらく行けば、斜めに下っていく。そして急に視界が開けたかと思うと、目の前に石垣に囲まれたみかん畑が広がった。みかんはまだ青い果実を携え、葉を山から吹き降ろす夏風に揺らしていた。ここは、斜面を利用した、みかんの段々畑だ。主な産業のないこの町に、古くから栄えているのが、温暖な気候を利用したみかん栽培だった。

そして、さらにみかん畑に囲まれた道を下っていけば、農家の軒がいくつも見えてくる。古民家と読んでもいいような、かやぶきの大きな屋根が特徴的な日本家屋だ。

「たしか、乃木さんの家は……」

屋根の数を端から数えつつ、目的の家を探す。どの家も、同じような佇まいから、橋から数えて何番目の家かで、確認するほかないのだ。ぼくの記憶が正しいなら、五番目の家が目的の家だ。

突然の来訪に、あの人はぼくのことを覚えているだろうか？ 少しばかり緊張してくる。ちょうどその時だった。

「う、うう」

ともすれば、風にさらわれてしまいそうなほど、弱々しい声が、どこかから聞こえてくる。ぼくは、歩みを止めて、あたりを見渡した。石垣の上、みかん畑の奥からその声は聞こえてきた。低く、苦しそうな呻き声だ。ぼくは、自分の耳だけを頼りに、腰ほどの高さもある石垣を勢い良く登り、みかん畑へと、足を踏み入れた。

背の低いみかんの木立を分けながら、声の主を探す。すると、みかんの木の下に倒れこんだ人影が見え、ぼくは、慌てて駆け寄った。「大丈夫ですか？ どうしました？」

呻き声の主を助け起こしながら、救命センターで何度も患者に言った言葉を継げる。声の主は、季節に合わないえんじ色で長袖の作業服に、ツバ広の帽子を深く被った、老婆だった。老婆は、赤らんだ顔に玉のような汗をうかべ、苦しそうな悲鳴を上げる。熱中症だと、ひと目で分かる。

だが、ぼくは、それよりもその老婆の顔に驚いていた。二十年の間に刻まれた年輪の深さは、あの頃とは違っけれど、その目元や口元にかつて見た、優しげな面影がある。

「乃木さん！ しっかりしてください！！」

ぼくは、老婆の名を呼びながら、強くその体をゆすった。

12・みかん畑（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

13・熱中症

どこかから、涼しげな風に乗って、セミの鳴き声が聞こえてくる。ここは天国？ それとも地獄？ 友達を危険に巻き込んだ罪深き子羊に似合うのは、きつと地獄だ。でも、それにしては、とても心地がいい。柔らかな何かに包まれていて、時折、蚊取り線香とい草の匂いが香る。

きつと、ここは、天国じゃない。そう思ったぼくは、重たい瞼をそつと開いた。視界に飛び込んできたのは、立派な梁の天井。どうやら、ここは古い日本家屋らしく、涼しい風は開け放たれた縁側から吹き込んでいる。その、縁側の先には、松の木が植えられた庭があつて、更にその向こうには、みかん畑が広がっていた。

ぼくは畳の間の真ん中に敷かれた布団の上に寝かされていた。どうして、こんなところで寝ているのか、見当もつかなくて、戸惑つてしまう。

とりあえず、ぼくは生きてるみたいだ。ホツと胸をなでおろしたのもつかの間、次の瞬間には、ヨンちゃんとリコの顔が脳裏を掠めていく。二人はどうなってしまったのか。こんなところで寝転がっている場合じゃないよ、とぼくは慌てて、タオルケットを剥ぎ取って起き上がった。すると、全身に筋肉痛のような痛みが駆け巡る。

「いたたっ！」

思わず悲鳴を上げると、その声聞きつけたのか、母屋から忙しい足音が響いてきた。

「ありや、もう起きて大丈夫かい？ 何処か痛いところはないかい？」

現れたのは、大福みたいな顔をした恰幅のいい小母さんだった。ぼくの母より一回り年上に見える。小母さんは、季節に似合わない、作業着のようなものを着ていて、その肩口にみかんの葉っぱをくっつけていた。

「あの、ぼく……」

「ほんとに、畑の向こうの川の岸にあんたが倒れてるのを見つけたときは、肝を冷やしたよ。まったく、こんな時分に川遊びでもしてたのかい？ 親から教わらなかったのかい？ お盆ごろに川や海で遊んだら、悪い幽霊に道連れにされてしまうつて」

小母さんが、まくし立てるように叱るものだから、ぼくは言葉を失った。本当は、何がどうなってるのか尋ねたかった。そして、ヨンちゃんトリコはどうなったのか知リたかった。でも、小母さんの顔が怖くて、俯いてしまう。

「ここら辺き、流れが速いからね。気をつけなきゃだめだよ」

だけど、小母さんは急に声のトーンを落として、ぼくのところまでやってくると、膝を折りぼくの頭を優しく撫でてくれた。今更になつて、家から被つてきた帽子がなくなっていることに気付いたけれど、そんなこともうどうでもよかった。ただ、助かったんだということが、実感として伝わり、恐怖がじわじわとぼくを塗りつぶしていく。

「さぞ怖い思いをしたんだろうね……。あとで、親御さんに迎えに来てもらうよう、電話してあげよう。たつぷり、叱られなさい」

「あの、助けてくれてありがとう、小母さん。でも、お母さんには電話しないで。ぼく、行かなきゃ行けないところがあるんだ。叱られるのは、その後にして欲しいの」

ぼくは顔を上げた。小母さんは少しばかり驚いた顔をする。

「行かなきゃ行けないところつて、どこなんだい？」

「こおろぎ山」

「こおろぎ山！？ あんた、そんなところに行つてどうするんだい？」

「友達を助ける」

小母さんの目を見て、ぼくは告げた。友達、と言ったのは、流石に好きな女の子のために、と言つのは恥ずかしかったからだ。でも、小母さんはしばらくぼくの目を覗き込むようにして、それから小さ

く溜息をついた。それは、ぼくの意志が固いと言つことを感じ取つたためかもしれない。

「小母さん、ぼくのほかに、男の子と女の子が岸に打ち上げられてなかった？」

ぼくの問いかけに、小母さんは首を左右に振る。

「友達つてのは、その子たちのことなのかい？　でも、あたしがあんなを見つけたとき、他には誰もいなかったよ」

そう言つて、小母さんは、ぼくを助けてくれた経緯を語つた。

小母さんの名前は、乃木春江という。町外れに当たるこの場所では、みかん農家を営んでいるらしい。ちょうど庭の向こうに見えるみかん畑は、乃木さん家の畑なんだそう。そのみかん畑には、道が一本あつて、山の斜面を下り、川へと続いている。そこは、丸い石のごろごろした岸边になつていて、そこでぼくが発見されたのは、つい三十分ほど前のことだつたらしい。たまたま水汲みにきた小母さんが、ぼくを発見して、慌てて家まで連れてきてくれた。幸い気を失うのが早かつたおかげか、水を余り飲むこともなく、また、体を岩にぶつけることもなかった。だけど、岸に打ち上げられていたのは、ぼくだけだつた。

次いで、今度はぼくが、ここに至つた経緯を語る番だつた。小母さんは、口を挟むことなく、逐一頷き返してくれた。そして、たっぷり十分以上もかけて話し終わると、小母さんは、

「危ないことを……、まったく困つた子だねえ」

と、呆れ半分にぼくの頭をぺしりと叩く。

「ごめんなさい。もうしません」

「当たり前だよ。あんたに何かあつたら、お父さんやお母さんが悲しむだろう？　この世に、死んでいい人間なんていないんだ。……それは、そのヒメつて子も同じだ」

と、言つて小母さんは、大福みたいな顔に笑顔を浮かべた。

「昔、あたしも聞いたことがある。こおろぎ山には、神さまの宿る木があつて、その葉っぱに願い事をすれば、どんな病気もたちどこ

るに良くなるって話。でも、迷信というヤツかもしれないよ?」

「それでもいいんです。ぼく、ヒメを助けなきゃ! だって」

言いかけた言葉を飲み込む。だって、ヒメのことが好きだから、なんていえるはずもない。だけど、小母さんはぼくの内心を見抜いているかのように、ニヤリと笑って、もう一度ぼくの頭を撫でて、
「ちよつと待つてなさいな」

と言うと、母屋の方へ戻っていった。そして、ややもすると、小母さんは右手に水筒、左手に帽子を持ってきた。

「あんたが、その女の子を助きたい気持ちは、立派だと思う。今時、見上げた根性の持ち主だ。だけど、無謀と勇氣は別物」

小母さんは、ぼくに水筒と帽子を差し出した。水筒には、麦茶が満タンまで入れられていて、縁のほころびた麦わら帽子には、女の子モノのリボンがつけられ、そこに「はるみ」と名前が書かれていた。

「これを持って行きなさい。はぐれてしまった、あんたの幼なじみの子たちは、あたしが探してあげよう。きっと、二人とも無事でいるはずさ」

「本当に?」

「ああ、川には、水神さまという神さまがいてね、あんたたちのようないい子を守ってくれるものさ。かく言う、あたしもね、あんたぐらいの年のころ、川で溺れて死にそうな思いをしたことがある。でも、その時あたしは見たんだよ、神さまを……。そんなあたしが言うんだから間違いない、二人は無事だ」

「うん。そうだよ」

ぼくは小母さんから差し出された、帽子と水筒を受け取った。

「小母さん、ホントにありがとう。ぜったい、いつかお礼するね」と言うとおばさんは、またぼくの頭を軽く叩いて、「期待せずに待つてよ」とはにかんだ。

バッグの取っ手を首にぶら下げて、熱射病で倒れた乃木春江さん

を背負うと、ぼくは小走りに、乃木さんの家を目指した。立ち並ぶみかん農家の端から数えて五つ目の家。

ぼくは、松の木が植えられた庭に駆け込むと、声を張り上げた。

「ごめんくださいっ！！ どなたか、いらっしやいませんか？」

あの日と同じように、縁側は開放たれており、声は家全体に響き渡ったはずだ。すると、納屋の方から、ぼくより少し年上、ちようど当時の母ぐらいの年齢の女性が姿を現した。彼女は、ぼくに背負われた乃木さんを見るなり、真っ青な顔をする。

「お母さん！」

どうやら、彼女は乃木さんの娘らしい。たしかに、すこしふくやかな顔つきは、乃木さんそっくりだった。彼女は事態を飲み込めず、訝しげな視線をぼくに向ける。

「さっき、そのみかん畑で、倒れてらっしゃるのを見つけて、こちらへお連れしました。熱中症の可能性があります」

と、ぼくが言うと、警戒を解いた乃木さんの娘は、「大変っ！ 病院へ」と、慌て始めた。しかし、救急車を呼ぶにしても、車で運ぶにしても、町外れのここからでは病院まで遠すぎる。ぼくは、唾を飲み下し、

「ぼくは……ぼくは医者です。居間から病院に運んでいては、間に合わないかもしれない。すぐに、ここで手当てをしましょう。これから言うものを用意してください」

と、乃木さんの娘に言った。

「まず、たらいいっぱい氷水と、タオルをたくさん。扇風機をあてるだけと、それからスポーツドリンクかみそ汁、無ければ微量の食塩を混ぜた食塩水。それから、体温計。急いでっ！！」

まるで、看護師の平沢さんに指示を与えているような錯覚を覚える。それでも、乃木さんの娘は頷くと、踵を返して母屋の方に駆け込んだ。ぼくは、縁側に面した居間へと上がり、乃木さんを寝かせた。そこは、二十年前、川で溺れたぼくを助けてくれた、乃木さんがぼくを寝かせていた場所だ。

奇しくも、二十年の時を経て、立場が逆転している。だけど、そんな感慨に浸っている場合ではない。ぼくは、すばやく乃木さんの着ている、作業着の上着を脱がせると、次いで、作業ズボンの裾を捲り上げる。

「持ってきましたっ!!」

両手に、タオルと氷水の入った金だらい、そして塩水、体温計を持って、乃木さんの娘がやって来る。彼女はぼくの前にそれを置くと、その足で、居間の押入れを開けて、扇風機を三台も取り出した。「ちゃんと動かかしら。この部屋以外は、クーラーがついているから、もう十年くらい使ってないんです」

と、彼女は言いながら、それを横たわる母親の周りに並べた。その間に、ぼくは氷水にタオルを浸し、軽く絞ると、野木さんの腕や足、首筋を覆うようにかけていく。

「扇風機、入れてください」

ぼくが指示を与えると、三台の扇風機が、動き始める、ずいぶん年代モノだが、問題なく、三台の扇風機はファンを回した。

「これで体温が徐々に下がるはずです。脈拍も安定しているし、顔色もすこし良くなった」

そういいながらも、乃木さんの小脇に挟ませた体温計の表示とにらめっこをする。熱中症は、昔から熱射病などと呼ばれ、体温の上昇によって引き起こされる。特にここ近年は気温が高く、ろくな水分・塩分補給もせず、長時間活動していると、重篤な場合死に至るケースある、危険極まりない病なのだ。

「よかった……」

ぼくの言葉を聞いた乃木さんの娘は、へなへなと腰を折り、ほつと胸をなでおろした。

13・熱中症（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

14・感謝の言葉

豪放磊落、という言葉があるのを知ったのは、十年以上経ってからのことだった。肝の据わった人の事を指す言葉で、乃木さんはまさにその形容がぴったりの人だった。どうして、見知らぬぼくにこんなにも親切にしてくれるのかは良く分からない。細かいことを気にしない性格だから、「友達を助けるためなら行って来い！」といわんばかりに背中を押してくれたのかもしれない。だけど、そうではなくて、きつとヒメを救いたいというぼくの思いが伝わったからだろうと、考えることにした。

この世は、悪意だけで形作られているわけじゃないということを、子どもながらに実感し、何故とかどうしてということにせず、乃木さんの言うとおり、大人の厚意に甘えた。そういった意味でも、乃木さんはぼくにとつて「恩人」だった。

「いいかい、良くお聞き。この先の山の峰に、一人暮らしをしてる、陶芸家の小父さんがいる。あたしの弟だ。名前は、留守冬男るすふゆおという。変わった名前だから覚えやすいだろう？ こおろぎ山へは、その小父さんに連れて行ってもらうといい」

ぼくが、乃木さん家を出発する直前、母屋から地図を片手に走りよってきた。乃木さんはぼくに小さな手書きの地図を手渡ししながら説明した。どうやら、乃木さんがわざわざぼくのために、書いてくれたものようだ。簡素に、こおろぎ山までの道のりが記され、その途中にばつてんの印が描かれている。

「でも、ご迷惑になりませんか？」

と、ぼくが言うと、乃木さんは噴出して笑った。

「子どもがそんなこと気にしなくてもいいんだよ！ 大人の厚意に甘えなさいな。それに、山の日はずぐに暮れる。真っ暗になって、山を彷徨っていると、『山神さま』に連れ去られてしまう」

脅し文句のようにも聞こえる『山神さま』の言葉がぼくの背筋を

ぞわぞわさせる。もちろん、それが子どもに言うことを聞かせる、大人の方便だと言うことくらい、十歳のぼくにも分かった。だけど、ここは素直に乃木さんの言うことに従おう。得体の知れない『山神さま』より、ここで家へ連れ戻されないだけでもマシだと思ったからだ。だって、まだぼくはヒメを救うための葉っぱを手に入れているのだから。

「いいかい、くれぐれも山道から外れたりしないこと。無理だと思ったらすぐに引き返すんだよ。こおろぎ山までは、まだずいぶんと距離があるからね。子どもの足じゃ、一日以上かかってしまう」

「はい。いろいろ、お世話になりました。あの、リコとヨンちゃんのこと、よろしく願います」

ぼくがペコリと頭を下げると、乃木さんは大福みたいな顔一面に笑みを浮かべ、「任せときな」と強く胸を叩いた。

リコとヨンちゃんのこととは本当に心配だ。できるなら、すぐにでも、警察に電話してその行方を探してもらわなければいけない。でも、そうしている一分一秒にも、ヒメの命は、難しい病気に蝕まれているんだ。幼なじみと好きな子のことを、秤にかけ、そして好きな子を選んでしまったことを、後悔しないわけが無い。でも、逆にヒメのことをあきらめたなら、ぼくはもっと後悔したかもしれない。どうか、罪深いぼくを許して欲しい、と胸の奥で祈るような気持ちを抱えながら、ぼくは乃木さんからもらった麦藁帽子を被った。女の子の名前が書いてあったから、きつと女の子の帽子なんだと思う。その所為か、すこしぼくの頭には窮屈だった。

「気をつけて行くんだよ」

ぼくは、乃木さんに見送られて、再びこおろぎ山を目指して出発した。何度か振り返り、何度も乃木さんに手を振った。そして、広いみかん畑の間を通る農道を登ると、やがて、木々がトンネルを作る山道に出る。地図をによれば、この道を延々と下っていけば、町に帰ることが出来る。

「行こう」

ヨンちゃんのこと、リコのこと、後ろ髪引かれる思いを断ち切るようにぼくは、自分に言い聞かせた。そして、上りの道を選ぶ。目指すこおろぎ山は、ここからでは見えない。ひとまずは、乃木さんに言われたとおり、陶芸家の小父さんが居るという場所を目指すことにした。

待つてで、ヒメ。必ず、世界樹の葉っぱを手に入れるから。ヒメのこと、絶対助けるからね。

体温計が、十回目の検温を知らせる電子音を鳴り響かせた。小さな窓の液晶画面に、デジタルの数字。

「七度六分か……」

とぼくは読み上げながら、安堵に胸をなでおろした。熱中症で上昇しきっていた体温は平熱に戻り、徐脈の傾向を示していた脈拍も正常に戻りつつある。

「予断は許しません、もう安心でしょう。すぐに、目を覚まされと思いますよ。ですが、くれぐれもご無理をなさらないようにお伝えください。特に、今日のように暑い夏の日に、屋外で農作業などに従事する場合、体温の上昇に気をつけることと、水分の補給を怠らないこと。特に、ただの水を飲むのではなく、スポーツドリンクなどの塩分を含んだ水を摂取してください」

「わかりました。母がお世話になりました、先生。ああ！わたしったら、お茶もご用意しないで」

乃木さんの娘はそう言うと、母親の無事に安堵する間もなく立ち上がった。ぼくは、その背中に「お構いなく！」と声をかけたが、すでに乃木さんの娘の姿は、母屋の方へと消えた。

残されたぼくは所在無く、開け放たれた縁側の向こうに見える、みかん畑を眺めた。二十年前と、なんら変わらないその風景は、懐かしさ呼び起こす。

不意に、夏の風が蚊取り線香の香りとともに、小さな声を運んだ。ぼくの傍に横たわる、乃木さんが薄く目を開いている。まだ、意識

がはつきりとしらないのか、乃木さんは皺に囲まれた瞳でぼくの顔を見つめた。

「ありがとうよ」

そういつたかどうかは分からない。ただ、そんな風に乃木さんの口が動いたかと思うと、再び瞳を閉じて、静かな寝息を立て始める。ありがとう……か。何度も患者の口から聞いた言葉だ。聞きなれた言葉のはずなのに、胸が熱くなるのを感じていた。

二十年の月日を経て起きた、偶然の出来事は、おかしなもので、ぼくと乃木さんの立場を逆転させた。二十年前は川で溺れたぼくが助けられ、今は熱中症で倒れた乃木さんをぼくが助けた。それを、出来すぎだともうよりも、ぼくはかつての恩人を救うことが出来たことを、嬉しく思っていた。

患者を救って、こんな気持ちになるのは、一体いつ以来振りだろう。あれは、確か、ぼくが研修を終え、湾南大学救急救命センターに勤め始めたばかりの頃。始めて担当した患者。高校生の女の子で、貧血で倒れて運び込まれた。貧血の原因は女性特有の理由で、難しい治療を必要とはしなかったが、それでも彼女はまだあどけない顔に満面の微笑みと、「ありがとう、先生」の言葉を僕にくれた。その時ほど、医者になったことを誇りに思い、患者が笑顔で帰っている姿を嬉しく思ったことはなかったかもしれない。

それから数年の月日を経て、ぼくは忙しさの中で、「ありがとう」と言われることに、少しずつ嬉しさを感じなくなっていた。それよりも、早く次の患者、また次の患者と、機械的に、義務的に、患者を裁いていくことしか頭になかった。

「粗茶ですが」

突然背後で声がして、ぼくは少しだけびっくりした。どうやら、遠い過去を思い出している間に、乃木さんの娘さんが、お茶を淹れて戻ってきたらしい。彼女は丸いお盆に、麦茶の注がれたコップを携えていた。その琥珀色の飲み物を目の当たりにして、喉がカラカラだったことを思い出す。

他人には、「水分補給を」なんて言っておきながら、自分はヨンちゃんのコンビ二で飲んだ五百ミリリットルのお茶以外、何も口にしていない。これぞ、医者の不養生。はしたないとは思いつつも、「いただきます」と麦茶のコップに手を伸ばした。香ばしい香りと少しだけの苦味。一気に喉に流し込む麦茶の味は、二十年前、乃木さんが水筒に入れてくれたそれと、同じ味がした。

「ホントに助かりました。そういえば……先生はよくここが母の家だと分かりましたね」

お盆を抱えながら、乃木さんの娘は素直に疑問を口にした。それもそうだ、ここには良く似た日本家屋が軒を連ねており、その中から乃木んの家を探り当てるのは難しい。

「お母さまは覚えておられるかどうか分かりませんが、ずっと以前、お母さまにお世話になったことがあります」

「まあ、そうなのですか？」

驚く乃木さんの娘の横で、僕はボストンバッグを引き寄せて、その中から古びた麦藁帽子を取り出した。縁はほころびて、「はるみ」とマジックで名前の記されたりボンがついたそれは、明らかにぼくの持ち物には見えなかっただろう。

「その時、お母さまからお借りしたものです。はるみさんというのは、あなたですよね？」

「ええ、春実わたしです。その帽子のことは、良く覚えています。とてもお気に入り帽子だったのに、ある日なくなっていることに気付いて、母に問い質したら、男の子にあげたって……もしかして、その男の子って先生のことなんですか？」

ぼくは苦笑交じりに頷きながら、乃木さんの娘、春実さんに麦藁帽子を手渡した。春実さんは、懐かしげに目を細め、麦藁帽子を眺めた。

「水筒もお借りしてたんですが、紛失してしまい、申し訳ありません」

「いいえ。まさか、先生はわざわざ家にこれを届けるために？」

「いえ、夏八木に用があつたので、ついでと言つては何なんですがお礼を兼ねて麦藁帽子をお返しに上がらせていただいたんです」

ぼくがそう言つと、春実さんは、やや訝るように小首をかしげた。ぼくは慌ててコップを手元に置くと、再びボストンバッグをあさつた。指先にプラスチックケースが触れる。それを手にとつて、蓋を開けると中から名刺を取り出して、春実さんに手渡した。

「申し送れました。私、明日よりこちらの、夏八木診療所に勤めることとなりました、野崎秋人といいます」

名刺を受け取つた春実さんの顔が驚きに変わる。

「まあ、診療所の！ お話は町役場の回報で伺つてます。何でも、首都圏の大きな病院に勤めてらしたとか。何でまた、こんな田舎に……？」

その質問に他意はなかつたと思う。だけど、ぼくは答えに窮してしまつた。隠すべきではない、あれはぼくの過ちなだから、その結果この町に戻つてきたのだと言ふことは事実だ。しかし、それを口にする勇気がぼくにはなかつた。

14・感謝の言葉（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

センター長がぼくを呼び出したのは、ぼくのクビが決まる一週間前だった。教授たちで構成される諮問会議において、リスク・マネジメントが行われ、そして、ぼくが濟南大学病院の救命センターを罷免されることは、すでに分かりきっていたことだ。

医療ミスの中でも、最悪の事例である、人為的なミス、即ちヒューマンエラーに対して、教授たちが考えるリスクとは、大学にとつての損益のことであり、ぼくを庇うことはリスク、つまり「損」であることは明白だ。もっとも、ぼく自身も庇って欲しいとは思っていなかった。

間違いを犯し、津田幸浩くんの命を奪ったのはぼくであり、そのことが救命センターの存続を危ぶませるのだとしたら、ぼくは素直にここを去るべきだと考えていた。大学にとつて、市内で唯一の三次救急まで行う救命センターは、経営上のリスクであつて、廃止さえも検討されている。だが、近隣でもほとんど三次救急を行う病院が存在しない以上、ここを頼ってくる患者は多い。にもかかわらず、それらを切り捨てることは、人を救うことを放棄する、経営者のエゴだと思う。もしも、ぼくが大人しく、救命センターから消えることで、センターを守れるのなら……いや、ともに働く仲間たちに迷惑をかけたばくに出来るのは、もうそれ以外なかった。

だから、センター長がわざわざぼくを呼び出したとき、ぼくは懷に辞表を携えていた。諮問委員会が、ぼくの処分を下す前に、ここを去ろうと考えていたのだ。だけど、センター長は、辞表を見るなり渋い顔をして、つき返して言った。

「私は、それを受け取っても、教授連中は受諾しないだろう。どうしても、君をクビにしなければ気がまんようだ。残念だが」

そして、センター長はぼくの辞表の代わりに、机から一枚の紙切れを取り出した。

「教授どもは、医師会のお歴々や、政治家にだけぺこぺこする、内弁慶集団だ。必死で、患者のためを思っているのは、接待に明け暮れる教授ではなく、医療の現場で戦う君のような医者だ」

普段のセンター長は、他人を褒めたりはしない。外見的には、医者というよりも、軍人のような体躯をしており、医者だろうが、看護師だろうが、だれかれ構わず厳しい言葉を浴びせかける、鬼のような人だった。多くの仲間たちは、センター長のことを怖がっていた。かく言つばくも、平沢さんと陰で「鬼軍曹」と揶揄していた。

だが、その日のセンター長は少しだけ雰囲気違った。

「だから、医者であることを諦めてはいかん」

「お言葉ですが、ぼくは、自分の力を過信し、看護師からキャパシティ・オーバーだと言われても聞かず、無理な患者の受け入れをしました。その結果、手が廻らず、初歩的なミスで尊い命を奪ったのです。そのような人間が、医者でいていいはずがありません。ぼくは素直に、罷免されるべきなのです」

「しかし、君が津田さん親子を受け入れなければ、彼らは都内のどの病院にも受け入れてもらえず、結局息絶えていたかもしれん」

「一つの命でも、救えなければ、同じです」

ぼくは視線を逸らした。すると、センター長は再び渋い顔をして、「君は真面目すぎるんだ。真っ直ぐなところは、君の長所だと思う。だがな、医者であることを諦めてはならない。君に救われた命も数え切れないほど沢山あるじゃないか。この失敗は、次にどれだけの傷病に苦しむ人を救えるかに掛かっているんじゃないのか？」

と手に持った紙切れを、差し出した。そこに書かれている文面を読む間もなく、センター長は続ける。

「包み隠さず言えば、君の、無謀とも言える患者の受け入れには、私も反対だった。センターを預かる身として、センターが機能麻痺に陥るのは反対だ。しかし、だからと言って、患者を見捨てたいとは思わない。救命救急が患者にとって、最後の砦となりうるなら、教授や経営者の言いなりに、このセンターを潰すわけにはいかん。」

君の罷免には、私も賛成せざるを得ない立場なのだ。だが、君のよ
うな医者を失うのはもつと残念なことだ。そこで、この紙切れだ。
これは……、知り合いの医者から預かったものなのだが」

センター長の差し出した紙切れには、「夏八木町診療所・医師募
集要項」と書かれていた。ぼくは、その懐かしい故郷の名前に驚く
とともに、センター長が何を言わんとしているのか悟り、二重の驚
きに包まれた。

「田舎の診療所だが、とても長閑な町だそうだ」

センター長は、そこがぼくの故郷だとは知らない。もつとも、親
の都合で、十歳の秋にはこの町を離れたものの、それでも夏八木は
ぼくにとって、かけがえのないふるさとであり、医者としての出発
点でもあった。その偶然は、神さまの悪戯なのか、それとも悪意な
のか、ぼくには図りかねた。

「夏八木診療所は、いま、医者が一人も居ない。町の人たちは、一
時間近くかけて近隣の病院へ通っているそうだ。夏八木の、医療サ
ービスは底辺といっても過言ではない」

「つまり、寒村医療と言うことですか？」

「そうだ。先方には話を通してある。町役場の担当は、君がこのセ
ンターを辞めることとなった理由も承知の上で、診療所を任せたい
と言ってくれている。どうだ？ 野崎くんさえよければ、夏八木町
の診療所で医者を続けてみないか？ 人を救うことに、都会も寒村
もない。君なら分かっているはずだ」

そう言つて、センター長は小さく微笑んだ。それは、ぼくが見た
最初で最後のセンター長の微笑みだった。すぐに返答は避けたもの
の、ぼくに残された道は、きっぱりと医者を辞めてしまつか、それ
とも夏八木に行くかの二択しか残されていないことは分かっていた。
そして、センター長の前では「ぼくのような人間が医者でいい
いはずがない」などと思得を切ったものの、本心は、医者であるこ
とに未練があった。まだ、ぼくに出来ることはあるんじゃないのか、
心がそう呼びかけていたのだ。

元来、出世には興味がない。富と名声のために、医者になったわけじゃないはずだ。そして、医療が抱える問題が、一つではないことは承知しているつもり。ならば、迷うことは何もないはずだった。ぼくが夏八木行きを決意したのは、ちょうど諮問委員会が、ぼくを大学病院から罷免し、患者遺族との金銭的和解が成立したのと同じ時だった。

電話口に出た、夏八木町役場の担当は、甲高い声の女性だった。彼女は、しきりに契約について気にしていたが、ぼくは待遇など、ご飯を食べて、屋根の下で寝て、普通に生きていけるほどであれば構わないと思っていた。そのためか、彼女には好印象を与えられしく、向こうも二つ返事で、医者崩れ状態のぼくを引き取ってくれることとなったのだ。

あれから一ヶ月弱。ぼくは、夏八木の町にいる。ここで、医師として新たな一步を踏み出すために。それなのに、ここに降り立っても尚、スタートラインを踏み越えられない迷いのなかで、心は行ったり来たりを繰り返していた。

何のために、ぼくは医者になったのか？

本当に、医者を続けてもいいのか？

ぼくが医者であることを諦めない。そのことに意味はあるのか？
いくつもの疑問符が、ぼくの脳裏を去来しては、かき乱していく。それでも、ぼくはここにいる。だから、その迷いを断ち切るには、答えを得るためには、あの場所へ行くしかないのだ。始まりの場所へ……。

だが、乃木邸から、こおろぎ山までは、まだまだ距離がある。実際、二十年前も、乃木さんに見送られて、こおろぎ山への旅を再会したぼくの前に、果てしない道のりが待ち受けていた。

本当は、熱射病で倒れた患者が、目を覚ますまで付き合うのが、道理というものだったが、ぐずぐずしていれば、山の陽はあつという間に暮れてしまい、約束の時刻に遅刻してしまう。それだけ、こおろぎ山は遥かな高みとも言えた。

「それじゃ、春江さんにもよろしくお伝えください。失礼します」
ぼくは、多少の無作法と知りながらも、腰を上げて、縁側からお暇を請う。春実さんは、深々とお辞儀すると、ぼくを見送ってくれた。帰り際まで気がつかなかったが、玄関口の門扉に、子どものものらしき、自転車を立てかけてあった。どうやら、春実さんの息子のものらしい。もしかしたら、リコに会いに行ったとき、あの校庭で遊んでいた子どものだれかが、春実さんの息子だったかもしれない。

世間は思うより狭く、まして夏八木町は山と田んぼに囲まれた小さな町だ。離島ではないが、ぼく以外が電車から降りなかったように、外部から立ち寄る人間も少ない、ある意味で陸の孤島だ。そんな、寒村に唯一ある診療所の医者が、病気を理由に退職したのが七年前。それから、七年もの間、この町は医者を探し続けていた。

もしも、ぼくがこの町に帰ってこなければ、乃木さんは手遅れになっていたかもしれない。朦朧とする意識の中で、乃木さんがぼくに言った言葉。「ありがとう」

それだけでも、ぼくが寒村医療に携わる意味がある。でも、それだけでは、前に進めないのは、やはり瞳を閉じれば、そこに幸浩くんの顔が過ぎるからだ。彼を救えなかった、いや、死なせてしまったばかりの過ちを背負えば、たちまち崩れ去ってしまう。だからと言って「仕方がなかった」と諦めを口にする勇氣はなかった。

もうじき早生わせの刈り入れが始まる頃だろうみかんの木が取り囲む、農道を山道へと戻る。再び耳にうるさいほどの、セミの鳴き声が聞こえてくる。

二十年前、ぼくはここから、乃木さんに言われた「留守冬男」に会うため、ただもくもくと山道を登坂した。

15・寒村医療（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

16・ 独りぼっちの夜道

乃木さんの家の居間で眠っている間に、ぼくは夢を見た。はじめに、声があつた。暗闇の中に浮かぶぼくに、囁くような不思議な声。大人の男の人の声だと言うことは分かるけれど、どこから聞こえているのか、誰の声なのかも分からない。

『きみは何故、自分とは関わりのない多くの他人を助けたがる？』

その問いは、十歳のぼくに宛てられたものだった。その意味も、何故問われるのかも分からないまま、ぼくは夢の中と言う、ある種不安定で不可思議な世界を自認しながらも、必死にその問いの答えを探した。

『人が人を助けたいと願う、その心理の裏にあるのは、エゴイズムじゃないのか？』

「えご……いずむ？」

言葉の意味が良く分からない。

『苦しんでいる誰かのためといいつつも、その真実はきみ自身の満足のため。善意は誰が為にあるものなのか。その所在も分からぬまま、彷徨い続け、きみは未来に何を見る？』

「何を言っているの？ ぼくには分かんない。ぼくはただ、ヒメを助けたいだけなんだ。だって、ぼくは……」

『ならば、選び取れるか？ 選るべきものを』

目の前を閃光が走り、まるで紙芝居の場面でも変わるかのように、そこは見知った真つ白な洋館の一室に変わる。その部屋の窓辺に置かれたベッドの上、薄いピンク色のパジャマを羽織った女の子が、額に汗を浮かべ、苦しそうに呻いている。周りの大人たちは、みな一様に頂垂れて、女の子の病に手の施しようがないと口を揃える。それでも、女の子は苦しみから逃れるかのように、ぼくに向ってその白く細い手を伸ばしてきた。

「たすけて、シュウくん……！」

言葉にならないほどの、小さな叫び。ぼくは彼女の愛称を呼びながら、その手をとった。ぼくの指先と、彼女の指先が、コツンと触れた瞬間、ぼくの周りを濁流のようなうねりが取り囲む。ぼくは必死でもがき、離れていく彼女の手を掴もうとするが、うねりはぼくを離さない。

「シュウちゃん！」

リコの声？ ヨンちゃんの声？ 振り向けば二人も、濁流のうねりにもがいている。友達か、好きな子か、どちらに手を伸ばしたらいい？ ぼくは千手観音じゃないから、手は二本しかない。彼女の手をとれば、リコかヨンちゃんのどちらかを見捨てなければならぬ。幼なじみ二人の手をとれば、彼女の手をとることは出来ない。どうしたらいいのか分からず、途方にくれていると、ぼくと三人の距離はどんどん離れていく。

助けなきゃ。助けなきゃ！ 頭の中で、呪文のように何度も繰り返しながら、伸ばす手は……。

夢はそこで終わり、目を覚ましたぼくは、みかん畑の間を吹きぬけて、夏の風に運ばれた蚊取り線香の匂いに、鼻をくすぐられた。

山の陽が沈むのは早い。乃木さんの言ったとおりに、みかん畑を後にして山道をひたすら、こおろぎ山へと進んでいると、トンネルを形作る木々の間から見えていた太陽の光が、どんどん赤く染まり、そして、あたりは薄暗くなっていく。

暗くなればなるほど、ぼくの不安はかきたてられて、何度も後ろを振り返った。リコやヨンちゃんが走って追いかけてくるんじゃないかと思っではみても、長く続く山道のどこにも、二人の姿はない。二人の無事を信じてはいるけれど、それでも後ろ髪引かれる思いと同時に、独りぼっちである寂しさや不安が、ぼくを心細くさせる。

やがて、太陽はすっかり山の峰に姿を消す。影が黒く塗りつぶされて、森にばかりと暗闇を作り出す。夢の中のような暗がり。いやいや……あれはぼくが見た、ただの夢。怖くなんかない。ぼくは、

そう念じながら、肩にかけた水筒のベルトを握り締めて、舗装もされていない山道の砂利を踏みしめた。

不意に、がさがたと木立が揺れる。ぼくは、弾かれたようにビクつき、足を止めて辺りを見回した。山から吹き降ろす風か、それとも鳥が羽ばたいたのか、良くは分からないけれど、物音がするたびに逐一、おっかなびつくりで驚き、ぴたりと足を止める。まさに牛歩。

どれくらいそうして、山道をおるいただろう。すっかり、あたりは濃紺の夜闇に包まれた。肝心の、留守さんという人の家がどこにあるのか確かめようとしても、もう地図を見るための灯りもない。

以前、小学校の図書館にある、外国の児童文学で読んだことを思い出した。その物語は、ぼくたちと同じように、冒険の旅に出る。

目的は、貧困に喘ぐ村を救うために、百年前に大盗賊団が隠したと言われる、至宝の数々を見つけること。主人公の男の子は、ぼくよりも少しだけ年上で、ぼくよりもずっと知恵があり、勇敢だ。そんな主人公が、財宝探しの旅に出る前に仲間たちに言う科白。

「冒険とは、危険に足を踏み入れることなんだ。だけど、誰も欠けることなく、宝物を村に持って帰らなければならない。そのために、旅立ちの準備は怠ってはだめだ」

今更になって、そんな教訓を思い出しても、これが世に言う「後の祭り」ってやつだ。ほとんど、突発的に世界樹の葉っぱを採りに行くこうと決め、かつ時間の制約があるぼくらにとって、準備なんて言う言葉は、縁遠いものだった。

だめだ、独りぼっちだと、考えることが、どんどんマイナス方向に突き進んでいく。元来、プラス思考の明るい子どもものつもりはなけれど、半ば夜道と化した一本道を、後ろ向きな気持ちで歩いていると、それだけで何かよからぬものを呼び寄せそうな雰囲気満たされていく。

そこで、ふと思い出されるのは、乃木さんの言った「山神」という言葉。幼い頃の乃木さんを助けてくれたと言う「水神さま」に比

べて、妙に恐ろしげな声音だった。いずれにしても、お化けと一緒で、ただの言い伝えや出来事が、具現化したものだということは、子どもの頭でもわかる。ただ、神さまやお化けなんて存在しないんだと、頭の中では分かっているけど、空気も色も音も、なにかもが溶け込んでいくような夜闇の中にいると、やはり怖くなってしまうものだ。ぼくってば、こんなに臆病だったのかな？ などと思う余裕さえない。

とりあえず道は一本道。ずいずいと、山を登っていく緩やかな傾斜があるのみで、迷いようもない。だったら、このまま進み、留守さんの住んでいるという陶芸工房へ早くたどり着こう。ぐるぐるとめぐる思考がたどり着いた結論に従って、ぼくは足を速めた。物音なんか気にしない、気にしない……。

と、念じる矢先、こつこつという音が鼓膜を振るわせた。どう考えても、木々の揺れる音じゃない。森には似合わないその音は、二つ重なるようにして、一定のリズムを刻みつつ、ぼくの後ろを追いかけてくる。これは、足音だ、と気付いたばかり背筋が凍りつくのを感じ、空恐ろしくなった。

背中をひんやり冷たい風が通り抜けるのに合わせて、ぼくは一気に走り出した。すると、足音はぼくを追いすがってくる。

尾けられてる……。

これが、サスペンス映画なら、緊迫のワンシーンだけど、ぼくはただの小学生で、スパイとか殺し屋じゃない。だから、後を尾けられるような、謂れはない。

こんな夜の山道に、灯りも点けずに歩く人がいるはずない。

走りながら、つぎつぎと可能性を消去していくと、足音の正体がこの世のものじゃないように思えてきて、更に怖くなった。やがて息は上がり、酸素を求めて水面に上がってきた魚のように、顎を突き出す。それでも、息苦しく、激しい鼓動は止まらない。足は鉛のように重たくなるし、ここまでの疲労が全身にのしかかる。

だけど、幸いにも、足音は次第に遠くなっていった。どうやら、

姿なき尾行者を引き離せたらしい。安堵に包まれながら、ぼくは一度足を休めることにした。

喉はカラカラ、汗はだらだら。肩から提げた水筒から、乃木さんのくれた麦茶を取り出し、カップいっぱいのを、ぐいっと飲み干す。

と、その時。山道の脇の茂みがさがさとなる。流石に、物音に動じなくなっていたのか、それともそんな気力もなかったのか、さして驚きもしなかった。だけど、その茂みから、白い浴衣姿の男の子が現れて、ぼくの瞳を覗き込んだときには、心臓が飛び出しそうになった。

ぼくより少し年下の男の子。藍染の金魚をあしらった、白地の浴衣のものめずらしさよりも、可愛らしいと形容した方がいくらい、女の子みたいな顔をしたその子の瞳が、まるで川で溺れたときに見た、水底の黒い深淵を思わせた。

ぼくは思わず、口に含んだ二杯目の麦茶を飲み込み、咳き込んでしまう。それに驚いたのか、男の子は突然、わんわんと泣きはじめた。その声は、森の空気を震わせるようだった。突然現れて、突然泣き出した男の子を目の前に、ぼくはどうしたらいいのか分からなくなってしまった。ぼくは一人っ子で、弟や妹がない。そのため、自分より年下の子をなだめる方法をしらなかった。

「ええっと、ごめんっ」

慌ててぼくは、水筒から麦茶をカップに注ぎ、男の子に手渡してあげた。男の子は、それに口を付け、ぼくと同じように、ぐいっと飲み干して、ようやく落ち着いのか、泣き声をとめた。

「きみはどうして、こんなところにいるの？ お家帰らなきゃ」

他人のことは言えないのだが、ぼくは少しだけお兄さんぶってみた。男の子は、まだ小さくしゃくりあげながら、空になったカップを右手に、左手でぼくのシャツの裾を掴む

そして、頭を左右に強く振ると、また泣き出しそうに顔をゆがめた。つまり、帰り道が分からなくなった迷子、ということなのだろう。

う、と自ら咀嚼したぼくは、

「じゃあ、一緒にお家を探そう」

と言つて、ぼくのシャツを握る男の子の手を取った。

それは、お兄さんぶつて言つたというよりは、どうしていいか分からず、またぼくよりも幼い男の子を放っておくことが出来なかつただけだ。

男の子はぼくに手を引かれ、とぼと歩き出した。この子のがどこにせよ、まずは留守さんの家に着くのが大事。もしもこの近所に住んでいる子なら、留守さんが知っているかもしれないし、知らなくても大人の人に預ける方が確かだ、と算段をつける。

子どものぼくにしては、割と現実的な判断だったと言えるだろう。もつとも、留守さんの家が、どこにあるのか分からないのだけど……。

「ねえ、きみは、この近くで陶芸をやってる小父さんの家知らない？」

連れ立って歩きながら、ぼくが尋ねると、男の子は水筒のカップが気に入ったのか、右手でそれをくると回しながら、ぼくの方を見る。深淵のような深い色した瞳が、きよとした。

「とうげい？」

「ああ、えっと、土を練つてお皿とか花瓶とかを造る人のことだよ。名前は留守さんって言つんだけど……」

男の子はしばらく考えるような仕草をした後、また深淵の瞳で、ぼくの顔を覗き込む。

「知ってるよ、こつち！」

と言うと、男の子が突然ぼくの手を強く引っ張った。驚き戸惑っている合間に、ぼくは山道から外れて、茂みの奥に連れ込まれる。足元を、あわだち草の葉が引っかけて、むずがゆい。鈴虫か蟋蟀（こおろぎ）が、勢い良く跳ねる。

「ちよつと、待って、道から外れてるよ！」

「大丈夫、近道だから」

男の子はそう言うと、お構いなしに茂みに分け入り、森の奥深くへとぼくを案内する。振り返れば、もう山道は見えないところまで来ていた。

「こっち、こっち！」

わんわんと泣いていたのが嘘のようだ。と思っていたと、どこからか水の流れる音が聞こえてくる。本当に近道なのか？ ぼくの脳裏に不安が過ぎって、男の子を止めようと手に力を込めてみたけれど、びくともしない。だけど、そんなぼくの戸惑いに気付いたのか男の子は、ぼくの方に振り向いて、ニヤリと笑った。

「くふふ」

それが、笑い声だったのか良く分からない。ただ、ぼくの目を見つめる深淵の瞳が、鈍く赤く光を帯び、危険なサインを感じ取ったぼくは逃げ出そうとする。だけど、ぼくの体は、その光に射すくめられ、自由が利がなくなってしまった。

16・独りぼっちの夜道（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

17・ 深淵の瞳

お化けとか、幽霊という非科学的なものを信じていないというのは、ぼくが理化学者の一端たる、医者だからというわけではない。二十年前からすでに、ぼくはお化けや幽霊を、心の底から信じていなかった。口幅つたい言い方をすれば、格好つけているだけで、内実は、そういうものが苦手だから、信じないようにしているだけだった。

だから、男の子の眼光に射すくめられたその時も、ぼくはまだお化けの存在に懐疑的だった。よく聞く話にこんながある。「ぼくは詐欺にかかったりしない」と公言するやつほど、詐欺の被害に遭いやすい。例えとしては逸れる部分もあるが、概ねそれに近い状況だった。信じていないから、突然目の前に現れたら、恐怖で固まってしまう。

「くふふ」

もう一度、男の子は笑った。その奇妙な笑い声と、深淵の瞳。それが、目の前にいる男の子のことを、お化けだと断定させた要因だった。

男の子は、何も言わずぼくの手を引っ張る。水の流れる音が徐々に近づいてくる。その先にあるのは、沢と呼ばれる、山の頂上付近から流れ込む小川。だけど、その川のふちは、断崖になっていて、男の子はまるでそこへぼくを導こうとしているかのようだった。

ふと、崖のほとりに「危険！」と大きな字で書かれた看板が目に見える。ここから落ちれば、水深の浅い小川の底に頭を打ち付けて、即死も免れない。

「いやだ、そっちへは行きたくないっ！」

叫ぼうとするのに、口の周りの筋肉が言うことをきいてくれない。それどころか、まるで操り人形になったみたいに、ぼくの意味とは無関係に、体が勝手に崖の方へと向う。男の子は、崖の縁でぼくの

手を離れた。だめだ、これ以上足を出したら、崖から落っこちて死んでしまう！！

ひゅー、と崖下から涼しい風が舞い上がってくる。

「きみ……やまがみさま？」

やっと口にした言葉はそれだった。今際に発する言葉としては、あまりに味気ないけれど、何故ぼくがこんな目に合わなければならぬのか、確かめずにはいらなかった。

「とうといものはすべからくひとのうえにある」

尊いと言言葉の意味も、彼の言った言葉も、ぼくには理解できなかったけれど、神さまと名のつくものが悪戯に、ぼくを殺そうとするとは思えない。ただ、ぼくを見つめる男の子の、深淵の瞳はぼくの意識まで吸い込んでしまおうとする。

「ばいばい」

突然、男の子は深淵の瞳を細めてニツコリと笑い、水筒のカップを持った右手をひらひらと振って見せた。すると、ぼくの体が木立から落ちる枯葉のように、ひらりと舞った。目を瞑りたくても、助けを求める叫び声をあげたくても、叶わないまま、まどろんだ意識のまま、ぼくはまっ逆さまに、崖から落ちる。

つい数時間前、川で溺れて死を覚悟したのもつかの間、絶体絶命の危機が再びぼくを襲う。今度は万に一つも助からない。わけの分からぬまま、このまま死んでしまうのは、覚悟なんて出来るようなものじゃなかった。「シュウちゃんっ！！」

崖下からの風を切り裂くような声。それと同時に、ぼくの両手が、誰かに掴まれた。その瞬間に、遠のきかけたぼくの意識が戻ってきた。視界の先は足元。底には地面がなく、遠目に小川が見えるだけ。つま先から血の気が引く思いで、ぼくは慌てて、上を見上げた。

二本ずつの腕が、崖の上からぼくの両腕をしっかりと掴んでいる。「何やってるんだよ、シュウちゃん！」

「自殺するつもり？」

ぼくを助けた二本の腕の先から、聞き覚えのある声が重なる。現

実に引き戻されたぼくは、崖肌の凹凸に足を引っ掛ける。そして、「せーの」の掛け声とともに、二人に引っ張られて崖の上によじ登った。

ぼくはこみ上げてくる恐怖に膝を突いて、辺りを見回した。あの深淵の瞳を湛えた、白い浴衣の男の子はどこにもいない。まるで最初からそこにいなかったかのように、気配すらなかった。代わりに、ぼくの視界には、肩で息する見覚えのある顔。

ぼくは、二人の名前を叫ぶ前に、リコに抱きついていていた。二十年後のぼくからすれば、あまりにも恥ずかしいことだが、その時は親友でもある幼なじみとの再会に、嬉しさがこみ上げ、それを言葉にするよりも、態度で表したほうが早いと思った。

案の定、リコは顔を真っ赤にして、恥ずかしそうにする。

「し、シュウちゃん!？」

「リコ、ヨンちゃん、無事だったんだ!」

嬉しくって、リコの柔らかい頬に頬擦りしたいけれど、流石にそこまでやったら、リコのコブラツイストを食らうはめになってしまふ。

「無事って、シュウちゃんこそ、無事だったんだね。っていうか、恥ずかしいから離れてようっ」

と、リコは戸惑いながらぼくを引っぺがした。すると、今度はヨンちゃんが、「俺には抱きついてくれないのな」と言うので、ぼくはとりあえずヨンちゃんにも抱きついておいた。男同士で抱き合うのは、女の子に抱きつくのの倍以上恥ずかしいので、とりあえず。

「ヨンちゃん、心の友よっ!」

なんて、漫画から拝借した科白にのせる。もちろん、ヨンちゃんも「心の友よっ」と叫びながら、ひし、とだきあうと、リコとは違つてちよつとだけ汗臭かった。

「なにそれ、コント?」

リコが傍らで、呆れ顔をしながらぼくたちを見る。それでも、幼なじみとの、経った数時間の再会は、心細く不安でいっぱいになり

かけたぼくの心を軽くしてくれた。さつきまでの、不思議で恐ろしい体験なんて、もう半分忘れかけていた。

だけど、三度。山道の方からこちらに向って、物音が近づいてくる。ずいぶんがさがさと、乱暴な物音だった。ぼくとヨンちゃんは離れて、立ち上がると、それぞれに身構えて、物音の接近に備えた。野犬？ それとも……。

「おい、お前たち！！ こんなところで何してるっ！！」

確かこのあたりだった……。かすかな記憶を頼りに、山道を横切り、茂みがより深くなった森を進む。子どもの足よりも、歩幅の大きい大人になったぼくが、その場所にたどり着いたのは、みかん畑を後にして、小一時間ほどだった。まだ日が暮れるまでには時間もたつぷりあって、幸いか、二十年前のあのときに比べれば、気味悪さは皆無に等しかった。

しかし、特別な道や、獣道があるわけじゃない。あのとき、男の子はぼくの手をものすごい力で引っ張って、森へと連れ込んだ。そして、その先にある崖からぼくを突き落とそうとした、その恐ろしい記憶だけが頼りだった。

二十年前、出会った男の子の正体が何であったのかは、今でもはつきりと分らない。推測はたてられるが、どれも現実味と言う意味では、非常に納得のいかないものばかりだ。たとえば、幽霊という説。このあたりで、何か不幸に見舞われた子どもが、ぼくを道連れにしようとした。折りしも時節は、お盆。天に召された人が、地上に舞い戻ると言われている。

しかし、前述したとおり、科学で証明できないものは信じるには、値しない。きつとそうかもね、と言うほかないのだ。

じゃあ、それとは別に、現実には悪戯好きの男の子が存在していたとするなら、何故夜道にいたのか、何故ぼくの体は言うことを聞かなくなっただのか。あれは、まるでマインド・コントロールのようだった。そして、あの水底を思わせる深淵の瞳も、彼の言った言葉の

意味も、今をもっても分からない。

そのほかにも、いくつかの仮説はたてられる。それは、まるで小説の中の名探偵のように。だが、残念ながら、ぼくはオカルトマニアではないし、探偵でもない。歯牙ない、三十男の発想では、それ以上の結論に結びつく答えは導けそうにもなかった。

そうこうしているうちに、茂み深い森を抜け、ぼくの眼前にあの日と変わらない、崖が広がる。ぼくは、用心しながら、崖の上から下を見下ろした。

鉄橋の上から飛び降りて、無事だったという実績を持つ身としては、高さそのものはあの鉄橋の上から見下ろした川となんら変わりはない。しかし、問題は下が、ごうごうとうねりを上げるほど大きな川ではないことだ。物理法則の知識を用いなくても、そこから飛び降りたら、どうなるのかは大体想像がつく。

間一髪、映画のように、ヨンちゃんとりコが助けられなかったら、せつかく乃木さんに救われた命をあっという間に散らしてしまうところだった、と思うと、二十年たっても、背筋に寒いものを感じる。

ぼくは、これ以上崖下を見るのに耐えかねて、視線を逸らした。あの時と同じように、その視線の先には、大きく「危険！」と書かれた看板がある。ただ、あの時と違うのは、もう一つ大きな看板があつて、「ここは遊び場ではありません」と、無造作にペンキで書かれていた。

きつと……いや間違いなく、ぼくたちのことがあつたから、新しく設置されたんだと思う。

もともと、この場所で、足を踏み外しそうになった子どもや大人がたくさんいるらしい、という話を聞いたのは、ヨンちゃんとりコに助けられた少し後だった。山道から外れたただの崖。そこに多くの人が導かれ、死に直面した。しかし、実のところ、直面しただけで死者はいない。皆、間一髪で踏みとどまったり、ぼくのように誰かに助けられたりして、事なきを得ている。

だけど、それが、まるで怪談話のように思えるから、こんな看板が立てられたのだ。ぼくは、看板についた埃を軽く指先で払うと、もと来た道へと引き返した。

あの日、ここで起きたことに、結論を見出せるのは、まだまだ先のことだろう。いまは、あれは不思議な出来事だったとしておくことにした。それよりも、日暮れまでには、世界樹のあるところまで山までたどり着きたい。なにせ、山の日暮れは早いのだ。

17・深淵の瞳（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

車体が跳ねるたびに、お尻を荷台に強く打ち付けて、悲鳴を上げてしまう。舗装されていない山道はでこぼこだから仕方がない。軽トラックの荷台に乗せてもらう、という貴重な経験も、お尻の痛みの前では、何にも楽しくなんかない。

隣に座るヨンちゃんが、痛みに耐えかねたのか、荷台から身を乗り出すようにして、運転席でハンドルを握る小父さんに尋ねた。

「あの、あとのくらいで着くんですか？」

すると、小父さんは、ぶっきらぼうに「もうすぐだ」とだけ答えて、運転に集中するかのようになり、ヘッドライトが照らし出す、夜道を睨みつける。

小父さんの第一印象は、すこし怖かった。藍色の作務衣さむえに、みかんの花をあしらった手ぬぐいを頭に巻き、岩のようなごつごつした顔には無精ひげと、狼のような鋭い目つき。その人が、あの優しい乃木さんの弟の、留守冬男だとはまだ信じられなかった。

留守さんは、ぼくたちが危険な崖で遊んでいると勘違いしたらしい。確かに、再会を喜ぶぼくたちの声は、楽しげにはしゃいでいる声に聞こえたかもしれない。だから、留守さんは大きな声を出して、ぼくたちを叱った。もちろん、ぼくは事情をかいつまんで説明した。すると、留守さんは納得してくれたのか、

「ああ、なんだ、姉さんが電話で言ってたガキどもってというのは、お前たちのことか……だったら、さっさと乗れ」

と言って、山道に止めてある白い軽トラックを指差した。ぼくたちは遠慮なく、その荷台に乗り込んだ。留守さんの住む、陶芸工房へ案内してもらったためだ。留守さんは、どうやら悪い人ではないみたいだけど、子どもは嫌いだと、顔に書いてあるみたいだった。

もう夜も遅い、今夜は留守さんの家に泊めてもらうことになるだろう。ぐずぐずしてられないが、幼なじみたちとお互いの無事を

喜ぶ暇も欲しかったし、何より、無理して夜道を進む勇氣はなかった。またあの男の子に出会ったら、なんて考えると背筋がぞわぞわする。あれは夢だった、と思いたいけれど、水筒のカップはなくなっている。あの男の子が持つて行っただんだ……。

そうこうしているうちに、軽トラックは激しく揺れながら、山道の分かれ道に差し掛かる。一方は、軽トラック一台分がやっと折れるほどの道幅しかなく、どうやらそちらが工房へと続いているみたいだった。山道の分かれ道を登っていくと、やがて、高台にもくもくと煙を出す煙突が見えてくる。

煙突があるのは、家屋の方ではなく、その隣に造られた、築山のようなものの方だった。築山は人工の小山が階段状に三つ連なり、煙突はその一番奥の一番高い山の天辺から突き出ている。それが巨大な窯だということに気付いたのは、一番手前の低い山に扉があつて、そこから真つ赤な火の粉が噴出していたからだ。そういう窯のことを「登り窯」といい、焼き物を作るための窯だということを、当時のぼくが知る由もなかった

軽トラックは登り窯の手前で止まる。すぐさま留守さんは、運転席から降りて、家屋の方に大声を掛けた。

「おおい、伸由っ！！ 帰ったぞ！」

すると、家屋の入り口から、両手に薪を抱えた、青年が飛び出してきた。ぼくたちより十歳ぐらい年上だろうが、留守さんと同じような長袖の作務衣を着込み、まだ少年のあどけなさが残る顔で伸由さんは、留守さんを迎えた。

「お帰りなさい、師匠っ！ 軽トラ借りられたんですか？」

「見ての通りだ。役場の古いダチに掛け合ったら四日の期限付きで貸してくれた。それよりも、窯の温度はどうなってる？」

「今、千度を越えたところです。薪の一部が湿気てるみたいで、上手く温度が上がリません。やっぱり安物はダメですね……」

と言いつつ、伸由さんは軽トラックの荷台にいる、ぼくたちのことに気付いた。

「あれ？ 何なんです、あのお土産は？」

「ガキどものことか。俺の姉さんが、一晩預かってくれって」

留守さんはぶっきらぼうな言い方で、ぼくたちの方をちらりと横目で流した。

「この大事な時期にですか？」

「仕方ないだろう。姉さんも無理を言ってることは承知してる。かといって、このガキどもをそこらに、放り出すわけにも行かない。

伸由、窯の方は俺がやるから、こいつらを母屋に案内して、何か食わせてやれ。俺はガキが嫌いだ、悪いが子守は任せた」

「はあ、かまいませんけど」

そう言つと、伸由さんは留守さんに薪を預けて、ぼくたちを手招きする。ぼくたちは、それを確かめるように、軽トラの荷台を降りた。

乃木さんは「大丈夫だ」と言っていたけれど、師匠と弟子の会話からも、全然大丈夫には見えなかった。伸由さんの言う、大事な時期が何なのかは良く分からなかったけれど、それと登り窯から煙が上がっていることは無関係ではないようだ、と子どもながらに思案をめぐらせながら、伸由さんの後ろをついて行く。

母屋は、母屋と呼ぶにはあまりに簡素で、生活観に乏しかった。つまり、生活用品がほとんどなくて、あるものといえば、古びた戸棚と壁に立てかけられた卓袱台くらい。親子三人暮らしの小さな我が家よりも、ずっと、殺風景だ。

ぼくがそういう感想を持ったことを、伸由さんは見抜いたのか、自嘲気味に笑い、「普段は、工房の方にいて、あんまりここを使うことはないんだ」と言いつつ、ぼくたちの為に部屋の隅から丸い卓袱台を取り出した。そして、「残り物で悪いけど」と付け加えて、卓袱台の上に、晩ご飯を並べてくれる。

「あの、お世話になります。わたし、高瀬梨花。こっちの男の子が、野崎秋人くんで、そっちが、杉浦四郎くんです」

一番最初にその言葉を口にしたのは、リーダーたるリコだった。

ぼくとヨンちゃんも、お腹がすいていて目の前に並べられた食事に、垂涎をこらえながら、伸由さんにぺこりと頭を下げる。

「ぼくは伸由。ノブってよんでくれ。事情は知らないけど、賑やかなのはクライじゃない。むしろ大歓迎さ。だから、ゆっくりしていいよ。後で、寢床に案内するから、まずは夕飯を召し上げ」

ニッコリと、ノブさんが微笑む。師匠の留守さんとは違い、弟子のノブさんには人懐こさがあった。それで、ぼくたちは安心することが出来た。ノブさんが、母屋を出て行くと、ぼくたちは足を伸ばし、夢中で夕飯を口に運んだ。お世辞にも美味しいとはいえない煮物も、塩辛い味噌汁も、冷たいご飯も、お昼から何も口にしないぼくたちにとっては、ご馳走以上のものだった。

「ここ、焼き物の工房だよ。あの外にあった窯で、花瓶とかお皿とかを焼くんだよ。前に、テレビで同じような窯を見たことあるよ」

ヨンちゃんが口をもごもごさせながら言う。

「食べながら喋らないでよ。見つともないな、ヨンちゃんはっ」

すかさずリコが合いの手を入れるように、キッとヨンちゃんを睨みつけた。リコだけは、きちんと正座してお行儀良く箸を伸ばしている。だけど、そんなリコの注意も空しく、対照的に行儀の悪いヨンちゃんは、箸先で僕のほうを指しながら、

「それよりも、シユウちゃん。乃木さんって誰なのさ？」

と、話題を逸らした。ぼくは、とりあえず箸を置いて、ここに至る経緯を話して聞かせた。それは、リコとヨンちゃんの二人とはぐれてしまった後のこと。

川で溺れたぼくは、意識がなくなって、みかん農家の乃木さんに助けてもらったこと。そして、麦藁帽子と麦茶の詰まった水筒を貰ったこと。

「この帽子、女の子のだよな。ほら、ここに『はるみ』って書いてある」

ヨンちゃんが、麦藁帽子のリボンをいじりながら言う。

「うん、多分。でも、家から被ってきた帽子、川に流されたときに

なくしちゃったから」

「そうなの？ あれ、シュウちゃんのお気に入りだったのに……」
他人事なのに、リコが残念そうにする。

「仕方ないよ、生きてただけでも運がよかったんだって、小母さんにも叱られた。それでね、子どもの足でこおるぎ山へ行くのは大変だから、留守さん……あの怖い顔の小父さんに連れて行ってもらいなさいって、進められたんだ」

「なるほどね。でも、ホントに怖い顔してるよね。わたしも、あの小父さんが、『こらーっ』って現れたときは、ホントにびっくりしたよ」

「俺も！」

ぼくたちは顔を付き合わせて笑い合う。どうやら、留守さんのかもし出す雰囲気や、顔つきが怖いと思っているのは、ぼくだけではないみたいだ。

「でも、ホントに、シュウちゃん無事でよかった……」

笑い合っていると、ようやく人心地ついた気持ちになって、改めて、幼なじみとの再会を喜び合う。リコは、心底ホッとした様子で、胸をなでおろしてぼくの顔を見つめる。

「リコたちこそ」

「うん。わたしたちは、あの後すぐに手近な岸に上がったの。それからシュウちゃんを探したけど見つかんなくて、とりあえず街に帰ったの」

「あのときの、リコ、泣きそうだったよね。シュウちゃんが死んじやった！ って……」

ニヤリ、ヨンちゃんが薄く笑って、リコの方を見る。すると、突然リコはキッと目を吊り上げて、ヨンちゃんの顔面目掛け、端を投げ飛ばした。

「ぎよ、行儀悪いなあ、リコちゃんっ！」

ヨンちゃんは、箸の形が付いた顔を撫でながら、ここぞとばかりに反撃の一手を送ったが、リコはますます怒り心頭といった具合に

なる。慌てたのはぼく。流石に、こんなところで喧嘩なんかしたくない。

「えっと、それで、どうしたの？」

とぼくが言うと、リコは床に落ちた箸を拾い上げ、もう一度鋭くヨンちゃんを睨みつけてから続けた。

「騒ぎになってた。当然だよ、札付きの不良を伸して、あげく電車止めちゃったんだもん。それで、行方不明状態のわたしたちを探すため、うちの親たちが、捜索隊を組んで、出発するところだった」

「それで、このままじゃ、シュウちゃんのこと探せなくなるし、こおろぎ山にもいけなくなっちゃう。電車とめたのも、神野をやったのも俺たちだから。叱られる前に、シュウちゃんを探さなきゃって思って、逃げた」

「神野をやったのは、わたしとシュウちゃんですよ？ ヨンちゃんとは後でビクビクしてただけじゃない」

「そうだけど……まあいいじゃん。俺たちの手柄は、みんなに分けなきゃ。とにかく、大人に叱られるのは後にしたかった。んで、とにかく下流までいくか、それともこおろぎ山を目指すか悩んで」

「で、シュウちゃんならきつと、こおろぎ山を目指すって、ヨンちゃんが言い出したの。ヒメを助けたいって、最初に言ったのは、シュウちゃんだから。それで、シュウちゃんが無事なら、シュウちゃんもきつとこおろぎ山へ向ってるって思って、急いで後を追いかけたの」

「もう一度、線路を使うのは怖かったから、ずっと道沿いに。おかげで、時間掛かったって。やっとシュウちゃんらしき人影を山道で見つけたら、突然走り出すから、びっくりしちゃって……」

なるほど、あの男の子に出会う前に聞こえてきた足音は、二人の足音だったんだ。なんだ、逃げる必要なんかなかったんだ、と得心する。

「ともかく、色々あったけど、みんな無事でよかった。これって、冒険だよ」

リコが言う。隣でヨンちゃんが、うんうんと頷きながら、やつぱり口にご飯を運ぶ手を休めない。

「でも、時間は残されてないんだ。ヒメはこうしてる間も、きつと苦しんでる。ぼくはヒメを助けない」

「わかってるわよ。シユウちゃんが、ヒメのこと好きだってことくらい。好きな子のために、冒険なんて、ロマンチックじゃない？」

「それに、俺はつき合わされてるってわけだ」

「文句いわない、ヨンちゃん！ 幼なじみでしょ、わたしたち。それに、ヒメはわたしたちの友達でもあるんだから」

三度、リコの鋭い視線を受けたヨンちゃんは、ぐつと言葉を飲み込んで「わかってるよ。言っただけ」と返した。

きつと、ぼくは、この友人たちに感謝しなければならない。ヒメを助けたいと言いついたのは、ぼくのわがままだった。ヨンちゃんの文句も、心からの声ではないだろう。ヨンちゃんは、とても気のいいやつだということを知っているのは、ほかならぬ親友であるぼくなんだ。それらをひっくるめても、目の前の親友たちは、自らの危険も顧みないで、ぼくに付き合ってくれている。

でも、面と向ってそれを言葉にするのは、とても恥ずかしくて、代わりにぼくは、

「明日は、ぜったい世界樹の葉っぱを持って帰ろう。ヒメがぼくたちを待ってる！」

と、新たな誓いを言葉にした。リコとヨンちゃんは、そんなぼくの顔を見て頷き「おーっ！」と声をあげる。それは、さながら三銃士のようにも思えた。

18・工房（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

山の外れに、古びた家屋がある。家屋と呼ぶには、あまりにも小ぢんまりとしていて、瓦葺の屋根も、土壁もボロボロで、小屋と呼ぶ方が相応しく思えてくる。果たして、二十年前に見た「留守陶芸工房」はこんななりをしていただろうか、と記憶を辿っては見るものの、はっきりとは思いつけない。あの時は、あまりにも子どもだったし、それに夜だった。二十年も経てば、建物の外観は古くなるものだし、記憶にも齟齬が生まれるものだ、と納得しつつ、ぼくは敷地に足を踏み入れた。

小屋の傍らには、陶芸用の登り窯があり、今は聳え立つ煙突から煙が出ていなかった。それどころか、工房自体が熱を失ったようにひっそりとしている。声をかけるべきか、時間もおしているわけだから、早々にこおろぎ山へと向うべきかを、真剣に迷い始めたその時、小屋の端にある勝手口の扉が、がらがらと音を立てて開き、四十そこそこの髭面の男が現れた。

「おや？ お客さんですか？」

男はそう言うと、不思議そうにぼくの顔を見る。その男が、留守さんでないことは、すぐに分かった。だが、それが誰であるか思い至るには、少しの時間が必要だった。すっかりでっぷりとしてしまったヨンちゃんに比べて、それほど外見に差異はないとは言え、妙に似合う泥まみれの作務衣にも、バンダナのように頭に巻いた手ぬぐいにも、二十年前の少年の名残を残した面影は、一つもなかったからだ。

「あなた、伸由さんですよね？」

「ええ、そうです。伸由です……あなたは？」

訝るようなノブさんの視線に、ぼくは名を名乗って見せたが、逆に彼にとっても、大人になったばかりに面影を見出せなかったのだろう。やはり小首をかしげたままだった。

「ちょうど二十年前の今頃、一晩だけお世話になったんですが、覚えていらつしやいませんか？」

「二十年前……、ああっ！ 君、シュウくんかい？」

「はいっ！ そうです。その節は」

ぼくがお礼の言葉を口にしかけると、ノブさんはずいずいと近寄ってきて、ぼくの肩を力いっぱい叩き、人懐こい笑顔を向けてくる。「いやあ、すっかり大きくなっちまって、全然気がつかなかったよ！ いやあ、ごめんごめん。二十年前のことは良く覚えているよ。

あの子ども嫌いで気難しい師匠が、一晩とは言え、子どもを三人も預かるなんて、青天の霹靂かと思っただからね！」

「あの時は本当に、お世話になりました。留守さんは、今どこに？」

肝心の留守さんの姿が見えないことに、疑問を感じたぼくが問いかけると、ふつと風が舞い込むように、ノブさんの顔から笑顔が消えうせた。

「師匠は……十年前に他界したんだ」

「えっ？」

「無理がたたってね。全然陶芸家として認められることなく、この世を後にした。まだまだ教えてもらいたいことは山ほどあったのに、ぼくにこの陶芸工房だけを残して……」

がつくりと肩を落とした、ノブさんがちらりと、陶芸工房の母屋と登り窯に目をやった。

「それは、ご愁傷様でした」

「いやいや、十年前の話だ。今は、師匠の技に一步てせも近づき、師匠の果たせなかった、陶芸家として陶芸界に認められるため、独りで細々とやってるよ。どうだい？ 線香のひとつ上げていってやくれまいか？」

「ええ、もちろんです」

ぼくが頷くと、あの日と同じように、ノブさんはぼくを陶芸工房の母屋へと案内してくれた。

時計の針が、午後八時を示す。ぼくとリコ、ヨンちゃんの三人が夕飯をご馳走になって、お腹が満たされる頃、再び戻ってきたノブさんは、平らげられたお皿を見て、目を丸くした。

「よほどお腹がすいていたんだねえ」

そう言われて、少しだけ恥ずかしく思ったけれど、たしかにお腹はすいていた。恥を忍ぶには、ぼくたちはまだまだ子どもだったということで大目に見てもらいたい。

「本当は、お風呂に入れてあげたいところだけど、工房の風呂は薪風呂で、薪は全部登り窯に使うから、今はお湯を沸かせられないんだ。ごめんね」

「い、いいえ、全然大丈夫ですっ」

流石に、恐縮してしまっただけのぼくたちは、口々にそう言うと、何故か大人がするみたいに、ぺこぺこ頭を下げていた。それからノブさんは、ぼくたちを寢床に案内してくれた。普段は、師匠の留守さんが使っている部屋をぼくとヨンちゃんに、女の子であるリコには留守さんの部屋が与えられた。

「しばらくは、寝ずの番をやらなきゃいけないから、ぼくたちは部屋を使わない。だから遠慮しないで。ただし布団は、押入れにしまつてあるから、各自で引くこと。あと、トイレは廊下を出て、突き当たり。遅くならないうちに、寝るんだよ」

まるで、引率の先生みたいな口調で言うと、ノブさんは人懐こい笑顔を浮かべて、表へと去っていった。寝ずの番の意味は良く分かんなかったけれど、最悪野宿も覚悟していたぼくたちにとつては、ちゃんと屋根のある場所で、布団に包まって眠れることは、幸せの一言だった。

ぼくとヨンちゃんは、ノブさんに言われたとおり、遅くならないうちにさつさと眠り、一日の疲れを癒すことにした。明日、必ず、こおろぎ山にたどり着き、そして、葉っぱを持って帰らなきゃいけない。タイムリミットは刻一刻と迫っている……。

「電気、消すよ」

ヨンちゃんが、部屋の明かりの紐を引っ張る。

「ヒメ大丈夫だよな？ 明日、頑張ろうな」

ヨンちゃんの言葉の終わりと、部屋が真っ暗になるのはほぼ同時だった。それからは、静寂。夜の静けさが部屋を包み込んだ。そして、ヨンちゃんの僅かな寝息が聞こえてくる。それなのに、ぼくの目はぱっちりと冴えて、一向に眠くならない。

羊を数えてみても、二十四匹も数えれば飽きてしまう。そうするとやたらにヒメの苦しそうな顔だけが脳裏を過ぎつて、こんなところで眠っている暇なんかないんじゃないか、と焦りが生まれてくる。まずまず、眠れない。いつもなら、布団にもぐれば五分も経たないうちに眠れるというのに、今日に限っては、三十分過ぎても、一時間過ぎても、睡魔が訪れることはなかった。

どうしたものかと、困ってしまう。しかたなく、顔を洗うためにトイレに立つことにした。隣で眠るヨンちゃんを起こさないように、細心の注意を払いながら、そっと布団を抜け出す。襖戸をひらき、廊下に出ると、向かいの部屋が留守さんの部屋。即ち、リコが眠っている部屋だ。廊下の軋む音で、リコが目を覚ましたりしないよう、忍者よろしく抜き足で、廊下の突き当たりにあるトイレへと向った。汲み取り式のトイレからは、少しだけ鼻の曲がる匂いが漂う。そのトイレの扉の前には、洗面台があつて、ぼくは蛇口をひねると、勢い良く流れる水をすくつて、顔を洗った。山の井戸水は、夏の熱気など感じられないほど冷たくて、心地いい。

顔を洗い終わったぼくは、洗面台の傍にある手ぬぐいで顔を拭いた。ふと、視界に赤い炎が見える。一瞬、火事かと思って、ひやりとしたけれど、それは、洗面台の傍にある窓から見える、登り窯の炎だった。窯の前では、留守さんが額に汗しながら、薪を放り投げていく。

「寝ずの番つて……？」

ぼくは独りごちながら、部屋には戻らず、工房のあるほうへと向った。

そこは、土のにおいがする場所だった。それもそのはず、この工房で、さまざまな作品が生まれ、それが今まさに、窯の中で焼かれています。いいところなのだ。

「おや、秋人くんだったっけ？ どうしたんだい？ 眠れないのかい？」

しんと静まり返った工房の奥から、ひよっこりとノブさんが顔を出す。両手には、山ほどの薪が抱えられていた。

「あの、えっと。はい……」

ぼくが頷くと「そうか。慣れない場所じゃ、なかなか寝付けないものな」と言つて、ノブさんは優しく笑った。

「あの、ここつて、お皿とか花瓶とか作る工場ですよな？」

「工場？ そうか、工場か……。確かにそうだけど、でも正確には、工場じゃないんだ。ここで造られているのは、生活用品のお皿とかじゃない」

ノブさんの言葉に、ぼくはきよんとする。お皿と言えば、食べ物盛り付ける道具で、それ以外の用途は思いつかなかった。すると、ノブさんは、ぼくの頭に浮かぶクエスチョンマークを笑うように、声を立てる。

「つまり、芸術品つてことさ。ほら、絵とか音楽とかとおんなじで、このお皿きれいだなあ、とか面白い形してるなあとかって、目で見て楽しむためのお皿なんだよ」

と、言つてノブさんは、薪を床に置いてから、工房の隅に取り付けられた棚から、留守さんの作品と思しき、一枚のお皿を取り出して、ぼくに見せてくれた。

正直なところは良く分からなかった。ぼくには、お皿を愛でる感性は備わっていないのかもしれない。十歳の子どもにそれを求めるのも、滑稽な話だ。おかずを盛り付けるには、ひしゃげた形をしているし、青い模様は何だか食欲をなくしそうだ。これは、生活用品とするなら、B級品もいいところ。だけど、いろんな角度から見ると、違った形に見え、食欲を減衰させる青色の模様も、まるで宝

石のようにつやつやキラキラしている。それが、ノブさんの言うところの「芸術品」と言うことなのだろう。

「きみに分かるかな？ とてもいいお皿だろう？」

お世辞と言うわけじゃないけれど、はじめてみる芸術品のお皿に、ぼくはこくりと頷いた。だけど、何故かノブさんの表情はくもる。

「でも、中々芸術品としての陶芸の道は険しくてね。師匠も、もう二十年ちかく陶芸をやってるけれど、まだ一流の陶芸家としては認められていない。だから、普通のお皿や花瓶の方が、多く造っているのが現状だ。そうしないと、飢え死にするからね。背に腹は変えられない……」って、きみには関係ないことだね？」

お皿を手に、再びきよんとするぼくに、ノブさんは苦笑した。ぼくには関係のないことだけど、留守さんたちが、生活苦を味わっていると言うことだけは分かる。それなのに、夕飯までご馳走してくれた上、寢床まで貸してくれたのには、子どもながらに胸が痛んだ。

「どうして、陶芸家を辞めないんですか？ 生活が苦しいなら、お皿作るの止めて、他のお仕事をすればいいのに……」

ぼくが何の考えもなしに吐いた言葉は、ノブさんの苦笑いを誘う。今度の苦笑は、ぼくに向けられたものだった。ノブさんはぼくから師匠のお皿を受け取ると、ぼくの頭をわしわしと乱暴に撫でてから、
「それは、師匠に直接聞いてみるといいよ。ぼくは……ぼくは、師匠の陶芸の技に惚れている。だから、師匠が辞めない限り、ぼくは弟子で居続けるつもりだ」

と言った。でも、肝心の留守さんは、強面だし何だか不機嫌そう
で、正直に言えば怖い。

「大丈夫、師匠はああみえて、根はとても優しい人なんだ。きみは、師匠のお姉さん、春江さんに会ったんだろう？ 師匠は間違いなく、あの人の弟だよ」

ノブさんがそう付け加えたその時だった。表から、一際荒々しい声が届く。留守さんの怒鳴り声だ。

「伸由っ！ 何してる、さつさと薪を持って来いっ！！」

まるで雷が落ちたときのようなその怒鳴り声に、ノブさんはぴよんと弾かれて、すばやくお皿を棚に戻すと、また両手いっぱい薪を抱える。

「あの、ぼくお手伝いします。泊めてもらってるのに、お礼しなきゃ、お父さんとお母さんに叱られちゃうっ！」

咄嗟にぼくが言うと、ノブさんはいささか驚いたように、目を丸くしてから、また人懐こい笑みをぼくに向けた。

「きみは、いい子だね。よし、じゃあ、半分、師匠のところへ持っていくてくれるかい？ 師匠は、登り窯のところに居るから」

「はいっ！」

ぼくは元氣良く返事を返して、ノブさんから薪の束を受け取る。すると、杉の匂いがつんと鼻をついた。

20・留守さんの話

質素な仏壇は、本来この工房でなく、彼の生家などに置かれるべきものだ。しかし、それが、弟子とは言え他人の下にあるのは、彼が生家から絶縁された身であつたからに他ならない。ただ、小さな遺影に浮かぶ、留守冬男その人の顔は、二十年前に見た不器用なまでの仏頂面で、死んでも尚、生家に帰ることさえ許されない自分の人生を、悔いているようには見えなかった。

「神さまと言うヤツは、案外冷たい。師匠は、酒もタバコもやらず、ただ真摯に陶芸に取り組んでいただけだと言うのに、体調を崩してあつという間さ。生きていれば、今年で還暦だった……」

と、麦茶の入ったコップを持つて、ぼくの傍にノブさんが腰を下ろす。すっかり、師匠に似た風格を備えた彼は、懐かしさに目を細めながら、ぼくにお茶を勧めてくれた。

「夢叶うことなく、師匠は逝ってしまった。その後を継ぐのは、少しばかり怖くもあつたけれど、ぼくも師匠と同じく、陶芸の道を目指すため、家を飛び出した身だからね。帰る場所なんてここ以外にない」

ノブさんの言葉を聴きながら、ぼくは線香を沿え、静かに手を合わせる。

「手を合わせるのは、春江さんかぼくぐらいだったからね。今日は、君が来てくれて、きつと師匠も喜んでいるよ。ムツとした顔しながら」

確かに、留守さんは遺影のように、いつも不機嫌そうな顔をしていた。留守さんの第一印象はかなり悪く、リコとヨンちゃんも口を揃えて「怖い人」と言う。確かに、子どもの目線から言えば、怒っているようにしか見えず、声をかけるのも憚られるような人だった。だけど、ぼくは留守さんが間違いなく、優しい乃木さんの弟であることを知っている。あながち、ノブさんの言うのも間違いじゃない

だろう。目に浮かぶようだ。

「あれから、何度もコンペや展覧会に出品したりしたんだけどね。もともと人付き合いのキライな師匠だったから、結局その才能を認めてはもらえなかった。だから、ぼくはここで仇を討つことにしたんだよ。師匠の才能には遠く及ばないけれど、ぼくは師匠の技や感性を受け継いでいると思ってる。だから、ぼくが師匠に代わって、一流の陶芸家になってみせるってね……」

「及ばずながら、ぼくも応援させていただきます」

ぼくが言つと、ノブさんはあの頃と変わらない笑顔を、髭面の間に垣間見せた。

「そういえば、またどうして、わざわざ工房を訪ねてきたんだい？」不意に話題がそちらに向く。怪訝な顔をしているわけでもないし、ノブさんにも他意はなかったに違いない。しかし、またしてもぼくは口ごもる。医者として、夏八木の診療所にやって来た、とは言えない自分がいる。ノブさんは、そんなぼくの顔に差した翳りに気がついたのだろう、

「さては何かあった、と言う顔をしている。人間、壁に当たると、昔のことを思い出したくなるものだからね」

と、図星を突いてきた。察する、と言うことにかけては、殊に仏頂面の師匠の下で研鑽されたノブさんだ。いい加減なごまかしは、通用しないと、顔に書いてあるような気がした。

どこから話すべきか……。目的地はまだ先で、工房に長居するつもりはなかったのだが、恩人である、留守さんとノブさんには、訳を聞いて欲しいという気持ちもあったのかもしれない。半ば弱音を吐くようなものかもしれない。それでもぼくは、ゆっくりと重い息を吐き出して、これまでの経緯を語った。

ノブさんがどのような反応を示すのか、ぼくには皆目見当がつかなかった。話し終わると、ノブさんは音もなく、師匠の遺影に手を合わせ、そして、ぼくの方に向き直った。

「それでも、君が夏八木診療所に医者としてやって来たのは何故だ

い？ 医者として行き詰って尚、君はどうして医者でいるんだい？
答えはもう出ているんだろう？ ただ、それに気付くのが怖いだけなんだ」

あの白い浴衣の少年とは違う、深くそれでいて優しげな、二つの眼がぼくを見据える。一つは、ノブさんの、もう一つは、留守さんの遺影だ。

「十年ばかり、人生を長く生きているものとして、後輩たる君に、一つだけ……。師匠が君に教えたことを思い出すんだ」

ノブさんは、戸惑うぼくに、しっかりとした声で告げた。留守さんがぼくに教えたこと……。それは。

「ん？ 俺は、伸由を呼んだつもりだったんだがな……。ガキはさつさと寝る。明日、こおろぎ山へ連れて行ってやらねえぞ」

ノブさんから預かった薪を登り窯の前にいる、留守さんのところに持って行くと、留守さんは睨むような目つきで一瞥をくれた。思わずたじろいしてしまうが、手伝いたいと言いつ出したのはぼくだ。ただ、ムスッと口を真一文字に結び、窯の入りに口から噴出す炎を瞳に映しこむ留守さんの横顔は、とても怖かった。

「あの、眠れなくて……。それでお手伝いを。あのつ、寝ずの番つて、ずっと寝ないで窯を燃やすんですか？」

どうにか叱責から逃れたくて、興味があるわけでもないのに、会話の糸口として尋ねてみる。すると、以外にも、留守さんは顔をこちらに向けはしなかったものの、ぼくの問いかけに応じてくれた。

「そうだ。窯の温度が、一定に達するまで薪をくべ続けるんだ。そして、中の様子を確認しながら、陶器が焼き上がるのを待つ。それまでの三日間、寝てる暇なんかない」

「寝なくて、平気なんですか？」

「さあな。三日後にぶっ倒れてるかどうかは、神のみぞ知るってやつだ。それでも、いい皿が出来ればそれでいい。そんなことは、お前には関係ないだろう？ ……いや、関係あるか。心配するな、明

日ちゃんとお前たちを、こおろぎ山まで連れて行ってやる」

留守さんは、ぼくから薪の束を受け取ると、それを窯に放り投げた。火の粉がふわりと舞い上がり、焼け付くような熱風が噴出してくる。夏場、夜になれば気温が下がると言っても、やはり暑いことに変わりはない。それなのに、三日三晩窯の番をし続けるというのは、重労働以外の何者でもないと、子ども心にもわかる。

「あの……」

「まだ何かあるのか？」

「あの、その。どうして、留守さんはぼくたちをこおろぎ山へ連れて行ってくれるんですか？」

ぼくがそう尋ねると、留守さんは少しかり驚いた顔をした。それは、留守さんが仏頂面以外に初めて見せた、驚きの顔だった。

「何だ、連れて行って欲しくないのか？ 連れて行けと言いだしたのは、お前たちの方だろう？」

「そうだけど、その、見ず知らずのぼくたちの為に、こんなに忙しいのにわざわざ時間を割いてくれるなんて……」

「姉貴の頼みじゃ聞かないわけにもいかないだろう。長い間、影ながら俺を支え、助けてくれたのは、夏八木のみかん農家に嫁いできた姉貴なんだよ。だから、姉貴には、感謝してもしきれない。その姉貴が、お前たちクソガキをこおろぎ山まで連れて行ってくれと言うなら、イヤとはいえないだろう」

「お姉さんって、乃木さんですよね？」

「そうだ。乃木春江は俺の姉貴だ。昔な……昔、こんな話があった。今から二十年くらい前だ。大学生だったある男が、『安保反対』なんてわけも分からずに、声高に叫んでいた」

留守さんが、遠い昔を懐かしむような口調になった。

「その男は、姉の忠告も聞かず、テロまがいの片棒を担ぎ、とうとう親に勘当された。それでも、自分のやってることは正しいんだと、盲信し続け、終いには大学に立てこもり、警官隊に火炎瓶を投げつけた。その結果、男は逮捕され、じめじめした牢屋に入れられた。」

そして、四角い部屋の中で、ふっと思ったのさ。何をやっていたんだろうつて……。一月もしないうちに、テロリストの下っ端だった男は釈放された。だが、帰る場所も、行くべき場所も見失った男に夢も希望もなかった。失意のどん底だったんだな。そして、たどり着いた夏八木という寂れた街で、唯一の趣味だった陶芸を始め、やがて、陶芸家の道を目指した」

「それって……」

「俺の話だ。いつか、どうしようもない俺でも、世間さまに認められるようになりたいなんて、叶うかどうか分からない馬鹿な夢に、師匠と慕ってくれる伸由を巻き込みながら、もう二十年だ」

仏頂面に似合わないほど、留守さんは饒舌であっただけで、それでも、何処か自嘲するように鼻で笑う。

「どうして、小父さんは、二十年も陶芸を辞めずに続けているんですか？ 伸由さん言っていました。陶芸家をやるのも楽じゃないって

……」

「さあな。俺にも良く分かん。ただ、世間さまに認められたいなんて、そんなの前口上みたいなもので、その実、こうして陶芸をやっていることが、好きだから、辞めたいと思わないんだろう」

まるで他人事のように、留守さんが答える。

「好きなことから逃げ出したら、本当の意味で自分はダメな人間になってしまう。自分がそれを使命だと信じ、逃げないことが大切なんだ。だから、俺は三日の寝ずの番も苦ではない。分かるか？ クソガキ」

「分かったような……分らないような」

「だろうな。だが、お前も大人になったとき、いつか壁にぶち当たる日が来るかもしれない。その時、自分が本当にやりたいこと、したいことから、逃げ出したら、お前がお前である意味がない」

「ぼくが、ぼくであること？」

「そうだ……分からなくても、覚えておけ。人生の落伍者一歩手前で踏みとどまった大人からの忠告だと思って。それでもって、伸由

呼んできて、さつさと寝る」

そう言つと、留守さんは元の怖そうな顔に戻り、工房の方を指差した。この時は知らなかったのだけど、ノブさんは、ぼくと留守さんの会話を工房の中から聞いていたらしい。すっかり、出て行くタイミングを逸していたノブさんと入れ替わるように、ぼくは登り窯を後にした。部屋に戻ったところで、眠れる自信はなかったけれど、ちゃんと寝ておかないといけない、と思ったからだ。

少し衣服についた、煙の匂いを感じながら、忍び足でノブさんの部屋に戻ると、ヨンちゃんが心地よさそうに、くう、といびきをかいていた。

20・留守さんの話（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

21・再出発

「今年も残暑厳しくなりそうだ……」

ノブさんが、夏の夕焼け空を見上げて言った。赤と青が交じり合う、絶妙のコントラストが、ある種幻想的にたなびく雲を沿えて、夏の夕暮れに相応しい鮮やかさが見て取れた。

ここに足を運んで、一時間以上が過ぎ、思わぬ長居をしてしまったことに、多少焦ってしまう。そこで、一刻も早く、世界樹のもとへと急ぐべく、お暇を請うことにしたのだ。靴を履くべくに、ゆっくりしてあげばいいのに、という顔をノブさんは差し向けてきた。普段、来客も乏しいのだろう。その気持ちも分からなくもないが、役場の担当の女性……昼間に、電話口で話したあのちよつと神経質そうな声の女性に、夏八木での住まいへ案内してもらう、約束の間がある。こちらとしては、医療ミスをしたばかりの身の上を預かってもらう、という立場故に、いきなり遅刻するのは気が引ける。しかし、すでに、空は夕刻の刻限を示し、おそらく、遅刻は免れないだろう。それでも、ぼくは世界樹のもとに辿りつきたい。そういうのを、傲慢と呼ぶことは分かっているつもりだ。

「あわただしくして、すみません。今度、お邪魔するときは、是非ゆっくりさせていただきます」

靴を履き終えたぼくは、名残惜しむようなノブさんに、手を差し出した。ノブさんは、求めに応じるかのように、固くぼくの手を握り締め、握手を交わす。あの頃より一回りも二回りも大きくなったぼくの手も、ごつごつとした職人の手になったノブさんの手も、お互いに歳月を刻んでいた。

「その時は、皿の一つでも買って行ってくれると嬉しいんだが……」
冗談めかしてはにかむと、ノブさんは言った。ぼくも、笑みを返す。愛想笑いのつもりではない。真剣に、医師として、この街に根を下ろすのであれば、独り暮らしとは言え、そういった生活用品も

必要だろう。しかし、それもこれも、ぼくが医師を続ける覚悟があるのか、その決意に掛かっているといっても過言ではなかった。

答えは出ているのだろうか？ 分かっている。道は一つしかないことくらい。それでも、ぼくはまだ迷っている。優柔不断だと罵ってくれても構わない。ただ簡単に結論を下していいことではないのだ。自分が使命と思っていることから逃げたしたら、人は本当の意味でダメな人間になってしまう。二十年前、彼自身は教訓のつもりでいったのではないにしろ、留守さんが教えてくれたその言葉の意味どおりに、解するならば、医者とはぼくにとって使命なのか。

二十年前、ぼくは何を思い、何のために、医者であることを目指したのか……。

「山の陽はすぐに暮れてしまう。道中気をつけて。まあ、あの頃はこんなチビだった君も、すっかり大人になった。心配することもないだろう。帰りは、こおろぎ山の反対側を下りていくといい」

握手の手を離れたノブさんは、こおろぎ山の方角を見つめながら、そう言った。

「反対側……ですか？」

「ああ。二十年前と違い、夏八木にも、道路整備事業とかなんとかという、お役所の仕事が行ってきてね、こおろぎ山の北側。つまり、こちらからとは反対側に道が整備されているんだ。アスファルトの立派なやつ。一応、こおろぎ山は、夏八木にある数少ない観光スポットだからね」

「観光スポット。そんな風に捉えたことは、一度もなかったです」
「そりゃそうさ。世界樹と、君たちが呼んでいたあの木が一本、どん、と生えてるだけ。あとは、夏八木を一望できる眺望しかないのは、君だって知ってるだろう？ とにかく、来た道を引き返すよりは、新しい道を下りた方がラクだ。一刻半もあれば、駅前通りまで戻ることが出来るから」

にこやかなノブさんに、慇懃に頭を下げたぼくは、ポストンバッグを片手に、留守さんの、改め伸由さんの工房を後にした。

二十年という月日はそれほど短いものではない。だから、子どもの足とは言え、あの日、丸一日半をかけて歩いた、長い道のりも、たった一時間ばかりの道のりに変わっていても不思議ではない。それだけ、この街は外見以上に、変わってしまったのだ。ヨンちゃんの家もコンビニになり、通いなれた小学校も新たな校舎になり、そして、あの日仏頂面の奥に優しさを垣間見せた陶芸家は、もうこの世にいない。

それでも、あの日歩いた道は、確かにここに残っている。変わったもの変わらないものが、ある種矛盾なく交じり合った場所を、心に矛盾を抱えたままのぼくが、辿る。そのことのほうが不思議なこのように思えた。

二十年前、ヒメを救うための旅も、二十年後失意のぼくが辿る旅も、もう直終わりを迎える……。その時、ぼくは心の矛盾を解き放つことが出来ているのだろうか？ それは、まだぼくにも分からないことだった。

寝苦しかったはずが、いつの間にか寝息を立てている。ということは、良くある話。そうだったときは、決まって寝坊してしまい、母に叩き起こされることが多かった。だけど、その日は違った。まるで朝日が昇り始める刻限が分かっているかのように、自然とまぶたが開き、体にエンジンがかかる。「あと五分だけ」という単語は、思いつかないくらい、すつきりとした目覚めに、ぼく自身が驚いた。もっとも、全身に漂う疲労と倦怠感はあったものの、そんなものの布団から起き上がれば、すぐに吹き飛んでしまう。ぼくは、とりあえず隣で眠るヨンちゃんをゆすり起こした。感心できない寝相のヨンちゃんは、すっかり布団も跳ね除けて、何故か枕を抱きしめている。その変な格好に思わず笑い出したくなっただけで、声を立てるわけには行かなかった。

「起きて、ヨンちゃんっ」

肩口を強くゆすってやったけれど、ヨンちゃんはムニャムニャと

口元を曲げながら目を覚まさない。蹴っ飛ばしてやるのも手だけど、昨日崖から落ちそうになったばくを救ってくれた、命の恩人たる親友に暴力は、それこそ感心できない。

よし。ぼくは、独りで会釈すると、そっとヨンちゃんの耳元に顔を近づけた。

「おい、杉浦っ！！ 何を寝とるかっ！ 授業が真面目に受けられないなら、廊下に立ってろっ！！」

なるべく大人の男の人の声に近づけるべく、低い声を作ってヨンちゃんの耳元で声を荒げた。科白は、担任の先生の真似。いつも、授業中にこくりこくりと、舟を漕ぐヨンちゃんは、担任の先生にそう言っただけだ。

案の定、ヨンちゃんは、「ごめんなさいっ！！」と口走って、飛び起きる。そして、傍でクスクスと笑うぼくの顔を見ると、わなわなと震えた。

「なんだよう、シユウちゃんっ！」

「しっ、大きな声を出さないっ。リコ、起きてるかなあ……」

怒るヨンちゃんを窺ってから、ぼくは襖戸の向こうを見遣った。

廊下を挟んだ部屋では、リコが寝ているはずだ。女の子の部屋に飛び込むのは、一応男としてマナー違反だということは分かっている。そんなぼくに怪訝な顔を向けるヨンちゃんを他所に、どうしたものかと思案していると、不意に襖が開き、当のリコが顔を出した。

「起きてるわよ。誰かさんと違って、わたし、早起きだから。でも、早起きして、どうでもいいことに気付いたんだけど……」

「気付いたことって何？」

「ラジオ体操。今日の分、サボることになっちゃうよね。皆勤賞狙ってたのに」

ホントにどうでもいいことだ、と思ったけど、元気印の彼女にとって、ラジオ体操は重要不可欠なものだということを知っている以上、余計な口を挟めない。

「よし、みんな揃ったね。それじゃ、出発の準備しようよ」

と、ぼくが腰を上げると、やはりヨンちゃんが怪訝な顔を向けてくる。

「行ってくて、あの怖い小父さんに、世界樹の所まで連れて行ってもらうんじゃないの？」

ヨンちゃんの言う、怖い小父さんとは留守さんのことだ。本当は、乃木んの計らいで、留守さんに送って行ってもらう予定だった。もちろん当初は、乃木さんが言ったとおり、子どもとして大人の厚意に甘えるつもりだった。だけど、昨日の夜、気が変わった。

いくら子どもだからと言って、留守さんがとても忙しくしているのを知ってもなお、甘えることは出来なかった。遠慮というより、むしろ、世界樹へは、ぼくたちの足でたどり着かなければいけない。これは、ぼくたちが最初に決めたことだ。留守さんには、登り窯を監視し、素晴らしいお皿や花瓶を作るという仕事がある。そして、ぼくたちは、どんな病気にも効くという世界樹の葉っぱを取って、病に苦しむヒメを助けなければならない。その二つは、全く別のことなのだ。

そういうことを、ヨンちゃんに話すと、ヨンちゃんは少しだけ不安がりながらも、了承してくれた。ただ、リコが同じ考えだったのは、驚きだった。

「だって、昨日、登り窯の温度が上がらないって、ノブさん言ってたでしょ？ わたし、お父さんから聞いたことがあって、登り窯って一度火を入れると、三日三晩つきつきりじゃないといけないんだって。そんな忙しいときに、わがまま言ったらいけないもの」

曲がったことが大キライで、真っ直ぐな性格のリコらしいといえば、リコらしい意見だった。

ぼくたちは、なるべく音を立てないように、布団を押入れに戻し、卓袱台に書き置きを残すことにした。一宿一飯のお礼と、何も言わず出発することへのお詫びを、ぼくたちの中で、以外にも一番字のきれいなヨンちゃんを書いた。

それから、工房を抜け出す。幸い、登り窯は工房の裏手に位置し

ている。ぼくたちがこっさり抜け出したとしても、火の番をする、留守さんやノブさんが気付くことはなかった。

ぼくは、玄関を出た後、裏手に向って深々とお辞儀した。それに倣って、ヨンちゃんとりこも頭を下げる。ありがとうございました、を胸の内で思い描きながら、ぼくたちは工房から立ち去った。

一路でこぼこの道を歩き、山道へと戻る。ヨンちゃん言葉を借りるならば、こおろぎ山への道筋はこうだ。

「まず、地獄の門をくぐりぬけ、死神の道を辿り、荒れ狂う大蛇の川を越える。そして、果て無き平原を歩き、谷を越えた先に目指す、こおろぎ山があるんだ」

地獄の門が、神野たちが待ち構えていた線路下のトンネルならば、死神の道はあの鉄橋。そして、大蛇の川は鉄橋の下をくぐる川。そうすると、残る葉、果て無き平原と、谷。その旅程の先に、ぼくたちが目指す「世界樹」があるんだ……。急がなきゃ、時間はそれほど残されていない。

誰ともなく、ぐっと決意を胸に、ぼくたちは頷きあって山道を歩き出した。

21・再出発（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

22・ミートパイの男

夏八木は、いくつかの山々に囲まれた、海に面さない、内陸部の街である。主な産業は、菜種油の製油業と、みかん栽培。いずれも、他府県のそれには及ばず、細々とやっている、本当に「田舎」という二文字が似合う街でもあった。それは、二十年の歳月を経ても代わりはない。大手量販店が立つわけでも、田舎の風景に似合わない近代的なビルディングが聳えるわけでもない。代わりに、不動の山々が、街を取り囲むように聳えているのだ。

北に、蛇^{へび}円^{まる}山、北東に緑^{みどり}山。南に、一際大きな、双^{ふた}山。そして、南西にこおろぎ山がある。こおろぎ山の正式な名前は、単^{ひとえ}山という隣接する双山が、ぽこぽこと峰を築く山なのにあいして、まるでこおろぎが横たわっているかのような一瘤の山なので、単山というらしい。もっとも、地元住民には「こおろぎ山」という名称の方が通っている。一方、双山は「みかん山」ともよばれている。その由来は、日当たりのいい山の斜面にみかん農家があるからで、季節がらともなれば、色づいたみかんの実が、畑を染めていくことに由来している。

二十年前、こおろぎ山へ至る道筋は、二つあった。ひとつは、県道沿いに側道へ入り、双山の麓を迂回して、こおろぎ山へ入るルート。その途中には双山へ入るための、いくつかの獣道のような小さな上り口があつて、ぼくとはぐれたりコたちが追いかけてきたのは、そのうちの一つ、ということになる。

そして、もう一つは、線路を渡り双山の山道を登って、連なるこおろぎ山へと向うルート。つまり、その当時直接こおろぎ山へ至る道はなかった。

距離にすれば、後者の方がより近い。そのため、ぼくたちは、線路を歩くという愚を冒してまでも、双山を登るルートを選んだのだ。もっとも、今更になつて思えば、迂回ルートである前者と、山道を

せつせと歩くことになる後者を労力と比較して、どちらが近かった
とは言いがたく、また、ノブさんが言ったように、現在は直接こお
ろぎ山の頂上に至る、三本目のルートが存在している。

ちなみに言えば、三本目のルートは、こおろぎ山の北側から、直
接、街を分断するように走る県道に繋がっているため、側道を歩く
迂回ルートよりも、何倍も近道となっている。それについて、今言
及したところで、当時はなかったわけだから、仕方がないことだ。

留守さんの工房を黙ってでた、ぼくたちは、そんなことを考える
こともなく、ひたすらに山道を登った。あの頃の歩幅よりも、今の
歩幅はずいぶん広い。同じ百メートルを歩くにしても、十歳のぼく
と、三十路のぼくでは、速度がまるで違う。だが、その反面、決意
と使命を感じていたあのときは、足取りが違うことを、ぼくは感
じていた。

工房から、山道を歩けば、やがて森が開けて、ただっ広い野原に
出る。ヨンちゃんの話に出てきた、果て無き平原だ。もちろん「果
て無き」というのは、誇張された表現であって、果てがないわけ
ではない。当たり前だ。ちょうど、その平原は、双山と単山の間にあ
る野原で、ぼくは、二十年前と同じように、スキの生えた野原を
ひた歩いた。

その先にあるのは、こおろぎ山。目指すべき場所だ。

「ずっと喋ってないと、胸の辺りがムカムカする」

と、言い始めたのはヨンちゃんだった。あたりは、ぼくたちの腰
の辺りまであるようなスキ野が広がる。山道はまだ続いていて、
野原を真っ直ぐに走っていた。

確かに、留守さんの工房を出てから、ぼくたちはずっと黙りこく
ったまま、この「果て無き平原」までやって来た。疲れていたワケ
ではなく、楽しい話なんてするだけの余裕がなかった。だって、こ
うしている間にも、ヒメが苦しんでいたらどうしよう、と心の中が
焦るばかりなのだ。すると、足はどんどん足早になり、比例するよ

うに、口は閉ざされてしまう。

「わたしも……」

以外にも、ヨンちゃんの意見に、リコが賛同する。どうやら、ぼくの焦りが伝播して、二人とも口を重くしていたのかもしれない。そう思うと、少しだけ悪い気がした。

「ねえ、ヨンちゃん。なにか面白い話をしてよ」

ぼくは乃木さんから貰った麦藁帽のひさしを少し上げて、ヨンちゃんに提案した。ヨンちゃんは、しばらくの間、うんうんと小首をかしげながら、しばらくしてから急に声を潜めた。ヨンちゃんお得意の、講談師の真似ごとだ。

「これは、ある男の話……。その男の、骨と皮ばかりで出来ている痩せ細った体は、見るからに不健康そのものを物語っているかのようだった。だが、彼は無類の大食漢だった。ある友人は『象の胃袋を持つ男』とあだ名で呼んだし、べつの友人は『ブラックホール』と呼んでいた」

「ヨンちゃんみたい」

先頭を、いつの間に摘んだのか、ススキの穂を旗のように振り回しながら歩くリコが言う。確かに、見た目は痩せぎすが、人一倍食の太いところはヨンちゃんそっくりだ。しかし、さすがのヨンちゃんも、象の胃袋を持っているわけではない。

「太らない体質ってやつだよ。ほら、テレビで良くやってる、大食い選手権のチャンピオンとかって、ほとんど痩せている人ばかりじゃない」

と、ぼくが言うと、何故だかりコは妙に納得した顔をして、こくこくと頷いてみせる。そんなぼくたちに、「話の邪魔をするな」と言わんばかりの視線を向けたヨンちゃんは、話を続ける。

「だけど、大食漢の彼にも、好きなものと嫌いなものがあつた……。彼は、ミートパイが好きで、野菜が大嫌いだったんだ」

「野菜って、全部？」

「そうだよ、リコちゃん。俺は、ちゃんとお野菜も残さないからね。」

その男とは違う」

「はいはい。それで？　大食漢の男の人がいたってだけのお話なの？」

「そんなわけないじゃん。っていうか、話の腰を折りまくってるのは、リコちゃんだからね……。そんな日、男は伯母の還暦のパーティーに招待された。小さい頃から慕っていた伯母のパーティーなら、欠席するわけには行かない。だけど、困ったことに、伯母は野菜が大好きで、ミートパイが大嫌いだった。パーティーの食卓に飾られるのは、野菜尽くしのメニュー」

「うわあ。もしも、ぼくの嫌いな納豆尽くしのメニューだったら、我慢できないよ」

「そ、シュウちゃんの納豆嫌いと同じくらい、その男にとっては野菜尽くしのメニューが、地獄の食卓に思えたんだ。まず、前菜の、レタスとトマトのサラダ。そして、人参スープとともに運ばれてきたのは、大根のステーキ。真っ白な大根に、似合わない濃厚なタレ。それなのに、ひとくち口の中に放り込めば、大根特有の辛味が広がる。伯母の手前、粗相をするわけにはいかず、男は吐き出したい気持ちを抑えながら、死ぬほど大嫌いな野菜を食べた。そして、男は願ったんだ。もしも、この世の食べ物すべてが、大好きなミートパイで出来ていたら、こんなに辛い思いをしなくて済むのにつて」

そう考える気持ちは分からなくもないけれど、この世のすべてが、ミートパイというのは、少しだけいやな気がした。ただ、その男にとっては、野菜を食べるくらいなら、この世の食べ物全部ミートパイで出来ていたほうが、いいのかもしれない。まあ、そのあたり、ヨンちゃんがどこから仕入れてきた、作り話の世界。ここは、黙って拝聴するでしょう。

「次々と運ばれてくる、野菜のフルコースに目を回しながら、ほとんど味わうこともなく飲み込み続けた男の前に、ついにとどめの一皿が運ばれてくる。なんと、野菜で出来たジェラートだ。もはや、野菜の『や』の字すら見たくない彼は、昏倒寸前だった。その時つ

！！」

「ばはんつ、と効果音でも入りそうな勢い。」

「男の前に、怪しげな魔法使いが現れた。魔法使いは、男の傍まで近づくところ言った。『お前の望みをかなえてやろう。世の中すべての食べ物ミートパイに変えてやる』。もちろん、二つ返事で男は了承した。そして、次の瞬間、食卓に並べられた食べ物がすべてミートパイになった。それどころか、伯母の家の冷蔵庫の中も、町中の、いや、世界中のありとあらゆる食べ物が、ミートパイになってしまった」

「わわっ、じゃあ、わたしの好きな、イチゴのケーキも！？」

と、リコ。

「イチゴのケーキどころか、家で売ってる駄菓子も、何もかもだよ。男にとつては、天国みたいな世界だった。だって、世の中の食べ物すべてが、大好きなミートパイなんだから。男は喜びまくって、飽きるほどミートパイを、来る日も来る日も食べまくった。そうしたら、あれほど痩せてたはずの男も、流石にどんどん太っていった、風船みたいに膨らんだ」

「ヨンちゃんは、両手を使って丸々と太った男の姿を現して見せた。当のヨンちゃんは、ガリガリに痩せている。二十年後、そのヨンちゃんが、話の中に登場した男のように、丸々と太っているとは、その時誰も想像できなかったに違いない。」

もつとも、ヨンちゃんの話はそこで終わりじゃなかった。

「そして、一年が過ぎ、ミートパイに囲まれて毎日幸せに暮らす、痩せぎすな男改め、ぶよぶよに太った男のもとに、あの魔法使いが再び現れた。男は、魔法使いにお礼を言った。すると、魔法使いは、ニヤリと笑ってこう言ったんだ。『こちらこそ、こんなに丸々と太ってくれてありがとう。これでようやく、ワシも食事にありつける。お前はずいぶんと美味そうな魂をしているが、いかんせん骨と皮ばかりで、食い手がない。だから、お前の大好きなもので世の中をあふれさせて、お前をぶよぶよに太らせたのだ。そう、家畜の豚と一

緒だよ。まあ、今のお前の姿は、豚にも劣るがな』と」

急激に話の展開が変わり、ぼくもリコも固唾を呑む。

「男は、魔法使いにそういわれて、鏡を見た。そこに映るのは、醜く太った、哀れな男の姿。今更、魔法使いが悪い人で、食べるために男の願いを聞き届けたのだということに気付き、ひどく後悔した。だけど、もう時遅く、魔法使いは見る見るうちに大蛇に姿を変え、あつという間に男を丸呑みしてしまった。そして、魔法使いの胃袋の中で、じわじわと溶かされるのを待ちながら、伯母が『ミートパイばかり食べないで、野菜もちゃんと食べなさい』といていたことを思い出して、泣いた」

ちゃんちゃん、と締めくくったヨンちゃん。ぼくとリコは、あまりにもあつけない幕切れと、救いのない終わり方に、少しばかり、呆氣に取られてしまった。

「どお？ 怖くない？ この話」

と、ヨンちゃんは言うけれど、実のところ、昨日の夜、白い浴衣を着た謎の男の子に殺されそうになった身としては、あんまり怖くない。むしろ、荒唐無稽さに苦笑すらしてしまいそうになる。リコもさほど怖くなかったのか、ススキの穂を振り回しながら「うーん、どうだろ」と笑う。

「そっかー、取っておきの話だったんだけど……。じゃあ、もう一つ、取って置きの話をしてあげる」

「いくつ取っておきがあるのよ」

ぼくがツツコミを入れる前に、リコが言う。だけど、ヨンちゃんは気にする様子もなく、次の話を始めた。

22・ミートパイの男（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

23・水の神さま

「これは、ウチのお祖父ちゃんが体験した話だ。今から、六十年くらい昔。まだ夏八木には、県道も電車も走ってなかった。あるのは、田んぼだけ。いまよりずっと、ずーっと田舎の町だったころ」

ヨンちゃんはそう前置いた。今から六十年も前と言われても、今より田舎の夏八木を想像することは難しい。想像力に乏しいというよりも、知識が足りないだけだ。なので、ぼくは頭の中で、目の前に広がるススキ野を、田んぼに置き換えることにした。

「ところで、シュウちゃん、リコちゃん。なんであの川が『大蛇の川』って言うか知ってる？」

突然、ヨンちゃんは、ぼくたちに話を振ってくる。

「それは、ヨンちゃんが、名づけたからでしょ？ 死神の道とか、果てなき荒野とか」

「ネーミングセンス悪いよね」

リコとぼくは、お互いに顔を向き合わせて笑った。ヨンちゃんは、少しばかり頬を膨らませながら、

「確かに、それは俺が名づけた名前だけど、大蛇の川と世界樹を名づけたのは、ずっと昔の人たちだよ」

「そうなんだ。てつきり、ヨンちゃんが名づけたんだと思ってた。

だって、世界樹って、ヨンちゃんの好きなテレビゲームに出てくる名前じゃん」

と、ぼくが返すと、ヨンちゃんは深く溜息を付いて、「夏八木っ子が聞いて呆れるよ」とぼくを窘める。

「確かに、ゲームに出てくる樹の名前も『世界樹』だけど、こおろぎ山のそれとは違うんだ。こおろぎ山の頂上にあるその樹には、世界中の神さまが宿ってるって言い伝えがある。だから、その葉っぱはどんな病気にも効くんだよ」

「世界の神さまが宿る樹……だから『世界樹』か。ステキだね」

感慨深げに言ったのは、リコだった。女の子らしく、そういう口マンチックな言い伝えには、興味がそそられるのだろう。

「そう。俺たちが生まれる、ずっと前からそういう名前なんだよ。おっと、脱線するところだった。で、大蛇の川って言うのも、夏八木に伝わる古い言い伝えからその名前が付いた」

「古い言い伝え？ あの大蛇、うねうねしてて蛇みたいだから、じゃないの？」

「シュウちゃんなら知ってると思ってたんだけど。ま、いいや。その昔、あの川の底には巨大な蛇が棲んでいたんだ。だから、『大蛇の川』って呼ばれてる。それは、蛇というより、龍と呼んだほうがいいかもしれない。ほら、ヨーロッパの龍みたいにトカゲっぽいじゃないくて、中国や日本の龍って、蛇そっくりでしょ？」

確かに、由緒あるお寺の天井に描かれていたりする、龍の姿は、によるによると細長い蛇に似た姿をしている。

「べつに、怖い話じゃなくていいんだけど……」

リコが振り向きざまに、呆れた顔をする。何か話をして、とは言ったけれど、別に怪談を求めているわけじゃない。すると、ヨンちゃんは「怖い話じゃないよ」と言って、話を元に戻す。

「それで、話は元に戻るけど、うちのお祖父ちゃんがまだ、俺たちみたいに子どもだった頃、大蛇の川には、小さな吊橋が一本しかなかった。明治時代に作られた橋で、もうあちこちがボロになっていて、今にも切れそうなその橋を、お祖父ちゃんは怖がってた。でも、橋を渡らなきゃ、街の反対側にはいけない。ちょうどその日、お祖父ちゃんはお祖父ちゃんのお母さん、つまり俺の曾祖母ちゃんおばあちゃんにお使いを頼まれていた。お祖父ちゃんは、恐々とつり橋を渡ったんだ」

そう言って、ヨンちゃんはフラフラとした足取りをして、吊橋の不安定さを体で表現する。

「吊橋は、一步步くたびに、ぎしぎしと音を立てる。それは、まるで、橋が悲鳴を上げているみたいだった。お祖父ちゃんは、お使い

の荷物をぎゅっと抱きしめて、橋を渡った。その時だった！ 橋のツルがみしみしと音を立ててちぎれたんだ」

「ひゃっ！」

と、リコが女の子っぽい悲鳴を上げる。あ、リコは女の子だから、いいのか。

「崩れた橋と一緒に、お祖父ちゃんは今川へまっ逆さま。そう言や、俺たちも川へドボンしたわけだから、奇遇だよな」

「川に落ちたヨンちゃんの祖父ちゃんはどっちなっちゃったの？ まさか……」

「そんなわけないだろ、シュウちゃん。祖父ちゃん死んでたら、この杉浦四郎さまは、この世にいないって」

ヨンちゃんの言葉に、それもそうかと、ぼくは頷いた。ヨンちゃんは、「お祖父ちゃんは、泳ぎが得意じゃなかった。杉浦家の人間は、代々陸育ちなんだよ、うん」と、自分で自分に言い聞かせるかのように言つと、話を続けた。

「こんなところで溺れ死ぬなんてイヤだって、必死にもがいたけれど、川の流れは思ったよりも速い。すぐに力尽きて、ボコボコと水中に沈んでいく。その時、お祖父ちゃんの足を何かが強く引っ張った。ああ、死神が呼んでるんだなって、お祖父ちゃんは半ば諦めかけたらしい。だけど、それは、お祖父ちゃんをぐんぐん引っ張って、みかん畑の傍の岸に運んでくれた。そして、意識を失う直前、水面をスイスイと泳ぐその姿を、お祖父ちゃんは見たんだ」

「それが、大蛇だったの？」

ぼくが尋ねると、ヨンちゃんがこくりと頷いた。

「夏八木の川には、水神さまが棲んでいる。その大蛇はきっと水神さまだったんだろうって、お祖父ちゃんは言ってたよ」

水神さま、と言う言葉に、ぼくは乃木さんの言っていた言葉を思い出していた。鉄橋から川に飛び込んだあと、ぼくは水中で何かに引っ張られた。その後すぐに気を失ったけれど、奇しくもヨンちゃんのお祖父ちゃんと同じように、みかん畑の傍の岸に流れ着いた。

「なんだよ、シュウちゃん。信じてないって顔してる。そうだよな、シュウちゃんは、お化けとか信じてないもんね。サンタクロースだって、信じてないくらいだから」

ヨンちゃんが、ジト目をこちらに向けてくる。慌てて、ぼくは否定した。信じたくはないけれど、ぼくも川で溺れて気を失い、そして助かった。ヨンちゃんのお祖父ちゃんとおなじ身の上。幽霊だとか、神さまだとかは信じていないけれど、それが大蛇であるか水神さまであるか、それとも、たまたま川の流れがみかん畑の傍の岸に向っているのか、いずれにしても、ぼくはここにいる。その偶然は、確かに存在しているのだ。それを、神さまと呼ぶのなら、そうなのかもしれない。

ただ、それと、サンタクロースは一緒にすべきじゃないと思うと、自然に苦笑いがかみ上げてきた。

「ヨンちゃん、将来、小説家になったら？」

苦笑いをかみ殺すためにそう言う、ヨンちゃんはつんとそっぽを向く。

「俺は、祖母ちゃんの駄菓子屋を継ぐの。そうしたら、毎日お菓子食べ放題だから。シュウちゃんにも分けてあげるよ」

なんと、理想の小さなことか……と十歳のぼくが思うはずもなく、ご相伴に預かることが出来るなら、それもありかと思う。子どもにとって、お菓子の山は、海賊が探し当てる財宝にも等しい、お宝だった。サラリーマン家庭の子としては、駄菓子屋の孫息子というのは、ある意味で、羨望の対象でもある。もつとも、店をすると言うことが、安易なものでないことを、この当時のぼくたちは知らなかった。

事実、二十年後の杉浦家の駄菓子屋は、ヨンちゃんの経営するコンビニエンスストアに変わり、ご相伴に預かったのは、五百ミリリットル入りのペットボトル・ティーだけだ。

結局、子どものうちは、夢を見るだけならタダなのだ。ならば、自分はどうか。十歳の野崎秋人は、どんな夢を持っている？

留守さんの言った、「自分のしたいこと」とは一体何か、見定めることは出来ているのか？ そんなことを、ススキ野を歩くほうが考えているはずもない。それもまた、子ども故だ。一見、思慮深そうに見えて、その実、思慮深くない。風に揺れるススキの穂とおなじ、ただ風に身を任せていた。きつと、世界樹野葉っぱを持ち帰るその時まで……。

「シュウちゃん、ヨンちゃん！ あれっ！！」

唐突に、リコが右手にしたススキを指し棒よろしく掲げると、正面を示した。話に夢中になっていたばかりたちも、歩みを止めて、前方に目をやる。ススキの原っぱを走る道は、双山と単山、つまりみかん山とおろぎ山の間に横たわる谷で終わっていた。

「吊橋だ」

と言ったのは、ヨンちゃんだった。小さな吊橋。金具でしっかりとめてあるとは言え、風が吹くと、ゆらりゆらりとするそれが、子どもの眼にはとても恐ろしいもののように映った。そして、先ほどまで、吊橋の話をしていたためか、その奇妙な符号は、ミートパイ男の話よりも、ずっとずっと怖かった。

「ねえ、シュウちゃん、あそこに見えるのって……」

リコが、おろぎ山の頂上を指し示す。ちょうどぽっこりとしたおろぎの背中のような形をした山の頂上。すっかり、南の空高くに上がった太陽の光が眩しいけれど、それは、はっきりと見えた。なぜなら、おろぎ山山頂付近は、木々がなく、草原が広がっているため、一際一本だけ生える木が目立つのだ。

「あれが、世界樹」

ぼくはぼつりと呟くように言った。

「そうさ、あれが神さまの宿る樹『世界樹』だよ」

と、ヨンちゃん。ついでリコが言う。

「もう少しだね。でも、その前に、この橋を渡って、あそこまで登らなきゃ。結構斜面きつそうだよ。最後の関門ってヤツ？」

「行こう。ヒメはぼくたちを待ってるよ」

ぼくは二人に向って頷き合わせると、意を決して、吊橋に足を踏み入れた。

23・水の神さま（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

24・吊橋

双山の中腹西側に広がる、広いススキの野原を越えると、単山との谷を結ぶのは、一本の脆弱な吊橋だけだ。橋脚を設置するには、あまりに高さがあるため、その谷に吊橋が取り付けられたことは、なんら不思議なことではない。ただ、山間やまあいの谷には、ごうごと唸る風が舞踊る。

この国には「夕風」と言う言葉がある。夕方になると、風が止み、まるで海に波が消える風のように静かになることからそう呼ばれる。夏八木にもそういった時間帯がある。しかし、山間部ともなれば事情は違う、と言うことなのか。山風は夕刻になっても、止む気配はなかった。

眼前で、ぎいぎいと音を立てて風に揺れる吊橋。そして、眼下に広がる谷間。二十年経って、充分な大人になった今でも、そこは確かに恐ろしい場所だった。

しかも、あの頃より、幾分か老朽化の後が見える吊橋は、こおろぎ山の反対側に道が出来た所為だろうか、利用する人もいないため、ひどくみすばらしい。そもそも、夏八木を一望できる見晴らし以外に、何も無いこの場所にやって来る奇特な人など、そんなにはいないだろう。

そんなことを思いながら、こおろぎ山の山頂を見上げると、夕日をバツクにシルエツトとして浮かぶ一本の樹が見える。あの頃、あそこまではとても高く、まだまだ道のりは遠いように思えたが、改めて、大人の視線で見れば、本当にそこが旅の終着を知らせる場所であることが、良く分かる。

「世界樹……」

ぼくは、こおろぎ山の山頂に二十年のときを経ても尚、悠然と立つその樹の名前を口にした。世界中の神さまが宿る樹、だから世界樹と呼ばれるのだ、とヨンちゃんから聞かされたのは、二十年前、

この場所を歩いたときだ。

幽霊を信じないばくは、神さまも信じてはいない。歳を取ること
にその思いは強くなっていた。奇跡などと言う言葉は口に易く、
その実はタダの偶然だと思っている。それを神様のおかげと呼ぶの
は、人間のエゴイズムだと本気で考えてしまう。なんとも、リアリ
ズムな考え方だが、たった三十年弱の人生でも、「奇跡なんて存在
しない」と言い切れるだけの、経験を何度もしてきた。

助けられる命、助けることの出来ない命。人の生き死にの最前線
である病院は、人がいとも簡単に死んでいく戦場と何の変わりもな
い。そのなかで、ぼくはいくつの命を救えなかっただろう。大学の
救命救急センターに運び込まれたときには、すでに息を引き取っ
ている患者もいた。すでに手の施しようもなく、匙を投げざるを得な
い患者もいた。そうして、遺族の涙を何度見ただろう。

だけど、あの時、たった一人の少年の命を、助かるはずだった命
を、みすみす失わせたのは、他ならないばくだ。少年の母親は、ひ
どく取り乱し、ぼくを口汚く罵った。大学の教授たちは、ぼくの医
療ミスを叱責した。同僚たちは口を揃えて、後ろ指を差した。それ
らすべてを、甘んじて受け止め、そして、センター長のおかげで、
この夏八木に戻ってきたにもかかわらず、ぼくは医師を続けるか否
か迷っている。ずっと、ずっと、暗闇のトンネルを行ったり来たり
している。その先に、光明を見出せないのは……いや、見出そうと
していないのは、すべてぼく自身の責任だからだ。

それを、「あの時奇跡が起きればよかったのに」「神さまはなん
てヒドイんだ」と、逃げ口上よろしく思ったところで、あの少年の
命は戻ってこない。

少年は、サッカーの大好きな男の子だったらしい。友達思いで、
真っ直ぐな性格は、誰からも好かれた。一人息子で、両親の愛情を
いっぱい受けて、育っていたその一握の命を、ぼくは失わせた。ぼ
くが、殺したのと同じ。「しかたがなかった」と割り切ってしまう
ば、楽になるのだろうか？ それは違う。仕方なくなんかないこと

を一番良く分かっているのは、ぼくだ。ならば、ぼくが犯したその罪を、どうしたら贖罪できるのか。

その答えは、神さまにも、奇跡にも頼らない。ぼく自身がぼく自身の力で、光明を見つけ出さなければいけない。すべての始まりの場所。あの、こおろぎ山の山頂で。

「ゆ、揺らすなよう、シユウちゃんっ!!」

ヨンちゃんが、悲鳴混じりに言ったその声は、谷間にこだまして散っていった。

「揺らしてないよつ。風だよつ」

そう返しながらも、ぼくの心臓も爆発しそうなくらい、ドキドキしていた。安全保障のない、遊園地のアトラクションみたいなもので、鉄橋とは違い、後ろから何かが迫ってくることはないけれど、谷に落ちれば、多分助からない。見上げる空には、ピーヨロロと甲高い鳴き声で、鳶が飛んでいる。ぼくたちは獲物じゃないぞ、と睨みつけたところで、遙か頭上を悠然と舞い、谷間に落ちることもない彼には届かないだろう。

「騒がないっ!!」

ぴしゃりと、先頭のリコが言った。旗よろしく、右手にしていたスキは、橋の入り口で棄てたらしい。今は、硬く橋の両脇のツルを掴んでいる。

先頭をリーダーでもあるリコが、そのすぐ後ろをヨンちゃんが、そして、一番後ろをぼくが渡る。人が一人渡るのが精一杯の幅しかないこの道を、ぼくたちは一列になって、慎重に進んだ。石橋を叩いて渡る、という諺があるけれど、まさにそれに近い状態で、手すり代わりのツルを掴む手が、ひどく汗ばんでいた。

「ねえ、今ツルが切れたら、俺たちみんな死んじゃうのかな」

ヨンちゃんが震える声で言うと、歩みを止めたリコが振り返り、キッとヨンちゃんをにらみつけた。目は口ほどにものを言う……。

ヨンちゃんは、眉を垂れ下げて、情けない顔をして見せた。見かね

たばくは、確証のない安請け合いを口にする。

「大丈夫だよ。ヨンちゃんの祖父ちゃんが渡った橋は、明治時代に作られた木製の橋だったんでしょ？　でもほら、この橋はワイヤーと金具で頑丈に出来てるから、簡単に切れたりしないよ」

「でも、でもっ。親父から聞いたことあるよ。金属って、金属疲労って言うのを起こすんだって。時には、木よりも弱いことがあるって。ゲームだと「きのぼう」より「てつのつるぎ」の方が強いのに」
見れば、ヨンちゃんは爪先まで、小刻みにプルプルと震えている。
「ああ、神さま、ヒメの前に、俺たちを助けてくださいっ」

ヨンちゃんが祈るように、遙かこおろぎ山の頂上に向かって言った。すると、リコがとうとう頭にきたのか、ものすごく怖い顔をして、

「ヨンちゃんっ！！　わたしだって怖いんだからねっ！　これ以上ガタガタ言うんだったら、ここでコブラツイストしてあげる。黙って渡るのと、わたしの必殺技食らうのと、どっちがいいのっ！？」
と上から押さえつけるように言った。リコも内心にかなり怖いのだろう。ぼくたちと同じように、声は震え、膝が笑っている。しかし、ヨンちゃんは、神野たちをシメたあの技の恐ろしさを思い出したのか、しゅんとなって「ごめん」とだけ返した。

多分、この橋が壊れることはないだろう。現代の技術で作られた橋と、明治時代に夏八木の人たちが架けた橋とでは、明らかに違うんだけど、リコのコブラツイストは、確実に痛い。分がある方を探るのは、懸命な判断と言えた。

ただ、当時はこおろぎ山に至る道は一つしかなく、世界樹の葉を手に入れたぼくたちは、この道を戻らなければならない、ということに気付いていなかった。

「な、何か歌おう。そしたら、ちよつとは怖くなくなるかも」

ぼくが提案すると、二人はすぐに同意の頷きを返してきた。言いだしっぺの手前、一番手はぼく。人前で歌を歌うのは苦手だけど、仕方がない。

「アルプス一万尺、小檜の上で、アルペン踊りをさあ踊りましょう。ランララ、ララララ……、つ、つぎリコの番っ!!」

「えっ、わたしっ!? ある日、森の中、クマさんに出会った、花咲く森の中、クマさんに出会った。ううつ、歌下手なのよ、恥ずかしいっ。次、ヨンちゃんっ!!」

「俺もっ!? じゃ、じゃあ、ロンドン橋、落ちる、落ちる」

ぼくとリコがぎよっとする。人ひとりが座れるくらいの小檜で踊るのも、森の中で突然熊に出会うのも、どちらもイヤだけど、この状況で橋が落ちるのは、かなり縁起でもない。

「落ちてたまるかっ!!」

と、ツツこんだのは、ぼくが先だったか、それともリコが先だったか、パンチにサンドウィッチにされた、ヨンちゃんが歌の途中で「ぐえっ」と悲鳴を上げ、そして大きく橋が揺れた。

それから、ぼくたちは黙々と吊橋を渡った。歌を歌うのも、何か言葉を口にするのも、もう怖くて仕方がない。いつそのこと駆け抜けてでも、不安定な吊橋をさっさと渡りきりたかった。ここを渡れば、こおろぎ山の山頂へ上り詰めるだけ。ゴールはもうすぐなんだっ!! 一念に浮かぶのはその言葉だけ。

そうして、たつぷり三十分はかけただろうか。鉄橋で電車に追いかけられたときに匹敵するほどのスリルに浸ったぼくたちは、橋を渡りきると、膝から崩れ落ち、渾身の溜息を漏らした。

「足元が、グラグラする」

ヨンちゃんが、泣き出しそうな声で言った。確かに、揺れのがまだ頭の中に残っているのか、目の前の景色まで、グラついて見えた。

「や、休んでる暇なんかない。行こう」

一番最初に立ち上がったのは、リコ。だけど、リコは意識して、橋の方を振り返らないようにしているみたいだった。ぼくは、休憩したいと顔に書いてあるヨンちゃんの腕を取って、起こしながら、立ち上がり、肩に提げた水筒から、昨日留守さんの工房で注ぎ足し

てもらった麦茶を配った。

ぼくたちは各々、一杯ずつ喉の奥に流し込むと、誰からともなく頷き合わせて、こおろぎ山の山腹を這う、山道を登った。ここからは、こおろぎ山の山肌をぐるりと廻る、山道に入る。とは言っても、みかん山こと双山の山道のように木々で覆われているわけではなく、背の低い草と、茶色の岩がところどころに露出した道だ。

24・吊橋（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

25・夏八木の眺め

長く険しいこれまでの道のりを思えば、最後の山道を登るのなんて、わけもなかった。幸い、こおろぎ山の斜面をぐるりと回り、頂上へと連なる道は、なんら険しいものではなかったのだ。

思えば、ヒメの病気を知ったばかりが「治してあげる」と根拠のないことを口走ったのが最初だ。そして、ヒメは病魔に苦しみながら、ぼくの名前を呼んだ。それは、彼女がぼくのことを信じてくれるからに他ならなかった。その信頼に伸べられた手を、無下に振り払うことは出来ない。例えば彼女の信頼が好意でなかったとしても、ぼくはヒメのことが好きなんだ。だから、絶対に彼女を守ってみせる。

そんなずいぶんと格好つけた思いを胸に、ぼくはリコたちの先頭に立って、山道を登った。草木の間からはみ出す岩は、でこぼこしていて邪魔だけど、足を取られることはない。ぼくの足取りは、異様なくらいに軽く、それでいてしっかりしていた。旅の折り返し、その先にある、世界樹の葉っぱを手に、ヒメのところへ急がなければ。はやる気持ちはあったけれど、その岩のほとりに咲く、一輪の白い花に目をくれるだけの心の余裕もあった。

「世界樹だっ！！」

頂上の稜線が切れ始めると同時に、視界に巨大な一本木が見えてくると、ぼくは思わず、いつになく大きな声で叫んだ。樹齡は果たしてどのくらいだろう。太い幹は、両手を目一杯広げて抱きついても余るほどで、広がる枝は、まるで傘のように大きく、まるで体育館の屋根のようだった。すると、山の峰を吹き抜ける風が、その梢を揺らし、木の葉がさわさわと音を立てて揺れる。「靈験あらたか」という難しい言葉が良く似合う、その光景にぼくたちは、額から流れ落ちる汗も、乾ききった喉も忘れて、吸い寄せられるように、巨木を見上げた。時折、木の葉と木の葉の間から木漏れる光がまぶし

い。

「着いた、やっと着いたよっ!!」

一番最初に我に返ったヨンちゃんが、嬉しさのあまり飛び跳ねた。大人であれば、一日もあれば往復できるような距離も、子どものぼくたちにとっては、遙か彼方のように思えた。そして、ついにたどり着いたのだ。

電車に追っかけられて、川で溺れて、優しい小母さんに助けてもらったかと思えば、白い浴衣の男の子……あの子の正体は結局分かんずじまいだったけど……に、崖から突き落とされそうになって、強面だけど優しい陶芸家のおじさんに出会った。

何のことはない旅だと思う人もいるかもしれない、だけど、ぼくたちにとっては、ゲームや本の中で体験する、壮大な冒険に匹敵するほどの、大冒険だったことは間違いない。一歩間違えれば、ヒメを助けるどころか、自分たちの命さえも危なかった。そう思えば、無茶なことをしたんだと後悔する気持ちと同時に、ヨンちゃんのように飛び跳ねて、全身で喜びを表現したい気持ちも分かるような気がする。

苦労が報われるかもしれない、その希望に胸を一杯にするべくの前に、リコがずいっと歩みでて、冷静な言葉をくれた。

「喜ぶのはまだ早いよ。あそこまで、どうやって葉っぱを採りに行くの?」

そう言つて、リコが指差す先に、緑色の鮮やかな葉がある。ただ、その葉がある場所は、ぼくたちの背丈の三倍近くも高いところにある。巨木だけに、一番低い枝も、手を伸ばせば届くという距離ではないのだ。

「どうしよう」

思わず、困ってしまう。ここには、手ごろな竿もないし、脚立なんて尚更だ。漫画だと、手ごろなアイテムが落ちているのがセオリーだけど、そんなに都合よくはない。それが現実というもの。すると、ぼくと一緒に春が頭上の枝を見つめるヨンちゃんが、まるで学

校の教室で拳手するように、右手を挙げた。

「はいはい、いい案があるよ。三人で肩車して、手を伸ばせば届くんじゃないかな!？」

確かに、背丈の約三倍なら、ぼくたちが協力して肩車すれば、手が届くかもしれない。神様の宿る樹の葉っぱは、一枚でいいのだから。

「じゃあ、だれが一番下になる？」

と、リコが言うと、ぼくたち男子二人は揃って、リコの方を見た。「わたし!? いやいやいや、わたし、これでも一応女の子だよ。一番下って言うのは、あんまりじゃない? そこは、ほら、体格から言って、シユウちゃんでしょ?」

全力で頭を振りながら、リコがぼくを見る。確かに、女の子のリコを一番下にするのは、男としては何だか情けなく思えるくらい。ブライドが、十歳のぼくにだってある。だけど、ぼくは腕っ節の強い方ではないし、運動もそれほど得意じゃない。隣にいる、ヨンちゃんも牛蒡みたいなヤツなので、もっと頼りない。ここにきて、ぼくたち男子二人が、あまりにも頼りないことに気付かされて、ヘコみそうになってしまう。

「でも、この中で最強なのは、リコちゃんでしょ? ほら、ゲームで言うところの筋骨隆々の戦士。ぼくは魔法使いかな。それでシユウちゃんは僧侶」

「誰が、『きんこつりゅうりゅう』の戦士よっ!」

自分の好きなゲームに例えるヨンちゃんに、ガルルつと噛み付きそうな顔をするリコは、やっぱり一番下になるのが相応しいような気がした。これまで、不良中学生を巴投げしたり、街に出没した泥棒を棒術の餌食にしたり、線路下のトンネルを牛耳る神野一味をぶっ飛ばした、彼女の数々の武勇伝を思えば、あながち筋骨隆々の戦士というのも、大げさな話ではない。

ちなみに、幼なじみの女の子の名誉のために言っておくと、彼女は昔から割りと小柄で、腕や足もほっそりとしている。少し丸顔だ

が、愛嬌もある。ヒメには敵わないけれど、と思うのはぼくのヒメびいきだからで、リコはまさに「柔よく剛を制す」という言葉を体現している。

そんな、彼女の為にぼくは、ヨンちゃんの顔も立てるべく、

「じゃあ、じゃんけんで決めよう。一番最初に勝った人が一番上で、次に勝った人が二番目、最後まで負けた人が一番下ってことで」

と、提案を重ねると、流石に、葉っぱを得るためには、肩車しかないと分かっているのか、二人とも、同意の頷きを返してくれた。

「じゃあ、いくよ。恨みつこなしだよ。じゃーんけーんっ」

はい、の合図でぼくたちは、各々の右手を差し出した。結果、ぼくが一番最初に勝ち抜けて、ヨンちゃんが二番目、そしてリコが最後まで負けた。普段の勝負強さが、全く発揮されなかったリコは、しぶしぶ「分かったわよ」と言う。

「今度、ウチの駄菓子屋で、アイス奢ってあげるよ」

と、ヨンちゃんが言うのと、リコは「ケーキのほうがいい」とだけ言って、その場にしゃがんだ。三人肩車なんて、やったことがない。去年の運動会で騎馬戦をやったけれど、あれでも、下になる人は大変だったのだから、リコの悲痛さといったらなかっただろう。

だけど、非力な子ども力でも、踏ん張れば何とかなるもので。

主に、それはリコの奮闘によるものだった。ぼくは、一番上で不安定さに不安を感じながらも、必死に手を伸ばした。

枝まで、あと一センチ、あと五ミリ。目一杯手を伸ばす。そして、指先が葉っぱに触れた瞬間、リコがついに悲鳴を上げて、三人肩車はものの三十秒ほどで、からがらと崩れ去った。だけど、ぼくの手には、しっかりと「世界樹」の葉っぱが一枚だけ握られていた。

「うつつ、全身が痛いっ!!」

何故かヨンちゃんがのた打ち回る。崩れた拍子に、お尻を強く地面に打ち付けたらしい。リコも、腰の辺りをさすって、痛そうな顔をしている。何より、その細い両肩にのしかかった、二人分の体重の負担が、リコの顔をしかめさせたのだろう。

「でも、二人のおかげで、葉っぱを手に入れたよっ！」

ぼくは、そのたった一枚の瑞々しい緑色した葉っぱを、まるで宝物でも手にしたかのように、天高くかざしてみせた。それは、どんな黄金の財宝よりも価値のある、たった一枚の葉っぱ。だけど、これがあれば、病に苦しむ、あの子を助けることが出来るんだ。

「やったーっ！！」

と、リコとヨンちゃんが叫ぶ。もちろん、喜びに満ち溢れた声だ。「よし、これを早くヒメの所に届けようっ！！」

ぼくは、葉っぱをなくさないようにポケットにしまいこむと、勇み足でこおろぎ山を下ろうとした。その段になって、もう一度あの谷間の吊橋を渡らなければならないと思うと、少しだけゾツとした「待って！　少しだけ」

突然、リコがぼくを呼び止める。だけど、彼女の瞳はぼくの方を見ていなかった。

「街の景色がとっても綺麗だよ。シュウちゃんもヨンちゃんも見てごらんよ」

キラキラとした視線に映しこむのは、こおろぎ山から見おろす、生まれ育った夏八木の風景。山の麓から、林と田んぼが並び、その向こうに線路がある。線路は、真っ直ぐにこおろぎ山の脇をすり抜けて、隣町へと伸びている。そして、その線路と交差するように、川が流れている。あの。ぼくたちが溺れた川だ。そして、川の向こうには、色とりどり、民家の薨が見えた。そしてその中心に、ぼくたちが通う「夏八木小学校」が、小高い丘の上に建っている。

十年間、走り回ってきた町なのに、はじめて高い場所から見おろしながら見つめる、故郷の全景は、とても美しく、輝いて見えた。まさに、リコの言うとおり、とっても綺麗だった。

これからも、ぼくたちはこの何もないけど、とても綺麗な輝きを持った町で暮らしていく。この町で、嬉しいことや楽しいことをたくさん経験しながら、大人になっていく。そこには、大好きな幼なじみのヨンちゃんとリコがいて、ぼくがいて、そしてヒメがいる。

それは、いつまでも変わることはないんだと、夏八木の景色を見つめながら、十歳のぼくは思った。
だけど……。

25・夏八木の眺め（後書き）

ご意見・ご感想なとせございましたら、お寄せください。

26・こおろぎ山

衰えを感じるには、まだ若いつもりだが、それでもここ数年の間、毎日のように仕事に追い立てられ、自分の健康などに気を使っていなかった所為で、体力が落ちていることを自認せざるを得ない。

子どものぼくがおっかなびっくりで渡った吊橋を越えこおろぎ山へとたどり着いたように、二十年後のぼくも、こおろぎ山の山頂へと向かう。それほど急でもない斜面を、息切らしながら登り詰めると、視界には、朱と藍が交じり合う暮れなずむ空と、悠然とした佇まいでぼくを迎えるような、世界樹が飛び込んでくる。

あの頃から、何も変わることなく二十年の月日を過ごしてきたのだろうか、世界樹は夕暮れの風に木の葉を揺らしながら、ぼくを見下ろしている。

この木の正しい名前は「さかき榊」という。木辺に神、と書くように、榊には神さまが宿するという、言い伝えがある。世界樹に神さまが宿る、という夏八木の言い伝えも、そのあたりから来ているのだろう。だけど、これほどまでに巨木に育った世界樹であれば、世界中の神さまを宿していたとしても不思議ではないのかもしれないと、神さまなど信じてもないぼくでさえ、世界樹の神秘的な姿に見とれてしまう。

ただ、神さまが宿る、というのはあくまで、言い伝え。榊という木は、どこにでも生えている、何の変哲もない樹木であり、薬学も履修した今となっては、その葉に何の薬効成分も含まれていないことを知っている。だけど、この世界樹の葉に神秘の力があると信じて、一人の少女を助けようとここまで来た日の熱は、まだこの山頂に残っているような気がした。

ぼくは、そつと世界樹に近づいた。二十年前、三人で肩車してやっと手が届いた枝は、腕を伸ばし軽く飛び跳ねれば届くほどの高さになっている。それは、枝が垂れ下がったわけではなくて、ぼくの

背丈がずいぶん高くなったということだ。光陰矢のごとし、とは良く言ったもので、月日の流れは本当に早いものだ。二十年、ぼくは一体何をやっていたのだろう……。

本当にやりたいこと、本当にすべきこと、それをここで見出したはずなのに、ぼくは迷いを重ね、そして道を見失った。患者を右から左に裁くだけの、機械のような医者になって、それを疑うこともなく、日々を過ごした。ぼくが使命に思っていたことは、こんなことだったのか？ ぼくはどうしたらいい？ どうするべきなんだ？ 教えて欲しい。

世界樹を見つめて問いかけたところで、世界樹は何も答えてくれない。物言わぬ、神秘の巨木は、ただ黙ってぼくを見下ろすだけだ。そんなことは分かっている。神さまなんて信じない、そう口にしても結局のところここへ来れば何かが分かるかもしれない、何かが変わるかもしれないなどと思う心の矛盾が、同じように自分の未来にも、矛盾と齟齬を生じさせている。

何も分かりはしない……。何も変わりはしない……。己が、己自身を見定めない限り、ぼくは変わらない。このまま、矛盾を抱えたまま、医者をただの「仕事」としてこなしていくだけだ。それでいいのか？ 良いわけがない。そんな医者を故郷の人たちは待ちわびているはずがない。誰でもいいのなら、二十年の月日を経て、ぼくはこの町に導かれたりしなかっただろう。

せめて、留守さんのように、自分の進む道を信じることが出来たなら、ぼくにも未来を歩む資格が生まれるはずだ。どうしたら、ぼくは信じられる？ 幼い命を奪ってしまった責任を受け止めて、新しい一步を踏み出すことが出来る。あと、何回、自問自答したら答えが導き出せる。

それだけでいい、それだけでいいから、ぼくに教えてくれないか？ ぼくは、深くそして重苦しい溜息を吐き出しながら、世界樹の幹に触れた。ささくれた肌はこつこつとしていて、樹木と言うよりは、岩のようなさわり心地だ。それなのに、硬くなく、ぼくの手のひら

を痛める事はない。神さまは、ただ傷つけることも癒すこともなく、人間が己で道を拓くその時を、黙って見守っている、ということなのか。

ふと、木の向こう側を見ると、小さな駐車スペースと、そこから連なるようにアスファルトの道が、山肌を蛇行しながら駆け下りているのが見える。ここが、「単山展望台」という名前の公園になっていることを、ぼくは知らなかった。そもそも、二十年前にはここは展望台でもなければ、駐車スペースもアスファルト舗装の山道もなかった。その道こそが、おそらくノブさんの言っていた、道路整備事業で作られた新しい道なのだろう。一人で合点していると、薄暮の道に、一条の光がキラリと光った。

あれは……車のヘッドライトだ。白いオンボロ軽トラックが、唸り声のようなエンジン音を、閑静な山並みに響かせながら、アスファルトの山道をせつせと登ってくる。どうやらこちらに向ってきているらしい。こんな時刻に観光客？ 物好きもいたものだ、などと勝手なことを思っていると、軽トラックの助手席から誰かがぼくに手を振った。

「おおーい、シュウくんっ！！」

その声に聞き覚えがある。リコだ。リコは長い髪を手で押さえながらも、ぼくを呼んだ。そして、駐車スペースまで来ると、眩しいヘッドライトを切って、軽トラックはブレーキを踏んだ。ちょうど、ぼくと軽トラックは向かい合わせになる。

良く見ると、オンボロ軽トラックのフロントバンパーには、「杉浦駄菓子屋」とかかれており、案の定窮屈そうな運転席から、でっぷりとしたお腹を擦じらせて降りてきたのは、ヨンちゃんだった。「シュウちゃん。やっぱりここにいたか」

と、ヨンちゃんが言う傍らで、リコも助手席から降りてきた。二つのドアを閉める音が重なり、大人になった幼なじみたちがそろってこちらに歩み寄ってくる。

「シュウちゃんがウチのコンビ二を出た後、どこに行った気になっ

て、リコちゃんに連絡取ったら、世界樹のところに向かったっていうから」

「ヨンちゃん、わたしの仕事が終わるの待ってくれて、シユウくんを追いかけたのよ。学校を後にする、シユウくんの背中がずいぶん寂しげに見えたから……」

ぼくは、少しばかり呆気にとられていて、返す言葉も、愛想笑いも忘れて、二人の顔を交互に見つめた。

「聞いたぜ、お前、夏八木診療所に赴任してきたんだってな。どうして、言ってくれなかったんだよ。俺はまた、三十手前になって、望郷の念にでも駆られたのかと思ってたよ」

「いや、その、言いそびれちゃって。悪かった……でも、聞いたって誰から？」

故郷の診療所に赴任することになったということは、役場の人たちと、乃木さんの娘さん、ノブさんしか知らないはずだ。こおろぎ山を反対から車で登って来た所を見ると、乃木さんの娘さんとノブさんから聞いたという線はありえない。役場の人たち、と言っても、ヨンちゃんたちがぼくのことを調べるために、わざわざ役場まで言っただとも思えない。

思わずきょんとしていると、突然リコが「見て、二人とも。街が綺麗よ」と言って、その瞳にこおろぎ山の山頂から見下ろす、夕暮れの夏八木を映しこんだ。それは、二十年前、世界樹の葉を手にして、山を降りようとしたぼくたちを引き止めた時に良く似ていた。ぼくとヨンちゃんは振り返るように、世界樹の麓で眺望に目をやった。西の山々に消え行く夕日を受けた街並みは、ここから見下ろす分には、何一つ変わってはいない。二十四時間経営のコンビ二に変わったヨンちゃんのコンビ二も、護岸工事されたという土手も、リフォームされた母校も、マンスリーマンションが建ったという公園も、ここからでは豆粒ほどにしか見えない。いや、いろいろなところが二十年の月日で変わったとしても、夏八木の町は夏八木のまななのだ。

そんな当たり前のことを、二十年前、ここから街を見下ろした幼なじみとともに、再び眺めながら思った。

「二十年ぶりだな。ここから見る夏八木の景色」

と言ったのは、ヨンちゃんだった。その言葉はぼくたちに向けたものだったのか、それとも自分自身に向けたものだったのか。

「ううん、あのときよりずっと綺麗。ほら、山の稜線を境に、夕焼けと夜の帳が交じり合うこの時間帯は、すべてのものを美しくするって言うじゃない」

「そうだな。ぼくにとっては、この風景どころか、夏八木も世界樹もすべてが二十年ぶりだ」

リコの言葉に応えながらも、ぼくは二人に気付かれないように、そっと瞳を伏せた。まぶたの裏を過ぎるのは、二十年前、この場所までやって来た夏の日のこと。冒険があり、出会いがあり、そして最後にぼくたちを待っていたのは、この風景だった。たしかに、記憶の底で宝石の原石のようにキラキラと輝いている。

「あの後、すぐにシユウちゃんは、この町を出て行ったもんな」

ヨンちゃんの声に、ぼくは瞳を開いた。

「ああ、父さんの仕事の都合でね。思えば、あの日のお昼、役場から帰ってきた母さんが持ってきた書類は、転居届けだったんだろうね。なかなか、引越しのことをぼくに切り出せなかったみたいで、その話を聞いたときには、もうすでに引越しの準備は始まってたんだ」

「そうか……」

「だから、向こうに着いてすぐ、リコの手紙で、『ヒメが死んだ』って聞いて、ぼくは信じられなかった」

ぼくがそう言うと、一様に暗い顔になる。思い出さくはない事実、信じたくはない事実を目の前に突きつけられた、あの日のことは、忘れようとしても忘れられるようなものじゃない。

「辛かった。初めてシユウくんを書く手紙が、ヒメの死を伝える手紙だなんて」

と、リコが言う。二十年前、ぼくに手紙を書いたリコの心中は察

して余りある。なぜなら、彼女は、ぼくがヒメのことを好きだということを、最初に感づき、そして最後まで応援してくれたのだから。ぼくは、僅かに溜息を漏らすと、続けた。

「何度か夏八木へ戻ろうって思ったけど、子どもの足じゃ、あまりにも遠すぎる。たとえ走っても、一日や二日じゃたどり着ける距離じゃなかった。だから、ひどく後悔もした。両親を恨んだ時期もあったよ。でも、どうにもならなかった。ぼくの力じゃヒメを助けることなんか、最初から出来なかったんだよ」

「それは違うぞ、シュウちゃん！」

一瞬、しんと静まり返りかけた空気を引き裂くように、急にヨンちゃんが大きな声を出す。

「シュウちゃんは、あの後、結局一度もヒメと顔をあわせることなく、この街を出て行ってしまったから知らないんだよ！」

「え？ 何をだい？」

「ヒメは、本当は……」

26・こおろぎ山（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

27・旅の終わり

世界樹の葉を手に入れて、意気揚々と引き返すぼくたちは、あのグラグラの吊橋を渡ったところで待っていたのは、留守さんだった。留守さんは、あの役場で借りたという軽トラックでぼくたちを追いかけてきたらしい。ぼくたちの姿を見つけると、急ブレーキで止まり、駆け下りてきた留守さんは、少しでも心配そうにぼくたちの顔を見ると、突然怖い顔になった。

「まったく、いつまで経つても起きてこないから、たたき起こしに行ってみれば……。それに、この吊橋をガキだけで渡るのは危ないって言っただろうが！ ガキが妙な遠慮しやがってっ」

がつんと、ぼくたちの頭上に拳骨が落ちた。それから、ぼくたちは留守さんの運転で、道を引き返すこととなった。ススキの野原を越えて、みかん山こと双山の山道を、下っていく。途中留守さんの工房へとつづく曲がり道を通り過ぎ、あの浴衣の男の子に崖下に突き落とされそうになり、留守さんに出会った場所を右手に、乃木さんのみかん畑へと続く道も通り過ぎて、やがて、車は県道へと出た。線路をつかつてショートカットしなければ、本来は県道からこの山に入る。しかし、それは遠回りだからと、無謀にも線路を歩き、電車に追いかけられた。その前には、トンネルをふさぐ、地元の大不良、神野と決闘した。喧嘩ごとなんて嫌いだったのに、それもすべてはヒメのため。ヒメを助けるためだった。

それが叶わないことになるとは、知りもしないで、ぼくたちは軽トラックの荷台から、一泊二日の冒険の景色を巻き戻しつつ眺めた。歩けば、あまりに時間が掛かる道のりも、一時間ほどで辿れるのは、少しだけ悔しく思いつつ。

「留守さん。ぼくたちの家へ行く前に、寄って欲しいところがあるんですけど」

住宅地へ入る前、ぼくは荷台から少し身を乗り出して、留守さん

に言った。運転席の留守さんは、前を見つめたまま、少し面倒そうな顔をして「何処だ？」と返す。

「浅井さんの家って分かりますか？」

「浅井？ あの、浅井源一郎の家か？」

さすがは地元有力者でもある、ヒメのお祖父ちゃん。どうやら、留守さんは知っているらしい。と思っていると、「分かったから、引っ込んで。頭が吹っ飛んでもいいのか」と留守さんはぶっきらぼうに言っただけでハンドルを切った。

ヒメの家、つまり浅井家の洋館があるのは、ぼくたちの家とは真逆の方向だ。ここで、家に送ってもらっては本末転倒だ。ヒメを救うため、ぼくたちは世界樹を目指したんだ。きつと、両親は心配しているに違いない。家に帰れば、留守さんの拳骨よりも、厳しい言葉で叱られることは分かっている。そもそも、その覚悟はある。ちゃんと、黙って家を出たことを謝るつもりだった。だけど、その前に、ヒメに世界樹の葉っぱを届けなければいけない。ヒメは、ぼくたちに……ううん、ぼくに助けて欲しいと言ったんだ。ヒメはぼくを待ってる。そう思いながら、何度も、ポケットの中の、すこし萎れた世界樹の葉っぱを触った。

ぼくたちはヒメの家の前で降りてもらった。用事が済むまで待っているという留守さん。

「後は歩いて帰れます。ここまでありがとうございました。ぼくたち、子どもだけど、少しくらいは遠慮させてください。何にも、お礼できないですから……」

荷台を降りたぼくが言うと、留守さんはニヤリと髭に囲まれた口を曲げた。

「何だそりゃ。ガキのくせにそういう大人みたいな口ぶりは感心しないな。だが、まあ、登り窯をノブにまかせつきりで出てきたからな。お言葉に甘えさせて貰うか……。ちゃんと家に帰って、親にしっかり叱られる、クソガキども」

「はい！」

ぼくたち三人が声をそろえて返事をする、留守さんは、ぼくたちにはじめて笑顔のようなものを見せて、手を振りながらそのまま軽トラックを走らせて、ぼくたちの前から姿を消した。

そうして、軽トラックのエンジン音が聞こえなくなるまで見送ってから、ぼくたちは洋館へと足を踏み入れた。ヒメの部屋の窓を見上げてみたけれど、カーテンが閉まっていて中の様子は確認できない。だけど、洋館全体が、静まり返っているみたいだった。

リコが呼び鈴を鳴らす。玄関口に現れたのは、ぼくが初めてここへきたときと同じように、ヒメのお母さんだった。

「あら、あなたたち！ 何処へ行ってたの？ ご両親がとても心配なさっているのよ！」

いつも穏やかだったヒメのお母さんらしくない、厳しい口調でぼくたちを窘める。どうやら、ぼくたち三人のうちの誰か、もしくは全員の両親がヒメの家に問い合わせたのかもしれない。「ウチの子が、そちらにお邪魔してはおりませんでしょうか？」って。

ぼくは慌ててポケットから、世界樹の葉っぱを取り出した。

「あの、これ、どんな病気でも治るっていう、世界樹の葉っぱです。ぼくたち、これを採りに、こおろぎ山まで行ってきたんです。お願いです、これで、ヒメを助けてください」

「世界樹の葉っぱ……？」

葉っぱを受け取った、ヒメのお母さんは少しだけ驚いたような顔をしていた。すかさず、リコがぼくの前に歩み出て、

「あの、ヒメの……夏音ちゃんの様子、どうですか？ お見舞い、してもいいですか？」

と尋ねると、ヒメのお母さんは少しだけ長居まっげを伏せて、頭を左右に振った。

「ごめんなさいね。すこし落ち着いたけれど、またいつ発作が起きるか分からないの。今度、発作が起きたら、もうあの子は……」

言葉につまり、うつつ、と嗚咽を漏らしながら、ヒメのお母さんが震えた。その言葉の後には「助からないかもしれない」と続いた

のだろう。だけど、そんな言葉を打ち消すように、ぼくは声をあげた。寝室で眠るヒメにも届くように。

「大丈夫です。この葉っぱがあれば、ヒメの病気は絶対治ります！」
根拠のない言葉。何度かぼくはそういう言葉を口にした。平気で口にするような子どもだったといえ、とても聞こえが悪い。だけど、ヒメのお母さんは、泣き出しそうな顔に無理やり笑顔を作って、「ありがとう。秋人くん、梨花さん、四郎くん。この葉っぱ、必ず夏音に届けるわ。だから、あなたたちは早く家に帰りなさい。大騒ぎになりかけてるんだから、ちゃんとお父さんお母さんに、謝るのよ」

と言い、そして去り行くぼくたちの背中に「また、お見舞いに来て頂戴ね。あの子にとってそれが一番の薬だから」と、付け加えた。これでヒメは助かるはずだ。本当なら、使命を果たした満足感や達成感を感じながら、家路に着くはずが、ぼくたち三人は誰一人言葉を交わすことなく、悲しげなヒメのお母さんの声を引きずるように、ぼとぼと家路に就いた。

そうして、ぼくたちの旅は終わった……。

家に帰ったぼくは、まずお母さんにビンタされた。次いで、仕事から飛んで帰ってきたお父さんに、拳骨を食らった。留守さんの拳骨に比べれば、全然痛くなかったけれど、ひとり息子が家出でもしたんじゃないか、もしかしたら誘拐されたのか、事故に遭ったのかと心配で心を痛めながら一晩を過ごした両親の目に涙を見たぼくの胸は、とても強く締め付けられた。

いつの間にか、ぼくも泣き出して、何度も「ごめんなさい」を言った。それから、たつぷり三時間近くは説教を食らっただろうか。山から吹き降ろす夕風が、家の縁側の風鈴をちりんちりん、と鳴らす頃、ようやく両親は落ち着いた口調で、こう切り出した。

「実はな、秋人。ずっと黙っていたんだが、明後日にはこの街から引越すことになったんだ」

深刻なお父さんの口調が、少しだけ怖かった。それ以前に、何を

言っているのか理解できなくて、ぼくは戸惑った。お父さんの仕事の都合で、都会にある本社ビルに転勤となったらしい。いち社員のお父さんに断る術はなく、転勤を受け入れたものの、この街で十年間過ごしてきたぼくには、なかなか言えなかったらしい。

今思えば反抗することも出来た。「いやだ、絶対にイヤだ」と駄々をこねることも、子どものぼくにはできた。だけど、目一杯心配かけた後に、わがままを言って、両親を困らせるほどぼくはヤンチャになりきれない。そういうところが、賢しいというのだ。

「突然のことでごめんね、秋人」

お母さんにそう言われて、頷いたぼくは、荷物の片付けに追われて、結局引越しのその日まで、幼なじみたちに何も言えなかった。あまりに何もかもが急に訪れたみたいで、ぼくもパニックになりかけていたのかもしれない。

ぼくが引越すことを知った、リコとヨンちゃんの反応も似たようなものだった。突然のことに、ふたりとも信じられないと、顔に書いてあった。だけど、引越しは待ってくれない。見送る二人と、別れを惜しむ間もなければ、いまだ病床にいるであろう、ヒメに別れを告げることも出来なかった。

「ヒメのことお願い。ぼくの代わりに、毎日お見舞いに行っておいで。ヒメのお祖父ちゃんに追いつかれても」

と、ぼくが言くと、リコとヨンちゃんは揃って頷き返してくれた。

「うん。ヒメにはわたしから話すよ」

「任せとけ。シュウちゃんの分も、俺たちがヒメのお見舞い行くから」

すべてがバタバタしたままだった。引越し業者のトラックに、荷物という荷物を詰め込み終わったお父さんがぼくを呼ぶ。ぼくは荷台に乗り込むと、幌をめくって、必死に手を振った。

「必ず、必ず、手紙書くからね、シュウちゃん!!」

「リコ、ヨンちゃん、元気でね!」

全力疾走で引越したトラックを追いかけてくるリコと、最後に交わ

した言葉。やがて、加速した引越しトラックが二人を引き離し、その姿が見えなくなると、ぼくは涙が溢れてきた。幌の外を流れ、どんどん通り過ぎていく、住みなれた街、遊びまわった街、ぼくが育った街の景色が、潤んで見えた。

「さようなら」

ぼくが呟いた言葉が、夏八木に向けたものだったのか、それとも幼なじみに向けたものだったのか、それとも初恋の女の子に向けたものだったのかは、今でも分からないままだ。

そうして、ぼくは二十年間、この町に戻ることはなかった。

27・旅の終わり（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

28・ヒメからの手紙

リコから手紙が来たのは、引越してから一週間ほどしてからだった。転校先の新しい学校になかなか馴染めなかったぼくは、故郷からの手紙に嬉しさで胸を一杯にした。

だけど、その文面に書かれていたのは、目を疑いたくなることだった。ヒメが五日前、静かに息を引き取ったと、涙でところどころ滲んだ文字。すぐには信じられなかった。だけど、冗談で、初めての手紙にそんなことを書くとも思えなかった。

確かめたい、そう思ったところで夏八木はすでに遠い街だ。小学生のぼくには、電車に乗るだけのお金も、歩いていくだけの体力もない。両親を探してヒッチハイクしたり、野宿したりする、ぼくと歳の変わらない姉弟が旅をする小説を読んだことがあるけれど、ぼくにそんな勇氣はなかった。そもそも、毎日のように顔をつき合わせていた幼なじみの家の電話番号も知らない。

ヒメの突然というか、あまりにもあつけない死の真偽も確かめることも出来ず、ただやきもきするしかない、ただ悲しみにくれるしかないことに、ぼくは胸が張り裂けるような思いがした。

初めて恋をして、大好きになった女の子のことを助けようと、世界樹の葉を採りに行ったのに。あれがあれば、どんな病気だったかどこに良くなるはずなのに。やっぱり神さまなんてこの世にいないんだ！ リコからの手紙を読みながら、悔しさに震えた。

ヒメの病気は重篤な難病で、現代医療の術を以って治すことなどできないことも、世界樹の葉っぱが万病に効くというのは、ただの言い伝えで、その葉っぱはただの榊の木の葉っぱであることなんてその時のぼくは知る由もなかった。

遠い街で、初恋の終わりと、世界樹への旅はムダだったと、自分の無力を痛感しながら、惰性のような日々がはじまった。

もともと、少しばかり人見知りしたり、留守さんが感心しないと

言つた「大人のような口ぶり」が災いしたのか、それとも、田舎つ子が都会に戸惑つていただけなのかはわからない。両親は、都会に引越してから共働きになり、忙しい毎日を送っている。時には、顔をあわせないこともあつた。学校から帰るとリビングのテーブルに、『今日は遅くなります。夕飯は冷蔵庫の中。母より』という簡素な書き置きがあるだけ。

友達も出来ず、都会の忙しなさにも慣れず、何も喋らないでも一日を過ごすことが出来る日々が、幾日も過ぎていった。

リコが言つた「シュウくんが、お医者さまになつたのは、ヒメのことがあつたから？」という言葉。あれに答えるなら、半分はそうだとはいえるのかもしれない。ヒメを救えなかつたことは、大人へと成長しても遺恨のまま、胸の奥に刻まれていた。ヒメを救えなかつた反動は、一人でも多くの病に苦しむ人たちを、この手で救いたいという願望に変わつて行つた。

残りの半分は、都会での生活がそうさせたというべきだろうか。友達もいない、鉄とコンクリートに囲まれた都会では、夏八木のように遊びまわる場所さえもない。でも、何もしないでいると、頭の中にヒメの顔が浮かぶ。はじめてみたときから好きになつた春風のような笑顔と、発作に苦しみばくに手を伸ばし、「助けて」というヒメの顔。思い出せば、何度だって胸がきつく締め付けられて、痛くなる。それを振り払うかのように、ぼくは勉強に没頭するようになった。医者を目指すようになったのはそのころからだつた。

勉強をしていれば、あの日のように両親に心配をかけることもない。そう自分に言い聞かせて。そうして、無味乾燥した都会の喧騒の中で出来上がったのは、何の面白味もない、無口で笑わない少年だつた。少年は、都会の中学、高校と進学し、あいも変わらず友達も出来ないまま、医科大学へと進んだ。医者になる。ヒメの分まで、多くの人を助ける。半ば強迫観念のような思いを抱えたまま。

確固たる信念や、欲があるわけじゃない。あの日の記憶が、思い出が、ぼくを突き動かしては、振り向く余裕も与えなかつた。医者

になり、湾南大学の救命救急センターに就職し、ヒメの笑顔を忘れるためだけに、無我夢中で患者を救った。いや、救われていたのは、きつとぼくの方だ。病や怪我の苦しみから、患者を解放するたびに、ヒメの顔を思い出さずに済む、世界樹への旅を忘れることが出来る。多忙に慣れていく体と心は、それに浸り、毎日が猛スピードで過ぎるのが、自然なことのように思い始めた。

それでいいんだ、そうじゃなきゃ、ぼくはヒメにどんな顔をしたらいいいのか分からない。ヒメはぼくに助けを求めた。でも、好きな女の子に何もしてあげられなかったただけじゃなく、最期の一瞬にも、傍にいてあげられなかった。それが、人生で最初の罪だ。

そして、第二の罪は、強迫観念のような思いだけで、同僚たちにオーバーワークを課して、さらに自らの医療ミスで、一人の少年の尊い命を奪ったことだ。

二つの罪は、ぼくの肩に重くのしかかり、路を見失った。どうしていいのか分からない。何のためにぼくは医者になったのか、これからどうして行きたいのか、分からない。それが第三の罪だった。

三つの罪を抱えたまま、世界樹のもとまでやって来た。いくつかの再会を経て。この場所が、十歳からの二十年のぼくの人生が始まった場所だと思うからだ。始まりの場所に来れば、あの日ぼくが何を思い、幼なじみと初恋の人と別れ別れになった後、ぼくが何処へ行こうとしたのかを思い出すことが出来ると思った。忘れようとした、ヒメの顔を、あの日の旅を思い出すことが出来ると思った。

だが、弱いぼくは、何も思い出せない。なにも思い至らない。結局、足踏みをしたまま、前に進めない。この暗闇のトンネルを抜け出すことも出来ない。

「シュウちゃんが、街を出て行った後も、俺とリコちゃんはお前の代わりに毎日ヒメの様子を伺いに行ったんだ」

ヨンちゃんがぼくの方を見て言う。それは、ぼくの知らないことだった。

「ヒメのお祖父ちゃんに追い返されるといけないから、ヒメのお母さんに裏口から上げてもらって」

と付け加えるのは、リコだ。

「あんまり調子は良くないみたいだったけど、俺たちが見舞いに来ると、ヒメはいつも決まって笑顔を見せてくれた。ああ、シュウちゃんはこの笑顔にやられたんだなって、思ったよ。鼻屑目でみなくても、ヒメはとてもいい子だった」

「やられたって……。まあたしかに、ぼくはヒメのことが好きだった。遠い昔の話さ。でも結局ぼくは、ヒメを救えなかった。だから、二度とあの笑顔を見る資格なんかなかったんだよ。それだけのこと」
ぼくは自嘲気味に笑ってみせる。思えば、こういう笑い方を覚えたのも、都会に引っ越してからだった。心底笑うことなんて、二十年来ないはまだ。

「それだけのこと、じゃない。ヒメは、本当はお前に感謝してた。

この木の葉は、ただの榊の葉だけ……」

と、ヨンちゃんが背後の世界樹を振り返る。

「ヒメにとっては、間違いなくお前がくれた『世界樹の葉』だったんだよ」

「ヒメはね、最期の日。シュウくんから貰った『世界樹の葉』を握り締めて、静かに息を引き取ったそうよ。ヒメのお母さんから聞いたことだけど、とても安らかな顔をしていたって」

リコも世界樹の方に振り返った。

「世界樹の葉は、ヒメを病気から救うことは出来なかったけれど、最後の苦しみからは解放した。それだけでも、わたしたちがここに来た意味はあった。シュウくんが、ここを目指した意味はあったのよ」

リコがぼくに言う傍らで、ヨンちゃんはおもむろに、ズボンのポケットから何かを取り出した。白い封筒。それが何を意味するのか分からないまま、ぼくはそれを受け取った。

「もつと、はやくこれをお前に渡すべきだった。そうすれば、お前

は迷わずに済んだのかも知れない」

ヨンちゃんの言葉を横目に、ぼくは封筒を開き、一枚の便箋を取り出した。仄かに、記憶の底に残るヒメの香りがした。ヒメからの手紙の書き出しは、こうだった。

『わたしの好きな人へ』

丁寧な文字、発作に苦しみながら書いたのかもしれない。でも、ヒメからの手紙には温かな言葉が綴られていた。ぼくは、その一字一文字をかみ締めるように読んだ。

『わたしの好きな人へ。』

わたしは、病気で学校へはあまりいけなくて、夏八木のまちに来るまで、ともだちがひとりもいませんでした。

夏八木のまちに来てからも、転校生のわたしをもてはやす子はいても、わたしのことを本気で心配してくれる子は独りもいませんでした。そういうのを、うわべだけ、というのだそうです。

でも、秋人くんはちがいました。本当にわたしのことをしんぱいしてくれて、わたしの病気をなおしてあげるっていつてくれたときは、本当にうれしかった。

だけど、わたしの病気は絶対になおらない。

わたしは、きっといつか死んでしまうでしょう。

でも、悲しまないでください。わたしは、いつまでも秋人くんのところの中にいます。秋人くんが、悲しいとき、つらいとき、まよったとき、わたしはいつもあなたを見守っています。あなたが、あなたでいてくれるように。

だって、あなたは、わたしの好きなひとだから。

ともだちになってくれてありがとう。わたしを助けるっていう約束を守ってくれてありがとう。いつか、また出会う日まで、さようなら

最後に、「ヒメより」と締めくくられたその手紙を読み終えたぼくの顔は、多分くしゃくしゃになっていた。ありがとう、その言葉が胸に刺さる。二十年の歳月を経て、ヒメから届いた手紙には、感

謝の言葉ばかりが綴られていた。

「お前は、医者になってどれだけ多くの人を助けてきた？ 何人もの人が、お前のおかげで、明日を生きている。ヒメと同じように、お前に感謝してる。それって、すごいことなんだ」

ヨンちゃんが、ぽんつとぼくの肩に手を置いた。

「確かに、医療ミスしたのはお前の責任だ。失われた男の子の命は戻ってこない。だけど、その責任を負っても、まだお前は医者を辞めたいと思ってるんじゃないだろうか？ だから、この街に戻ってきた。医者続けたいと思ってるからだ」

幼なじみの言葉一つ一つが、ぼくの内心を悟っているようだった。ヨンちゃんが、やけに事情に詳しいことや、まるですべて分かっているような口ぶりなことよりも、幼なじみのあたかな眼差しが、少しだけうれしかった。大学病院を辞めて一月あまり、ガチガチに固まってもつれたぼくの心を解いていくような眼差しだった。

「ここで立ち止まったら、きっと、天国で見守っているヒメに怒られちゃうわよ。ねえ、シウくん。逃げないで。ここには、わたしも、ヨンちゃんもいる。つまづいても、わたしたちはあなたの味方なんだから。あなたがあなたでいる限り、ヒメはあなたの心の中で、ずっと笑顔のままよ」

リコが、白い歯を見せて笑う。すっかり美人になった幼なじみの顔に、十年前の面影がふと宿ったような気がした。幼なじみ二人の、あの頃と変わらない眼差しに、ぼくは留守さんの言葉を重ね合わせていた。

『好きなことから逃げ出したら、本当の意味で自分はダメな人間になってしまう。自分がそれを使命だと信じ、逃げないことが大切なんだ』

ぼくは、何のために医者になったのか……。医者という仕事で心底好きだからだ。苦しんでいる誰かが、笑顔を取り戻し、元気になっていく姿を見たいからだ。そうするたびに、少しずつ、心の中のヒメの笑顔が、明るさを取り戻していくような気がしたからだ。

ここから逃げだせない。逃げ出したら、ぼくは、あの少年に背中を向けることになる。でも、その責任をさえきれるか不安だったんだ。人の命は、たった一つでも、あまりに重く尊い。きつと押しつぶされてしまうかもしれないと思っていた。だけど、もしも押しつぶされそうになったら、幼なじみがそれを助けてくれる。あの日、浴衣の少年に崖から落とされそうになった時、二人が助けてくれたように。ともに、世界樹まで旅をしたように。

それに、ヒメもいる。ずっとぼくのこころの中で、ぼくをささえてくれる。どうしてそれに気付かなかったのか。二十年の間、自問自答を繰り返した答えは、とつくの昔にぼくの目の前にあった。ノブさんが言ったように、もう答えは見つかっていたんだと、その時、やっと気付いた。

医者をつづける。たくさんの人たちが、ぼくを支えてくれている。だから、ぼくは、自分かしたことを諦めない。諦めちゃダメなんだ。それが、あの少年にできる、たった一つの償い。そして、なによりも、ぼくの望みだ。

「そうだな……ぼくは、二十年間、ずっと旅を続けていたのかもしれない。あの日の続きを」

ぼくは、もう一度世界樹に近づいた。悠然とした姿の木を見上げる。ぼくは、言い伝えのような世界樹にはなれない。それでも、ぼくに出来ることは、たくさんある。

「ここが、その旅の終わり。あの夏の旅を、ここで終わらせる。新しい、旅の始まりの為に、ぼくは医者を続けるよ。今度は、この街の人たちの医者になる」

と、ぼくが言うと、不意にリコが声を立てて笑い始めた。つられたように、ヨンちゃんまで、タップタップとお腹の脂肪を揺らしながら笑う。

何かおかしいことを言っただろうか？ ちょっぴり、クサイ科白だったとは思うけど、笑うような場面ではない。と、思っていると、リコの視線はぼくの方ではなくて、「杉浦駄菓子屋」と書かれた、

ヨンちゃんの軽トラックの方に向いていた。

何だ、何なんだ？ 怪訝に思ったほうが、ぼくと正面で向かい合うように止められた軽トラックの方を見ると、荷台の隅っこで、なにかがひよこひよこ動いている。馬の尻尾のように見えるけれど、荷台に馬は収まらないだろう。

「忘れるところだった。お前に、もうひとつ届けものがあつたんだ。スマン、スマン。もう降りてきてもいいぞ！」

ヨンちゃんがそう言うと、狐につままれたような気分のぼくの前に、ひらりと見覚えのあるポニーテイルが揺れた。

「もう、完全に降りるタイミング見失っちゃったじゃないですかっ！ ！ ！ てか、聞いているこっちが、恥ずかしくなるような、青春ですね、野崎先生」

荷台から降りてきた彼女は、いつもと違う私服に、ボストンバツクを手にして、ニコニコとぼくに微笑んだ。完全にあいた口が塞がらない。ヨンちゃんやりコが、やけに事情に詳しく、ぼくが夏八木診療所に赴任してきたことや、湾南大学病院を辞めたことを知っていたのは、それを話した人物がいるからだということは、うすうす感じていた。だけど、まさか、それが……。

「平沢さんっ！ 何でここにっ！？」

我に返って、ぼくは思わず大きな声を出してしまった。目の前にいるのは、一ヶ月前まで救命救急センターで同僚として働いていた、平沢看護師だった。二十五という歳の割りに、少女っぽい顔つきに、ぼくは平沢さんの平手打ちの痛みと、彼女の淹れてくれる苦いコーヒーの味を思い出していた。

彼女は、驚くほどの顔を面白そうに見つめて、笑いかみ殺している。

「杉浦さんにここまで連れてきてもらったからに決まってるじゃないですか」

「コンビ二に彼女がやってきて、『野崎って医者をしらないか』って言うものだから、俺も驚いてね。知ってるも何も、幼なじみだっ

て言ったら、連れて行けっていうものだから」

と、ヨンちゃんまでも笑いをかみ殺してニヤニヤしている。

「連れて行けなんて言ってますんよ。ねえ、リコさん」

「そうよ。ヨンちゃんが、シュウくんを驚かせようって言ったんじゃない」

リコがぼくの顔を見る。多分、ぼくは面白い顔でもしていたのだろう。リコはまた噴出した。

「いや、そうじゃなくて。なんで、きみがぼくを探して、夏八木まで来たのかって聞いているんだ」

「そりゃ、灣南に辞表を叩きつけてきたからですよ」

事も無げに、平沢さんは言ってるのける。

「辞表って……何言ってるんだ。大学病院辞めてどうするつもりなんだよ」

「言っただしよ、わたし先生と一緒に仕事がしたいって。だから、夏八木診療所で看護師として雇ってもらえるように、役場に交渉したんです。そしたら、オッケーだって言うんで、迷わず、ばーんとセンター長に辞表出してきちゃいました」

「はあ!？」

ぼくのどこにそんな素っ頓狂な声が出せる器官があったのかと思うほど、大げさに驚いた。彼女の大胆すぎる行動と、彼女の真意が分からなかった。

「まったくまあ。嬉しいくせに。先生、またよろしくお願いします」
ぺこりと平沢さんは頭を下げた。ポニーテイルがぴょこんと跳ねる。平沢さんはぼくを追いかけてきてくれたということなのだろうか……。それは、嬉しいことに変わりはない。でも、ぼくと働きたいというだけで？

「よかったわね、シュウくん。可愛い彼女が遠い街まで追いかけてきてくれて」

突然リコが傍に来て、囁く。

「鈍い鈍い、とは思ってたけどな。彼女の気持ちに気付かないなん

て、罪作りだぜ、まったく。でも、まあ、俺の嫁に比べれば、まだただけだな」

ヨンちゃんまでも、ニヤつく。

べつに平沢さんとはそんなじゃないよ、と否定の言葉を吐こうとするぼくの前に、ニヤニヤと笑う顔が三つ。ぼくだけ、きよときよとしてしまう。

「ああ、そうだ。役場の女性が、四つ角作ってましたよ。約束の時間になっても現れない、行方不明になったって、心配そうにわたしの携帯に電話くれました」

と、平沢さんはポケットから携帯電話を取り出して、ぼくに見せてくれた。そういえば、もう約束の時間はとくに過ぎている。携帯の電波も入らない山の上にいるとは、誰も思わないだろう。説教の一つくらいは覚悟していたが、これは一つくらいでは済まされないかもしれないぞ。

「もう、しっかりしてください、野崎先生!!」

平沢さんが、いつものように勢い良くぼくの背中をひっぱたく。

ぱーん、と小気味よい音が、こおろぎ山の山頂に鳴り響き、誰からともなく笑い始めた。ぼくも、つられて笑い始めた。一度笑いのタガが外れると、何がおかしかったのか分からないくらいに笑いがこぼれた。

さわさわと、こおろぎ山に夜風が吹きぬける。世界樹の葉っぱが、四人の笑い声に乗せられたように揺れる。ぼくは、心の中のヒメが、ぼくたちと一緒に笑ったような気がした。

それは、二十年の旅の終わりと、再び夏八木での新しい旅の始まりを告げていた……。

「こんにちわ、夏八木診療所です。春江さん、調子はいかがですか？」

みかん畑の坂道を自転車で駆け下り、古民家の庭先に自転車を止めたぼくは、縁側から家の中に声をかけた。すると、間もなく家の

奥から、にこやかな乃木春江さんが顔を出す。

「あらあら、先生。わざわざどうも。おかげさまで、万年腰痛以外は、すこぶる元気ですよ」

と、春江さんは言いながら、縁側に座り、ぼくと平沢さんにも座布団を勧めてくれた。

「でも、用心してくださいね。もうじき、気温も下がってきますから」

ぼくの隣に腰掛ける平沢さんが、フォローを入れてくれる。街の看護師らしくKCに身を包んだ、彼女の姿に、春江さんは目を細めて、

「そうだね、またぶつ倒れて、先生やあんたのお世話になるわけにもいかないからね」

と言った。熱射病で倒れたことは、春江さんにとっても、ショッキングな出来事だったらしく、みかん畑の仕事は、狩り入れなどの繁忙期以外、娘の春実さんに任せることにしたらしい。

「遠慮なさらないでください。お加減が悪いと感じたら、いつでもわたしたちを呼んでくださいね、春江さん」

平沢さんがニコニコと微笑みながら言うと、不意に春江さんはぼくに顔を近づけてきて、耳元で囁いた。

「で？ あんたたちは、いつ結婚するんだい？」

もちろんその声は、平沢さんにも筒抜けだった。平沢さんは、縁側から飛び跳ねるように立ち上がると、真っ赤な顔をして、何故かぼくの頭を叩いた。

「痛っ！ 暴力を振るうなど、いつも言ってるだろ、平沢さんっ！」

「わたしと、先生はそんな関係じゃないですよっ！ なんて、わたしがこんな鈍い人と！」

ぼくの訴えを無視して、平沢さんが渾身の否定をする。

「何もそこまで強く否定しなくても……」

「先生は黙っていてくださいっ！ まったくもう、何故か町中に変

な噂が広がってるんですから。みんな、口を開けば『いつ結婚するんだい?』って、そればっか!」

腰に手を当てて、プンス力するたび、平沢さんのトレードマークとなったポニーテイルが、ぴよこぴよこと揺れる。そんな彼女の姿を見て、春江さんは「あっはっは」と大口を開けて笑った。

「そりゃ、噂にもなるさ。わざわざ先生を追いかけて、夏八木まで来たんだ。あんただって、少しくらいその気があるんだろう? あとは、あんたの努力次第で、先生を振り向かせれば言いだけのことだよ」

そう言われた、平沢さんは何故か耳の先まで真っ赤になって、再びぼくの頭を引っぱらいた。ぼくは何が何だか分からず、平沢さんと春江さんの顔を交互に見た。

「たしかに、この人は鈍い男だね……」

と、春江さんがもう一度、みかん畑中に響き渡るような声で笑った。

夏八木診療所に赴任して、一週間もあれば、大体の仕事は把握できた。寒村医療は、救命センターのように忙しくはないが、ぼくと平沢さんの二人だけで、夏八木全体の町民を診なければならぬ。また、診療所の医師は、リコの勤める「夏八木小学校」の校医も兼任している。それは、救命センターとは違った意味でハードワークと言える。

しかし、全体的に、ゆったりとした時間が流れている。時間も季節も、日付さえも分からなくなるほど、何かに追われていた日々が、嘘のようだった。回診のついでに、ヨンちゃんのコンビニに立ち寄ったり、町の公園でゲートボールに興じる老人と世間話をしたり、時には子どもたちの遊び相手になってやることも。

自分がやりたかった、医者の方は、こういうことだったのかもしれない。患者と同じ時間を過ごしながら、一人一人の人間に気を配り、互いに病や怪我に立ち向かう。その先に、患者にとっても、ぼくにとっても、よかったと言える明日が待っている。

これから先、困難なことにも出会っただろう。もしかしたら、救えない命もあるかもしれない。でも、迷ったときには、リコが、ヨンちゃんが、平沢さんが、街のみんながぼくを支えてくれるだろう。その分、ぼくは自分の持てる、医術の知識でみんなを支えたい。そうすれば、きっと天国で見守ってくれているヒメも、ずっと笑顔でいられるはずだ。

ぼくは、この一週間でそう感じた。

「しかし、川で溺れてたあのおチビさんが、お医者さまになるなんてね。あの頃は想像もしてなかったよ」

白衣姿のぼくをしげしげと見つめ、感慨深げに春江さんが言った。ぼくは、平沢さんに引ッ叩かれた頭をさすりながら、苦笑する。

「ぼくも、思っても見なかったです。こうして、故郷の町で医者が出来るなんて……。さて、次の回診へ行かなくちゃ。もしも、何かあったら、すぐ診療所に連絡してくださいね。飛んできますから」

「ああ、お言葉に甘えさせてもらうよ。野崎先生」

ぼくは、縁側から立ち上がると春江さんと、みかん畑から帰ってきた、春実さんにぺこりと頭を下げた。そして、平沢さんを従えて再び自転車に跨る。

「次は、双山の麓の、神野さん家のお爺ちゃんです」

と、平沢さんが案内してくれる。

「神野か……」

今頃、あの大不良はどうしているんだろう。噂では、警察官になったらしい。あの日のことを恨みに思ってたたりしないだろうか。ふと、そんなことが頭の隅を過ぎった。すると、平沢さんが、

「どうかしましたか、先生。しっかりしてください！」

と言つて、ぼんやりするぼくの背中を勢い良く叩いた。

「まったく、きみは……。いや、何でもない。さて、それじゃ行きますか」

ぼくは溜息交じりに、自転車のペダルを漕ぎ出した。

みかん畑に並ぶ、みかんの実が少しだけ黄色く色づきはじめてい

る。もうじき、夏も終わり、秋が来るんだな。ぼくは、そんなことを思いながら、白衣の裾を翻して、みかん畑の坂道を、平沢さんと一緒に登った。

（おしまい）

あとがき

はじめまして&こんにちわ。雪宮鉄馬です。

この度は、拙作「夏の日のノスタルジア」を最後までお読みいただき、誠にありがとうございました。非常に拙い物語だったかとは思いますが、いかがだったでしょうか？

一カ月半あまりの執筆期間を経て、ようやく完成させることが出来て、ほっとしています。本当は八月中に終わらせるつもりが、長々と続き、遅筆ゆえに遅々として進まなかったのは、わたしの精進の足らないところでもあります。

今回は、全部で「原稿用紙三百五十枚」相当の長編となっていました。完成することが出来たのも、ひとえに、この物語を読んでくださった皆様のおかげと存じております。

今作のもとのコンセプトは、十五年まえ、まだわたしがガキんちよだった頃に思いついた「ノスタルジア」と言う小説でした。そこに、新たなエッセンスを加えることで、物語を再構成したのが、今作となっています。

その、新たなエッセンスというのは、物語の端々で感じた方も多いと思いますが、かの有名な映画「スタンドバイミー」です。「スタンドバイミー」についての説明は割愛させていただきますが、雪宮的なアプローチで、「スタンドバイミー」のような、少年時代の冒険旅行の物語を書きたい、と思ったのが執筆の動機でした。

その影響は、物語の端々に現れています。たとえば、鉄橋のシーンや、ヨンちゃんの「ミートパイ男」の話、などがそれに当たります。オマージュと言うわけではないのですが、雰囲気としての演出といった側面も持ち合わせています。

また、今回初めての試みとして、「二十年前のぼく」と「現在のぼく」の物語が交互に描かれ、クロスオーバーするという仕組みも

採用しました。時間軸の転換は、読者を置いてけぼりにする可能性があるので、小説では「あまり好ましくない」とされる手法ですが、「二十年前」とか「あの日」「あの時」という単語を多様化してやることで、この文節は「現在のぼく」なんだ、この文節は「二十年前のぼく」なんだと、認識しやすいようにしたつもりです。

どうしても、失意に陥った主人公と、少年時代の主人公の二人が同じ道を辿り、そして同じゴールで、最後に現在の主人公が希望を取り戻すと言う流れを作りたいかったです。

そういった意味では、拙作「Be long」的な旅の小説、もしくはロードムービー的小説でもあり、同時に主人公がいかに再生するかがキーポイントの物語でした。

冒頭の医療シーンですが、ここについては、実際のお医者さまがご覧になったら、ツツコミどころ満載かと思います。さすがに、本物の救急センターに取材するわけにも行かず、テレビドラマなどから想像して書いた部分ですので、なにとぞ平にご容赦を。

だったら、主人公の職業を医者にしなれば良いだけのことなのですが、一度お医者さまを主人公にしたかったのです。

そんな主人公の造形にも苦労しました。実はこれまでで、一番大人なのです。（拙作「風の海」の主人公は、設定上二十代後半）

だいたい、わたしの小説の主人公は十代が多く、また女性が多いため、その切り替えには苦労しました。

また、これまでの主人公の中で、もっとも後ろ向きな性格をしています。その方が、シリアスな物語において心理描写を描くには、ラクなのですが、こちらまで暗い気持ちになるのは、玉に瑕です。

そんな登場人物たちには、毎回恒例（？）の「名前の法則」があります。気付かれた方はいらっしゃいますでしょうか？ 登場人物は、以下の人たちです。

『七尾（秋人の元同僚）、津田親子（火傷患者）、則本マサキ（最

初に運び込まれた患者）、平沢（看護師）、乃木春江、野崎秋人、杉本四郎、高瀬梨花、留守冬男、神野武（不良）、浅井夏音』

分かります？ 苗字だけを平仮名にしてみました。

『ななお、つだ、のりもと、ひらさわ、のぎ、のざき、すぎもと、たかせ、るす、じんの、あさい』

……

……

……

そうです、苗字の頭文字が、「なつのひのすたるじあ（夏の日のノスタルジア）」となっているんです。分かりづらくてごめんなさい。しかも、急遽登場させた「伸由さん」の名前は何処にも入れないので、苗字を設定しませんでした。

久々にシリアスな小説を書いた身としては、読んで下った方かいると言うだけでも、この上ない幸せなのですが、皆様の目にどのように映ったのか気になるところであります。

もしも、何か思うところがあれば、是非お気軽に、ご意見・ご感想など書いていただけると、嬉しく思います。また、ご意見・ご感想は、いつまでも受け付けております。

今回は、どのような物語にするか、早速思案しています。まだ、未定ですが、頑張つて、少しでも精進できるように、書いていきたいと思っております。その際には、またよろしく願います。

このたびは、本当にありがとうございました。また、皆様にお会いできることを願いつつ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0841n/>

夏の日ノノスタルジア

2010年10月8日12時18分発行